昭和50年度秋田城跡発掘調査概報

秋田城跡

秋田市教育委員会

序

昭和47年、秋田城跡発掘調査事務所を創設して、早くも四年の歳月を経過したが、この間、現状変更等による緊急調査に対処しながらも、基本的には秋田城跡の性格把握を主眼として調査を進めてきた。

幸い二年次の第10次調査地において、東辺外郭線（築地塀）の一端を発見するにおよび、以来、外郭線の追跡調査を重点に調査を進めてきた。その結果、秋田城跡の性格をほぼ想定できる成果を得たことは、今後の調査計画策定上の基礎資料となるばかりでなく、調査の方向を示していると信じるものである。

このように、順調に調査事業を遂行できたことは、ひとえに国、県、多賀城跡調査研究所をはじめ、先輩諸氏の指導援助、地元のかたがたの協力の賜ものと深く感謝申しあげると共に、今後の調査についても、さらに指導援助を切にお願い申しあげるしだいである。

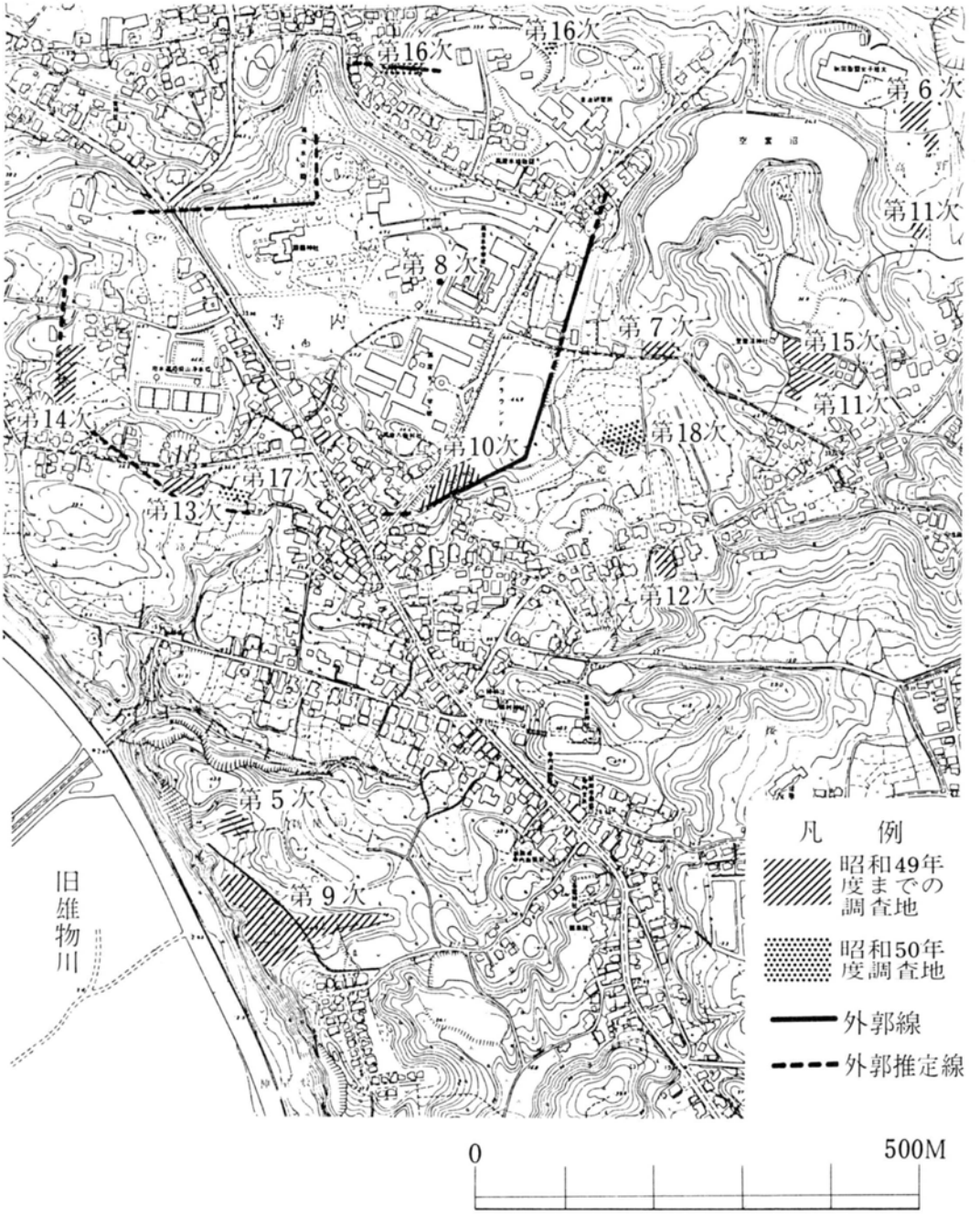
本概報は、50年度に実施した調査結果をまとめたものであるが、東北古代史研究の一資料として活用されると共に、秋田城跡の保護対策の一助となれば関係者一同の大きな喜びである。

昭和51年3月

秋田市教育長　佐　藤　博　之

目　　次

Ⅰ　調査の計画……3
　1）遺構・遺物の標示と整理方法……4
Ⅱ　第16次発掘調査……5
　1）調　査　経　過……5
　2）発　見　遺　構……7
　3）出　土　遺　物……11
Ⅲ　第17次発掘調査……13
　1）調　査　経　過……13
　2）発見遺構と出土遺物……18
　3）各層位出土遺物……48
　4）墨　書　土　器……60
Ⅳ　第18次調査……77
Ⅴ　考　　察……77
　1）外郭について……77
　2）住居跡について……79
　3）出土土器について……81



第1図 秋田城跡地形図及び調査地域図

Ⅰ 調 査 の 計 画

昭和50年度の調査は、外郭線および前回の国営調査で四天王寺跡と考えられた鵜ノ木地区の究明を目的として、別表の如く実施計画を立案した（表Ⅰ）。

調査費は、前年度と同額の国庫補助対象事業の内示（総事業費 800万円のうち、国庫補助額50%、県費補助額25%、市負担額25%）を得、さらに宮城県教育委員会の特段のご配慮と多賀城跡調査研究所の継続指導を得ながら事業を遂行することになった。

表 Ⅰ　発 掘 調 査 計 画 表

調査次数	調　査　地　区	発掘面積 m² (坪)	調査実施期間
第 16 次	外郭北地区（幣切山西端部）	496 m² (150)	4月5日～5月25日
第 17 次	外郭南地区（大小路北部）	662 m² (200)	6月1日～7月25日
第 18 次	外郭西地区（西辺外郭線）	496 m² (150)	8月1日～8月31日
第 19 次	推定四天王寺跡地区	826 m² (250)	9月5日～10月31日

第16次調査は、東西に走る北辺の築地外郭線を検出し、ほぼ予定どおり調査を終了した。

ところが、南辺外郭線の追求を目的とした大小路北部地区では、築地外郭線を検出できず、しかも発掘区全域にわたって、約2.50 m という遺構群の深さに加えて、掘立柱建物や数十軒の竪穴住居跡が密集し、それに伴なう多量の出土遺物のため大巾な調査期間の延期を余儀無くされた。

そのため、第18次調査に予定された焼山西北部は、来年度の調査計画に繰り越す結果となった。したがって、第19次調査で実施することになっていた鵜ノ木地区を第18次調査とした。しかし、予算の関係で作業は、一部の表土剝ぎの段階で打ち切りとなり、来年度も第18次の継続調査として残される結果となり、昭和50年度の実施状況はつぎのとおりである。

表 Ⅱ　調 査 実 施 状 況

調査次数	調　査　地　区	発掘面積 m² (坪)	調　査　期　間
第 16 次	外郭北地区（幣切山西端部）	470 m² (142)	4月7日～6月4日
第 17 次	外郭南地区（大小路北部）	650 m² (197)	6月5日～11月8日
第 18 次	推定四天王寺跡地区	180 m² (55)	11月10日～11月18日

当初、3ヶ所の外郭線調査の計画であったが、複雑且つ数層の遺構群と厚い遺物堆積層の調査のため1ヶ所にとどまった。

なお、発見遺構の性格上、瓦・土器等の出土遺物は、年間を通じて整理作業を行なった。

（小　松　正　夫）

2)遺構・遺物の標示、整理方法

過去4年間および前回の国営調査において検出された遺構は数百にのぼるものと考えられる。また今後も調査の継続に伴なって益々増え続けるものと考えられるが、これまでの次数ごとの名称および番号の登録のみでは、資料の増大に伴なって混同の危険性が非常に大きいものと考え、50年度の調査から下記の方法に基づいて記録、登録を行なうこととした。

遺構の標示

遺構の標示については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、および宮城県多賀城跡調査研究所において用いている方法に基づいて作成し、それに若干の項目を付け加えた。すなわち、発見遺構には、検出順に一連番号を付し、さらに番号の前には、遺構の種類を示すアルファベット記号2文字を付す（表Ⅲ）。さらにほぼ同位置において改築された遺構については、番号の後に、旧い順にA、B、C等のアルファベット記号を用いる。

表 Ⅲ　遺構・遺物の分類記号表

遺構				遺物			
SA	柵列、ピット群、柵	SG	苑池	A	土製品	S	石製品
SB	建物	SH	広場	B	漆器	T	鉄(銅)製品
SC	廊	SI	竪穴住居	C	繊維製品	X	その他
SD	溝	SK	土坑	D	土器		
SE	井戸	SL	土塁	K	瓦塼		
SF	築地	SX	その他	M	木製品		

一連記号の001～100までは、昭和34年から37年に検出した遺構に用いる。従って昭和47年以降は、第5次調査の101から番号を付すこととする。

例えば、第5次調査検出の土塁は、SL101とする。

遺物の標示と整理

遺物の標示については、当初の方法を継続して実施する（表Ⅲ）。整理については、実測可能なもの（約全体の¼以上遺存の遺物あるいは、小片であるが特殊な遺物）に、一連の通し番号を、土器および遺物整理台帳に記録する。したがって、遺物の収蔵も、整理番号順に整理箱に収納する。またすべての作業に関連性を持たせるため、写真台帳の番号、報告書（概報）等にも、整理番号を付すこととする。なお、復原不可能な遺物は3 m方眼ごとに各グリット番号、層位、日付を付し、次数あるいは、出土層位ごとに一括して収蔵する。

発掘区原点の設定方法

これまで、調査地への原点移動は各次数ごとに護国神社グラウンドに設置した測量原点より、測量を行なってきた。しかし、測点移動を行なうには、これまで用いている方法では、測量方法あるいは、技術的に問題があり精密度を欠いている。そこで、昭和49年度は測量専門家に依頼し史跡内の10ヶ所の要所に護国神社グラウンド原点より、精密な測量方法によって、実施した測量基準点を設置した。

すなわち、任意に選択した10ヶ所に基準点と、それに付随する点、各２点づつ、測量杭を埋設した。埋設にあたっては、長期使用に耐えうる必要性から、コンクリートのマンホール（470×470×470）を使用し、その中にコンクリート柱を埋め、上方は厚さ約15cm程の生コンを流し固定した。

埋設した各基準杭には、原点からの距離および、寺内農協横に埋設されているベンチマークより移動した海抜高度を設けた。

表Ⅳ　多角点成果表

測点	X (km m)	Y (km m)	H (m)	S (m)	L (° ′ ″)
1	+ 223 739	+ 1 940	45 231		
				65 445	107 51 57
501	+ 286 028	− 18 138			
				106 706	96 02 07
2	+ 392 143	− 29 357	38 222		
				94 680	189 42 46
3	+ 376 169	− 122 680	38 602		
				163 590	73 59 04
4	+ 533 410	− 77 546	42 631		
				78 691	17 57 01
502	+ 557 662	− 2 685			
				302 912	2 13 45
503	+ 569 455	+ 299 997			
				311 368	274 33 39
5	+ 259 073	+ 324 756	46 253		
				149 016	254 50 44
6	+ 115 239	+ 285 800	42 521		
				106 853	211 43 03
504	+ 59 063	+ 194 905			
				124 688	246 41 41
505	− 55 452	+ 145 575			
				123 732	233 01 26
7	− 154 300	+ 71 152	46 082		
				69 454	183 00 49
506	− 157 952	+ 1 794			
				102 884	281 10 37
8	− 258 885	+ 21 737	44 538		
				105 249	189 40 42
507	− 276 580	− 82 014			
				457 850	154 31 45
509	− 79 679	− 495 362			
				488 783	14 51 11
10	+ 45 618	− 22 912	48 376		
				885 360	57 45 52
510	+ 117 821	+ 22 619			
				107 918	101 02 50
1	+ 223 739	+ 1 940	45 231		

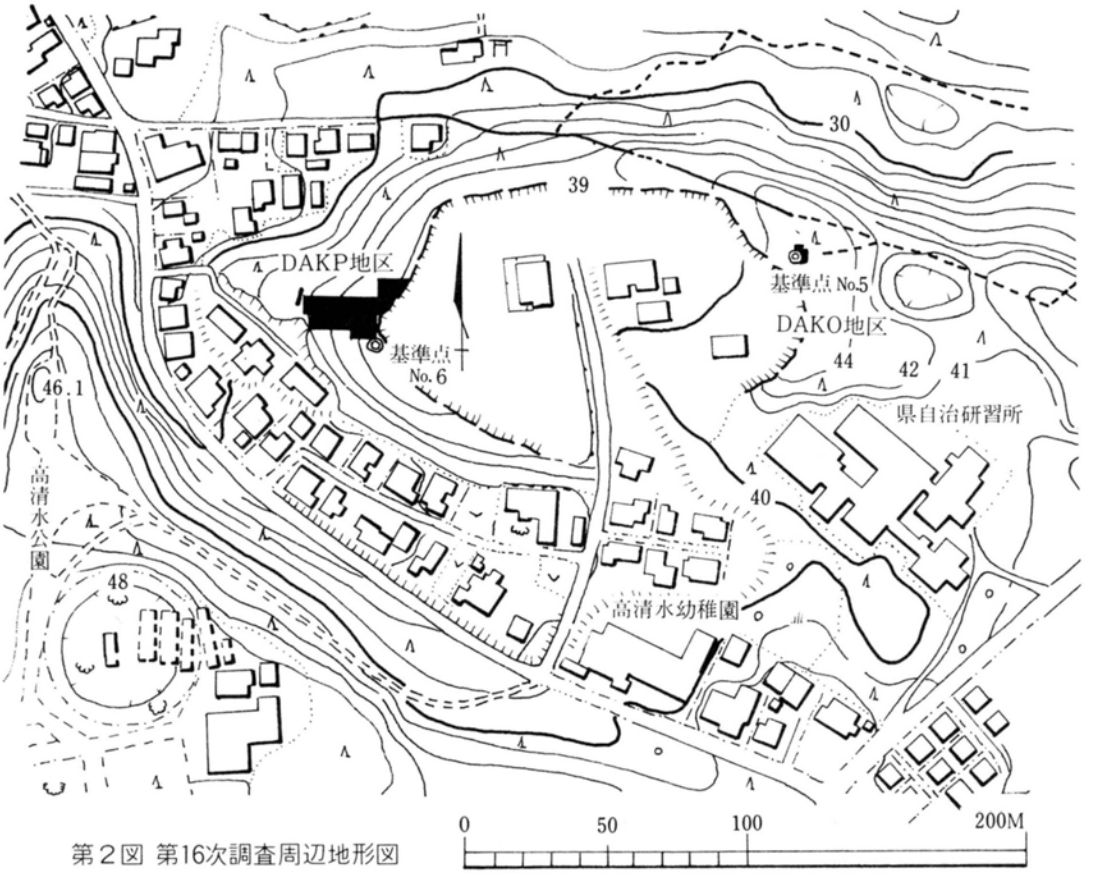
たとえば実際の調査地点設定は、調査地の最も近くに位置する測量基準点にトランシットをセットし、付随点を視準する。そして表Ⅳによるα の角度にトランシットを回転すれば、その測量基準点における真北を指すことになる。各測量基準点からの測点移動は、２～３点で調査地まで移動が可能であるから、測点移動による誤差は、最小限にとどめることができる。　　（小　松　正　夫）

Ⅱ　第16次発掘調査

1）調査経過

第16次調査は、将軍野南一丁目（通称　幣切山）を対象とした。幣切山西端部は、秋田城跡外郭線の北辺と考えられ、その構造と性格把握を目的とし、４月７日から６月４日まで実施した。調査面積は、約470m²（約142坪）である。

４月７日、調査地区の草刈りを行ない、翌８日は測量基準点No.6（X＝115.239 m、y＝285.800 m、h＝42.521 m）より測点を移動した。９日から16日まで表土除去作業。ST－62グリットでは、



第２図 第16次調査周辺地形図

築地崩壊土と考えられる黄褐色粘土層を確認した。17日は、巾１ｍの土層観察用トレンチを設定、掘り下げた結果、黄色粘土と褐色粘土を互層に版築した築地積土を確認した。積土は、極めて薄く30cm前後で東西に延びている。22日、ＳＱ、ＳＲ－66、67で不整円形を呈する堀り方を検出した。25日まで掘り方周辺を精査。円形の掘り方は、第10次、第14次で検出した６本の掘立柱建物跡と同規模の遺構であった。また、その棟通りを溝状遺構が走っているのも前者と同様である。26日～30日は、ＳＱ－62～65グリットで築地に接する掘り方を２箇所検出したが、建物の規模、築地積土との前後関係は明確にでき得なかった。

５月１日、ＳＱ－68グリットを拡張した結果、溝状遺構は築地線上を離れて西南の沢方向に曲折することが明確となった。築地崩壊瓦は、大部分北側の深い谷方向に流れ落ちたと考えられ、ＳＳ－62～65で検出されたが微量であった。６日は、66～69ライン上で築地積土が確認できなかったため、ＳＴ－71グリットに巾１ｍのトレンチを設定し精査したところ、黄色粘土で版築された築地積土を確認した。積土の規模は、厚さ約１ｍ、基底巾約2.50ｍ程である。13日、数日かけて土層観察用の畦を取りはずし、築地精査を実施したが、積土遺存度が悪く検出不可能であった。しかし、数ヶ所で積手の違いが認められた。築地積土の北側を一部掘り込んだ溝状遺構の壁は、ほぼ垂直に深

さ約1.20 m に達した。また、15日は掘立柱建物と溝状遺構の新旧関係を検討した。その結果、掘立柱掘り方を設け、柱を埋設した後に溝状遺構を掘り込んでいることが判明した。16日は、ＳＲ－62で検出された築地の東延長線を確認するため、調査地から約200 m 東の台地にグリットを設定した（ＤＡＫＯ区）。21日には、やり方設定を終了、Ｏ区を併行して調査、実測を行なった。Ｐ区は、26日に実測のすべてを終了した。Ｏ区は、約61 m^2、深さ約２ m の飛砂層まで掘り下げたが、なんら遺構を確認することができなかったため、平板実測を行ない調査を終了した。

27日、全景写真、部分写真撮影を実施。６月２日より埋め戻し作業に入り、４日に完了した。

2） 発見遺構

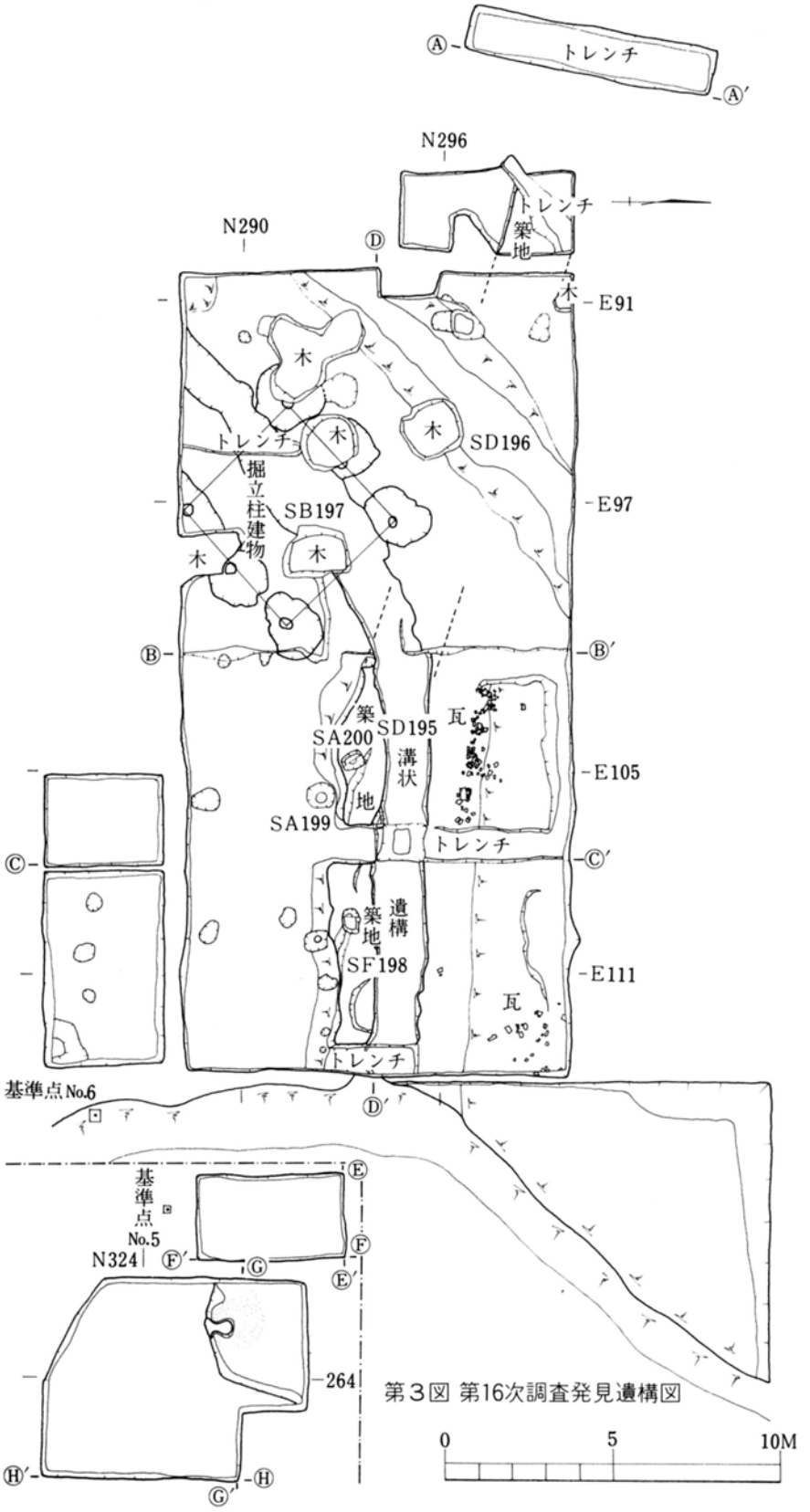
ＳＦ198築　地　跡（第３、５図、図版３）

今次調査で検出した築地は外郭線北辺にあたる。ほぼ東西方向に走るが西側ではわずかに北に屈折する。遺存状態の良い西側トレンチの断面Ａ－Ａ′（第５図）の観察では地山飛砂層に直接基底巾2.3 m の築地本体を積み上げている。飛砂層上面には多量の炭化物がみとめられ、第14次調査の状態と同じである。周辺には土留めの施設等は検出していない。積土は部分的に異なるが黄色粘土、赤褐色粘土、砂質土等を丹念に互層に版築しており、遺存状態の良好な個所では70cm、平均して30cm前後である（図版５）。Ｄ－Ｄ′の断面（第５図）にみられるように約３ m 程で積手の違いがみとめられ、一定の範囲を長さ３ m 程のアテ板等を用いて除々に積み上げてゆく第14次調査の構築法と同様である。一気に積み上げたと考えられる個所もみとめられ、積土内に瓦の小片が含まれていることから、部分的な補修がなされていると考えられる。第10次、第13次、第14次調査では積土にはまったく遺物が含まれていなかった。瓦は築地北側で比較的多く崩壊土（30～90cm）の最下層から出土している。南側では瓦の出土が少なかった。

築地周辺でピットが検出しているが間隔が不規則であり、寄柱とは言い難い。又、築地を切るＳＡ200掘立柱掘り方、と築地南側に接するＳＡ199掘立柱掘り方は、後者が築地積土と同質の黄褐褐色粘土を埋土にしていること以外は性格は不明である（図版６上、下）。

ＳＤ195溝　状　遺　構（第３、５図、図版２の上、３の下、５の上）

ＳＦ198築地及び築地崩壊土を掘り込んで東西に走り、南に屈折する溝状遺構である。第10次、第13次、第14次調査でも検出しており、１間×２間のＳＢ197掘立柱建物跡と同時期と考えられる。前述の三調査地区においてはほぼ築地線に一致することが明らかになっているが、今次の調査地区東側ではＳＦ 198 築地跡北半分を切って東西に直線的に走り、西側でＳＦ 198 築地が北に屈折しているのとは反対に南に屈折していることが判明した。現存する溝の巾は 1.7 m 、深さ 1.3 m 程であるが本来は更に広く、深かったものと考えられる。埋土は砂質化した赤褐色砂質土の単層であり、瓦



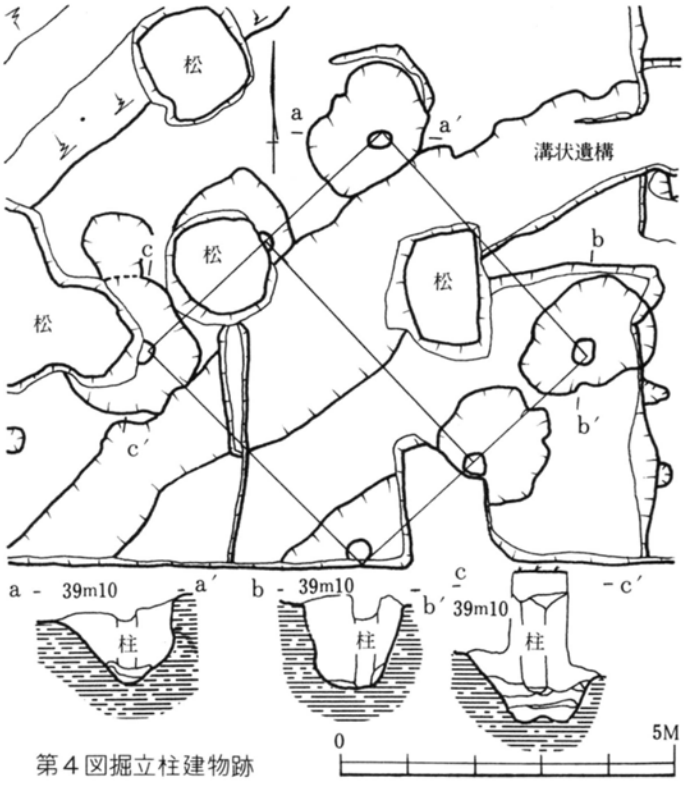
第３図 第16次調査発見遺構図

の破片を含んでいる。水性の堆積物等はみとめられず空堀り的な施設と考えられ、掘り方は立ち上りの急な、U字状を呈する。

ＳＢ197掘立柱建物跡

（第４図、図版３の下、４の上、図版６の中）

南に屈折したＳＤ195 溝状遺構を棟通りにまたぐ1間（4.5 *m*）×２間（2.25＋2.25 *m*）の掘立柱建物跡であり、いずれも直径約30*cm*の柱の痕跡がみられる。



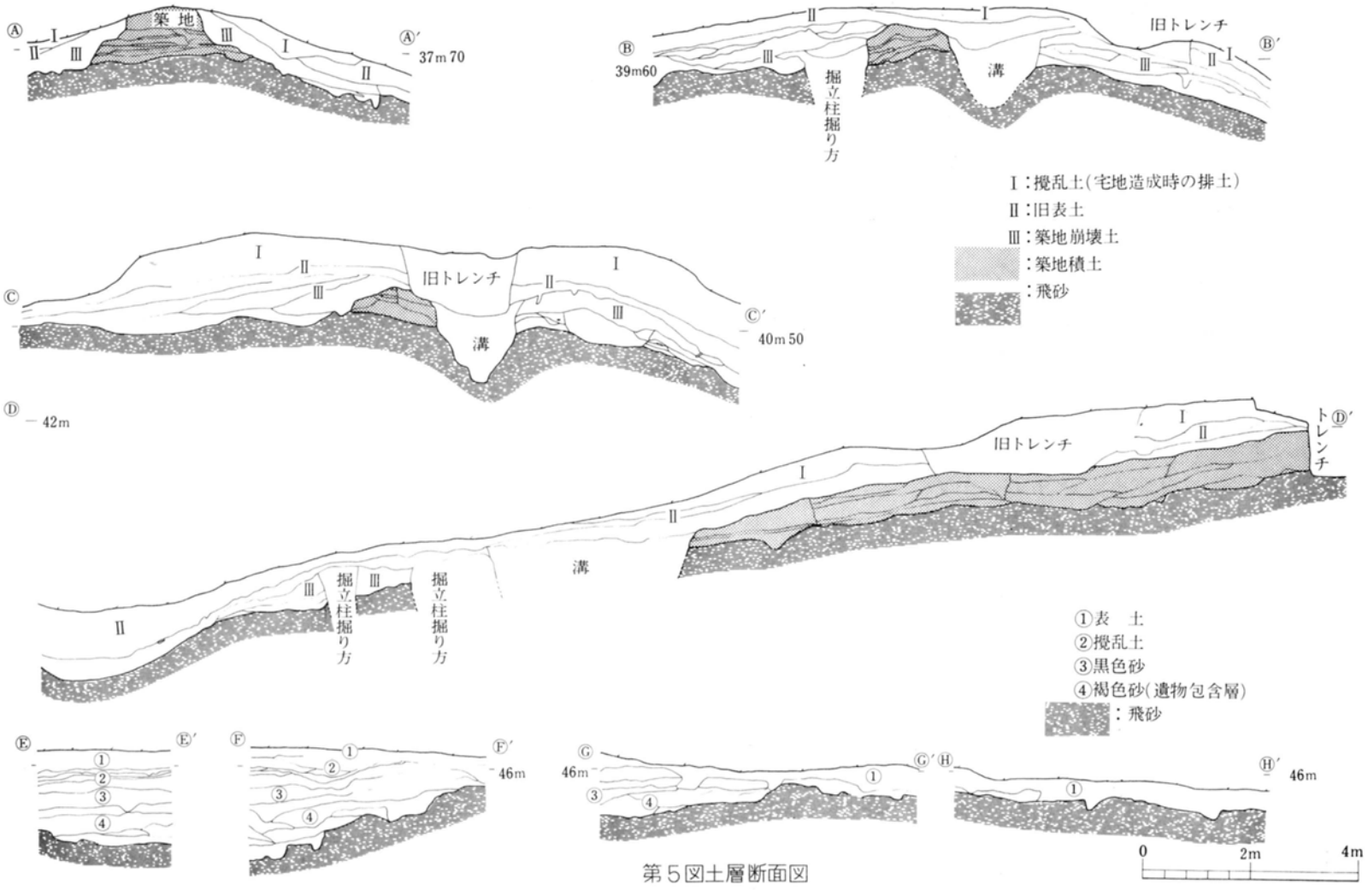
第４図掘立柱建物跡

掘り方は、円錐状、平面形は不整円形を呈し、径約1.5 *m*で築地崩壊土より掘り込まれている。傾斜面に構築されており、高い北側では1.2 *m*、低い南側では0.7 *m*程地山飛砂層を掘り込んでいる。柱の下端がほぼ水平に位置するように、飛砂の低い位置の掘り方（第４図Ｃ－Ｃ′）では柱の下に50*cm*程の粘土を固くつきかため入れている。埋土はいずれも瓦、礫を含み固くつきかためられており、粘土ブロックを含む赤褐色砂質土である。

平面及び断面観察の結果、ＳＢ197掘り方をＳＤ195掘り方が切っていることが判明した（図版３の下）。屈折したSD195の周辺は崩壊土と同質の赤褐色粘質土が堆積しており、ＳＦ198とSD195の屈折部では築地崩壊土との識別ができなかった。この赤褐色粘質土は瓦を含み固くつきかためられており、上層ではＳＢ197掘り方の平面形は観察できず、ある程度掘り下げた段階でないと把握できなかった。

以上のことからＳＤ195とＳＢ197建物の構築方法が推察される。すなわちＳＤ195がＳＦ198に一致する地区では築地崩壊土の高まりをそのまま利用してＳＤ195とＳＢ197建物を構築し、ＳＦ198から離れる地区では新たに積土し、固くつきかため土塁状の高まりを築造している。更にＳＢ197建物を構築し、その棟通りを通してＳＤ195を掘り込むというものである。ＳＢ197建物掘り方とＳＤ195の切り合いはこの工程の前後関係により生じたものと考えられる。

ＤＡＫＰ調査地東側に隣接する地区一帯はかつて標高43 *m*の小高い丘であったが昭和33年の宅地造成の際，削平され現在では基盤の礫混りの粘土層が露出している。昭和33年に翌年の国営調査きっ


Ⓐ
Ⓐ′
37m70
築地
Ⓑ
Ⓑ′
39m60
旧トレンチ
溝
掘立柱掘り方
Ⓒ
Ⓒ′
40m50
旧トレンチ
溝
Ⓓ
42m
Ⓓ′
トレンチ
旧トレンチ
溝
掘立柱掘り方
掘立柱掘り方
Ⅰ：撹乱土(宅地造成時の排土)
Ⅱ：旧表土
Ⅲ：築地崩壊土
：築地積土
：飛砂
①表　土
②撹乱土
③黒色砂
④褐色砂(遺物包含層)
：飛砂
Ⓔ
Ⓔ′
Ⓕ
Ⓕ′
46m
Ⓖ
Ⓖ′
46m
Ⓗ
Ⓗ′
46m
0
2m
4m

第5図土層断面図

かけともなる調査がなされている。

今次、調査地北東100 m程の地区で孤状に東西に走る土塁とカマド跡を検出しているが、今次調査のＳＦ198、ＳＤ195と直接、関連する遺構は報告されていない。既にこの時点で築地、溝状遺構等は削平されたものと考えられる。

更に東に延長したNo.６基準点付近のＤＡＫＯ地区（図版４の下）にグリッドを設定し調査を行った。焼土及び後述する遺物が出土したが、明確な遺構の検出はなかった。

3） 出土遺物

ＤＡＫＯ地区出土遺物

（第６図、図版26の10、11、14、15）

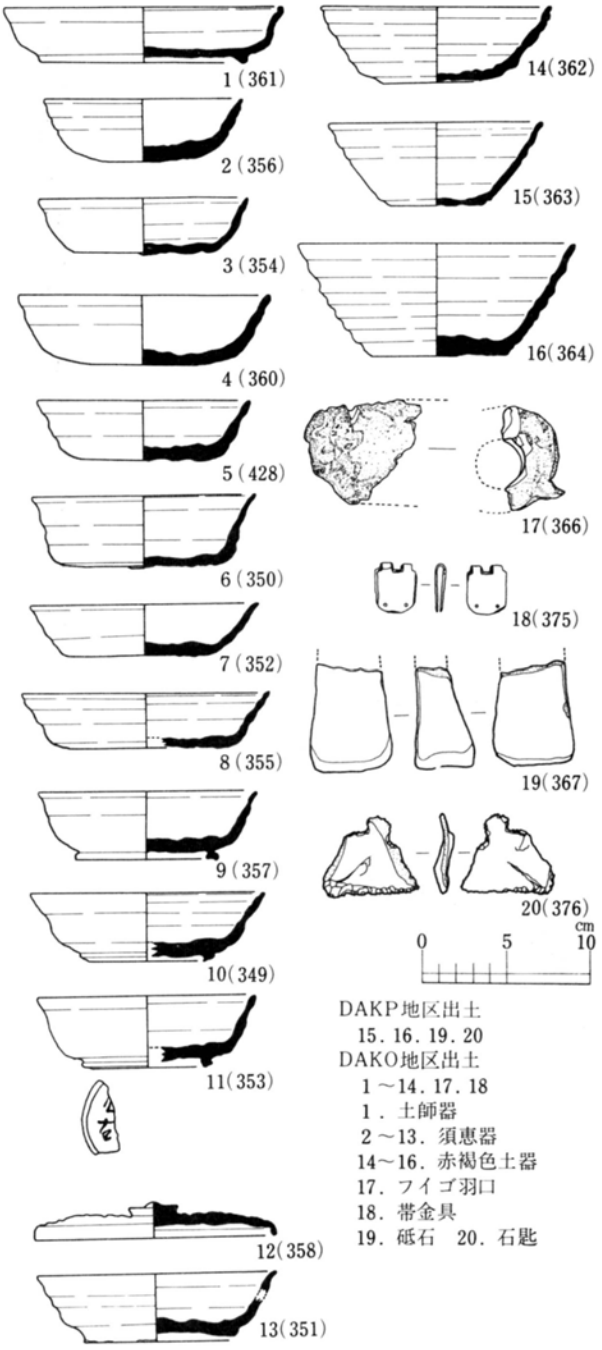
この地区では多量の瓦が出土した他は、遺構にともなう遺物の検出はなかった。

15、16は築地崩壊土土砂質土出土でいずれも切り離しは回転糸切りで再調整のない赤褐色土器である。19は表土出土の緑色凝灰岩の提げ砥石である。20は地山飛砂出土の横型の石匙で、自然面を残している。

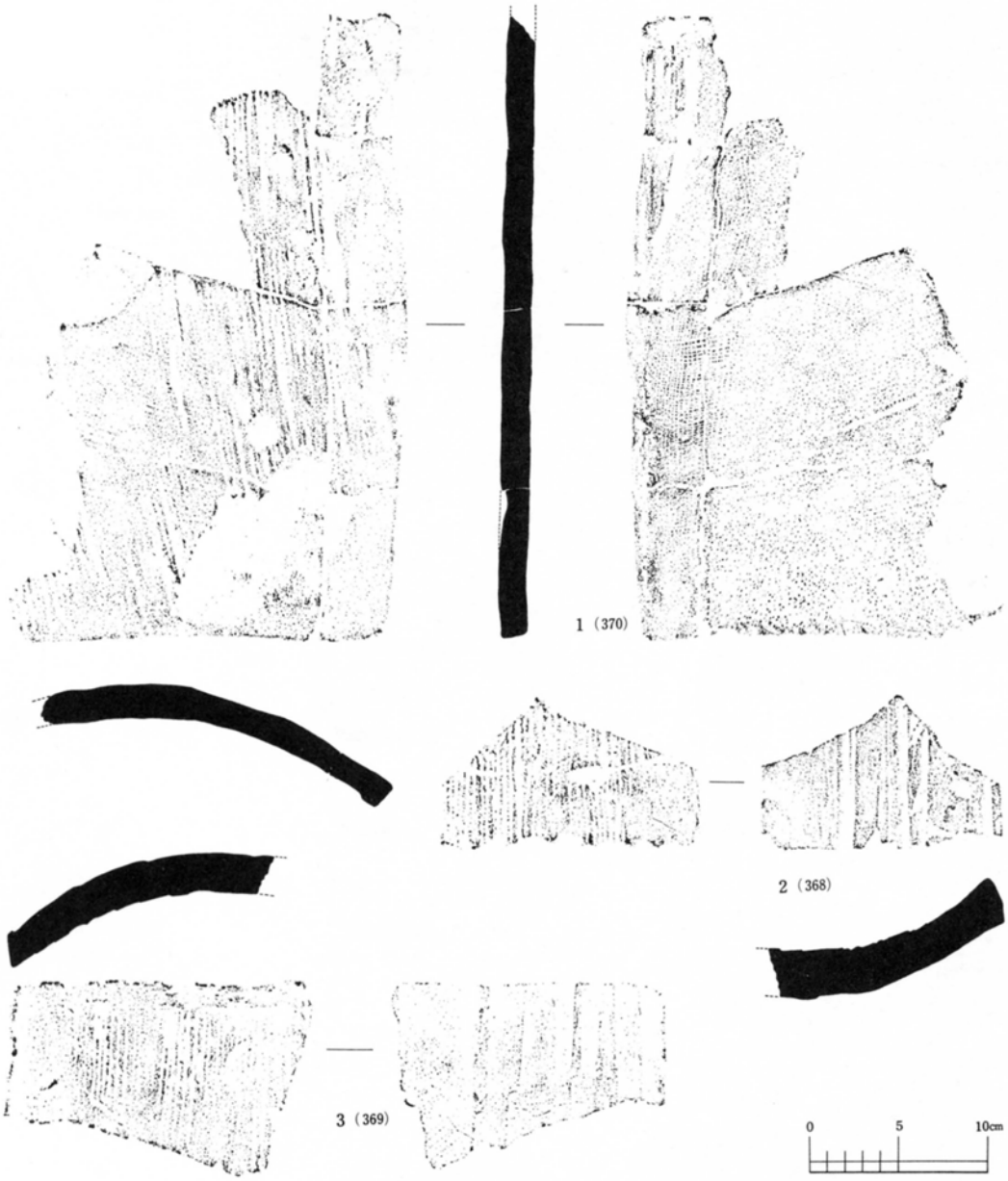
瓦（第７図、図版37の１、２、３）

築地崩壊土内及びその下層から多量の丸、平瓦が出土している。丸瓦はすべて叩き目をすり消した無段のもので円筒形の模骨に粘土板を巻きつけ二枚に分割したものである。

平瓦には大きく二種類みとめられ、１枚造りと、桶巻き４枚造りがある。



第６図　第16次発掘調査出土遺物



第７図出土瓦

4枚造りのものには4枚分の粘土板を桶状の模骨に巻きつけ、整形後、半截し各々に分割線を入れ更に乾燥後、或いは焼成後に再度分割する方法のものがみとめられる。

1は4枚造り2分割法のものと考えられ、最初の半截の際誤って切り込んだ分割線がみとめられる。又，割れ口は巾8～10cm間隔で観察され、粘土塊をつくる際の粘土板の厚さを示している。表裏にはほぼ横方向の糸切り痕があり、タタキ目は斜方向に走る。2は桶の痕跡と考えられる凹凸がみとめられ、タタキ目は縦方向に走る。3も桶の痕跡と考えられる凹凸のみとめられるもので、判然としないが結び目痕跡が板と板の接合部にみとめられる。タタキ目は縦方向、端部が突出していることから桶巻き4枚造りとしては矛盾しているが、4枚に分割した後、更に1枚ずつタタキしめている可能性がある。軒平瓦、軒丸瓦、格子目瓦の出土はなかった。

ＤＡＫＯ地区出土（第6図、図版26の1～9、12、13）

いずれも地山飛砂層に接する赤褐色砂層からの出土である。

1は非内黒の土師器台付杯で回転ヘラ切り後底部をナデている。体部外面は横方向に丹念にヘラミガキを行っている。2～8は回転ヘラ切りの須恵器杯である。3は底部にナデを行なっており、5は底部を木端状工具でカキ取っている。他はすべて再調整はない。4、5は半焼成のため赤褐色を呈する。9～11は回転ヘラ切りの須恵器台付杯で、いずれも台周辺はナデを行っている。焼成は良好である。11は底部外面に墨書がみとめられるが、判読は不能である。12は宝珠状のつまみを有する須恵器蓋である。切り離しは判然としないが回転ヘラ切りと考えられ天井部全体に自然釉がかかっている。内面は非常に磨滅しており硯に転用している。13は回転糸切り、再調整のない須恵器杯である。14は回転糸切り、再調整のない赤褐色土器である。17はフィゴの羽口で先端にはガラス状のの鉱鋳が付着している。18は両面に二つの小孔のある銅製の帯金具である。一枚の銅板を折り曲げ、折り曲げた部分の中央及び両端を切り取っている。他に回転ヘラ切り、底部全面に回転ヘラケズリ調整のある須恵器杯片、木葉痕のある土師甕底部片が出土している。

（日　野　　久）

Ⅲ　第17次発掘調査

1）調査経過

第17次発掘調査は寺内字大小路を対象に行なった。昨年度の第13次調査において東西に走る外郭線南辺の築地、溝状遺構を検出しており、その東の延長を確認する目的で行なった。結果として、外郭線の遺構の検出はなかったが、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡42棟、掘立柱列、それに多くの遺物を検出した。

調査地区は海抜30～32ｍの南緩斜面に形成された段状をなす畑地の上部２段目にあたり、現在は荒地となっている。南側は２～３ｍの落差をもつ段状の畑地が南西に開く谷に向かって続き、北側は一段高い道路を隔だて焼山の南斜面となっている。護国神社に設置した基準点より西に約90ｍ、南に約170ｍで、昨年度の第13次調査地より東に約30ｍの地区である。

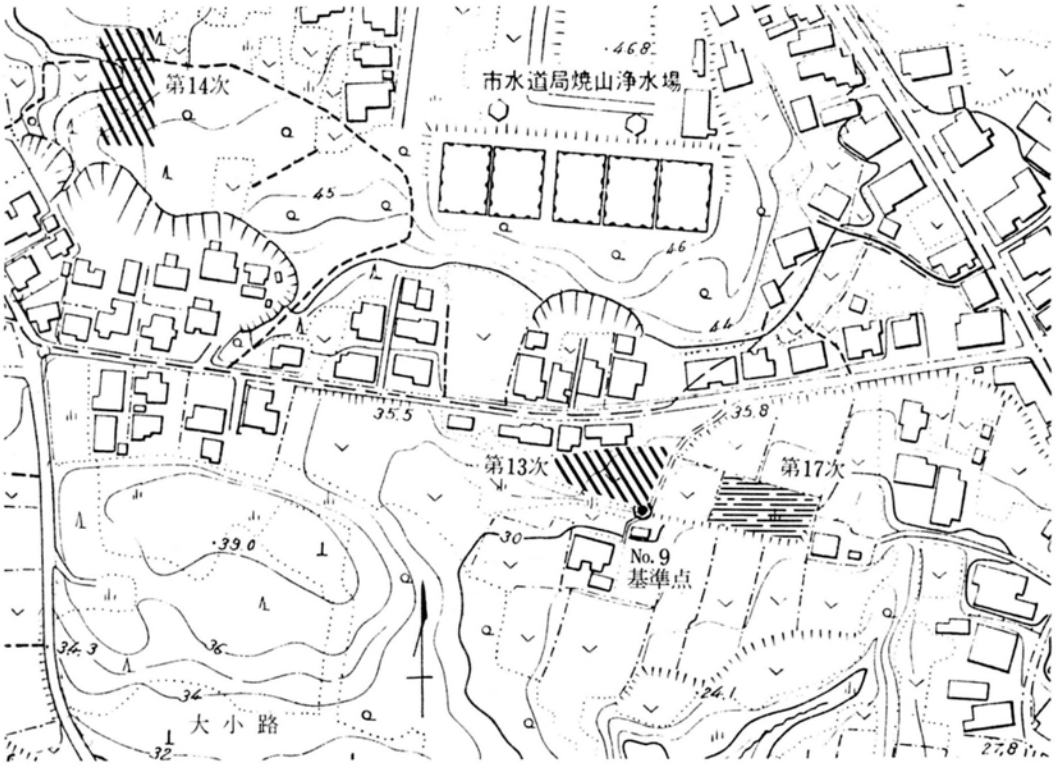
調査は６月５日～11月８日の期間で行ない、発掘面積は650ｍ²（197坪）である。当初計画として１ヶ月半の調査予定であったが、遺構が幾層にも及び、最下層の遺構面まで平均2.5ｍの深さのため大巾に調査期間を延長せざるを得なかった。

６月４日に調査地区の下刈りを開始し、No.9基準点（X＝－114,664ｍ、Y＝－188,099ｍ）より発掘基準点を移動し（X＝－92,439ｍ、Y＝－171,057ｍ）発掘区域にグリッド（３×３ｍ）を設定した（６月６日）。しかし、後日のやり方設定の際、グリッド南北線が真北に対し27°７′西に偏していることが明らかになったが、グリッド名は当初のまま使用した。

小グリッド（３×３ｍ）４つを１単位として西側地区から発掘を開始した。第１層は耕作土、第２、第３層は下部耕作土層、第４層は炭化物を多量に含む黒色土層、第５層は粘土ブロックの混入する黄褐色砂層で、第５層上面で点在する焼土を検出したため、この面まで西側地区を掘り下げた。フイゴロ、鉄滓、赤褐色土器、格子目瓦の出土が多く、点在する焼土は小鍛冶的な遺構と考えられたが、明確な遺構の検出はなかった（６月６日～13日）。次に中央地区を同様に第５層面まで掘り下げ、南側で表土から掘り込まれた現代の井戸の掘り方を検出した（６月17日）。中央地区でもフイゴロ鉄滓の出土が多く、第４層より赤褐色土器とともに緑釉陶器片が出土した（６月23日）。東側地区北では第５層の堆積が認められず、耕作土下層は焼土混りの粘土層となる。同地区南では小ピット、小溝列が検出したが攪乱によるものと考えられた（７月１日）。全地区を第５層面まで掘り下げた段階で、焼土及び出土遺物の位置等を記録にするため平板実測、レベル測定を行ない、終了グリッドから第５層を除去し、下層を調査していった（７月４日）。西側地区南の第５層面を精査している段階で東西に伸びるＳＤ251を検出した（７月10日）。第５層除去と併行して断面観察の畔の写真撮影、実測を行ない、終了後取り除いていった（７月22日）。第６層は粘質性の灰青色土であり、中央地区でＳＩ201、西側地区でＳＢ242の掘り方の一部を検出し、付近の精査を行なった（７月28日）。結果、２棟の時期の異なるＳＢ242、ＳＢ243掘立柱建物跡を確認、２間×３間の南北棟であることが判明した（８月18日）。中央地区でＳＩ202、ＳＩ203、ＳＩ204、ＳＩ205を検出（８月22日）、精査したところ、下層にも住居跡がみとめられ、重なり合った住居跡群と考えられた。ＳＩ206、ＳＩ207、ＳＩ211（９月１日）、ＳＩ208、ＳＩ210（９月３日）、住居壁に炭化材の残るＳＩ209（９月５日）同じく炭化材の残るＳＩ220（９月９日）を検出した。ＳＩ209、ＳＩ220の炭化材はポリエチレン、グリコールで固定した。第６層、第７層面に検出した住居跡は更に下層の調査を行うため、平板実測レベル測定、写真撮影後、除去していった。ＳＩ212、ＳＩ214（９月18日）、ＳＩ215、ＳＩ216（９月22日）、ＳＩ234（９月26日）を検出した。発掘区北側を東西に伸びるＳＤ250を検出、ＳＩ220を切っ

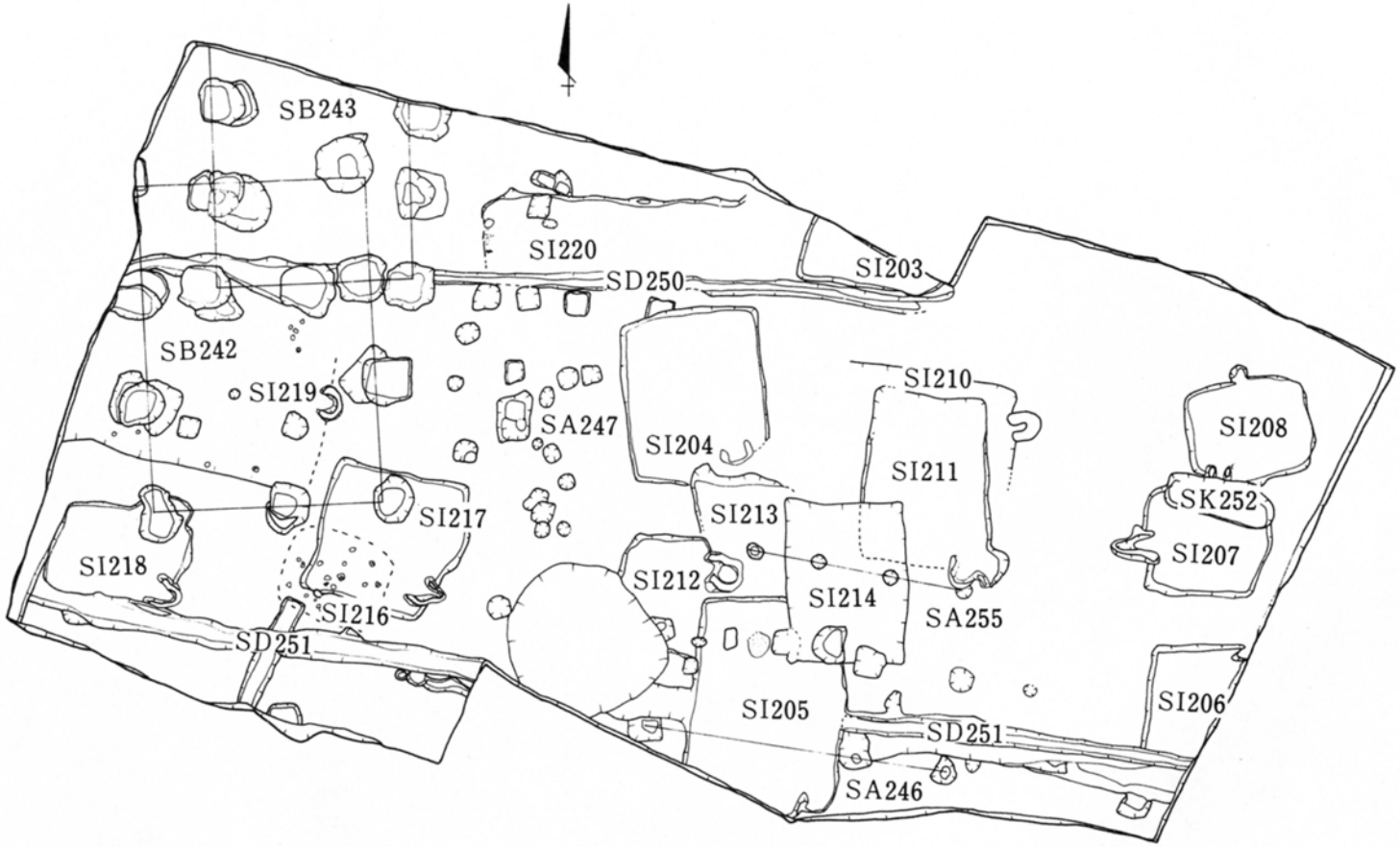
ており、ＳＢ242、243によって切られているのが確認された。これらＳＢ242、243周辺下層にも、掘り方精査の際、住居跡と考えられる炭化物層がみとめられたため、やり方を設定し、この平面実測、レベル測定を行ない、確認面を掘り下げていった。引き続き住居跡の調査を行なっていた中央地区、東側地区において、ＳＩ228（９月29日）、ＳＩ233、ＳＩ230（10月１日）、ＳＩ214床面下層でＳＩ225、ＳＩ224、ＳＩ230東でＳＩ231、ＳＩ233東でＳＩ235を検出した（10月２日）。ＳＢ242、243の確認面下層を調査していた西側地区においてもＳＩ218、ＳＩ217、ＳＩ219を検出した（10月３日）。住居跡群を追求するに従い発掘区全体が平均2.5m、深い個所で３ｍ以上に及び、地域全体が砂質土であることからも、度々、グリッド壁が崩落し危険な状態となったため、巾１ｍの段を設け、段状に掘り下げ調査を行った（10日20日）。この段階で発掘区全体が飛砂層に至り、発掘区を東西に走るＳＡ260を（10月21日）、西側地区にてＳＩ223、ＳＩ222、ＳＩ221を検出した（10月22日）。中央地区、東側地区においてＳＩ232（10月25）、ＳＩ226、ＳＩ229、ＳＩ238、ＳＩ236、ＳＩ237、ＳＩ240、ＳＩ239、ＳＩ227を検出した（10月30日）。発掘区全体が完全に飛砂層面まで達し、更に下層には遺構の存在が考えられないので、全体写真、航空写真撮影を行い、やり方を設定し、最終的な平面実測に入った（11月４日）。各々の住居跡及びカマドの平面図、断面図を作成し、写真撮影を行い、すべての調査を終了した（11月８日）。

（日　野　　久）



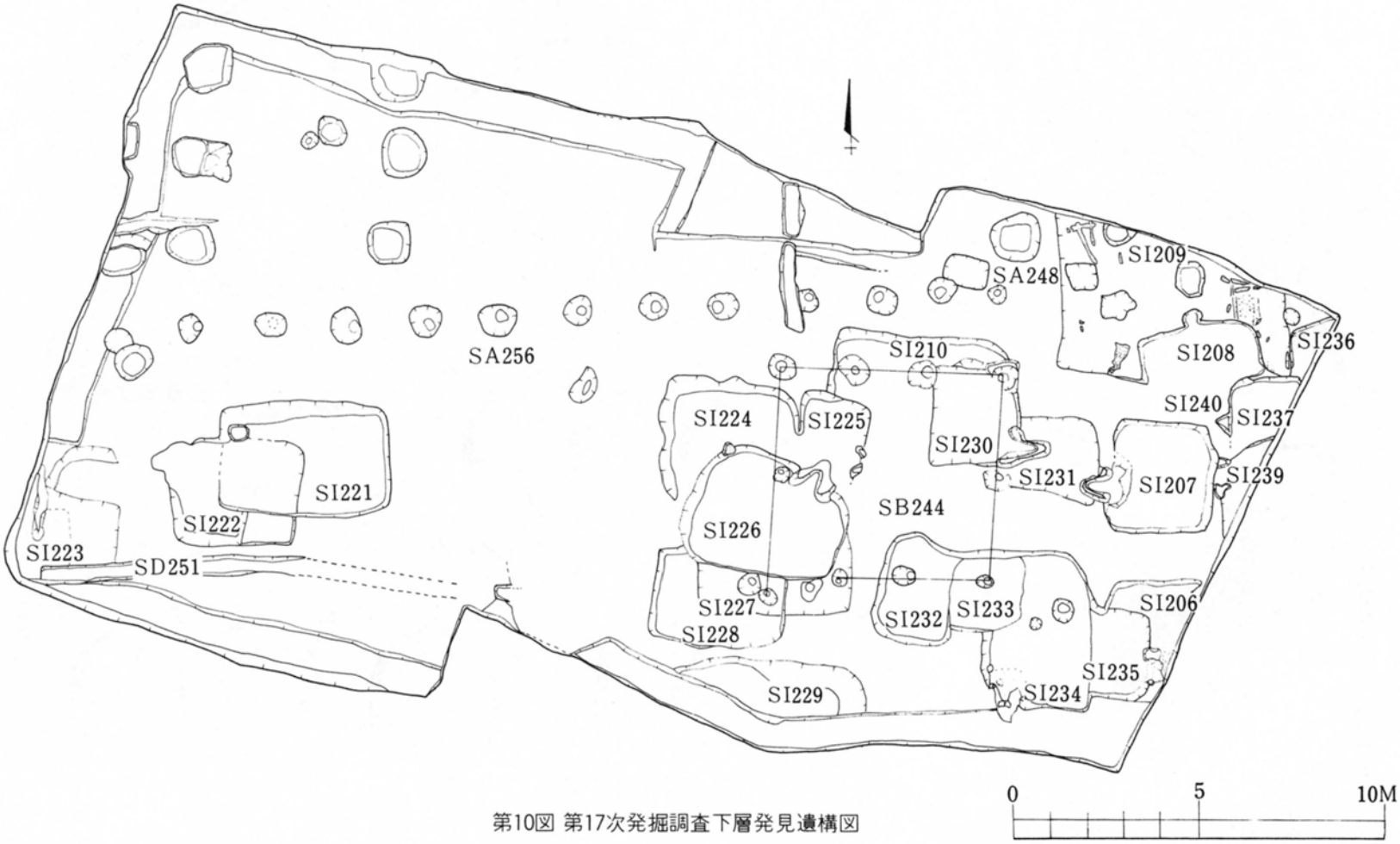
第８図　第17次調査周辺地形図

0　50　100　200M



0 5 10M

第９図 第17次発掘調査上層発見遺構図



第10図 第17次発掘調査下層発見遺構図

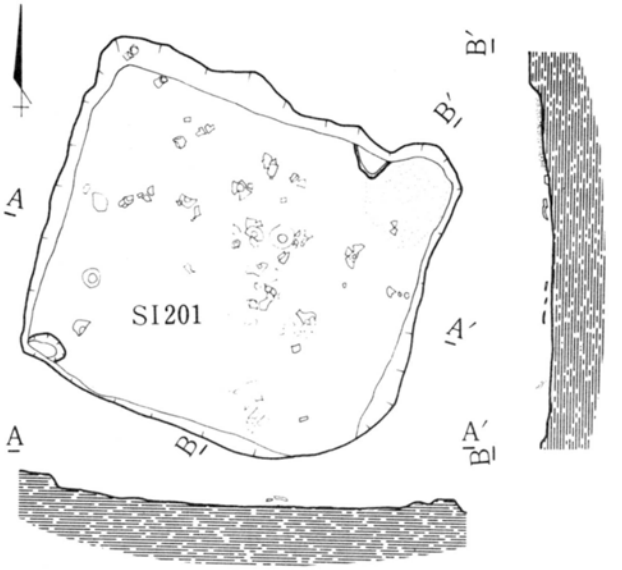
(2) 発見遺構と出土遺物

住居跡

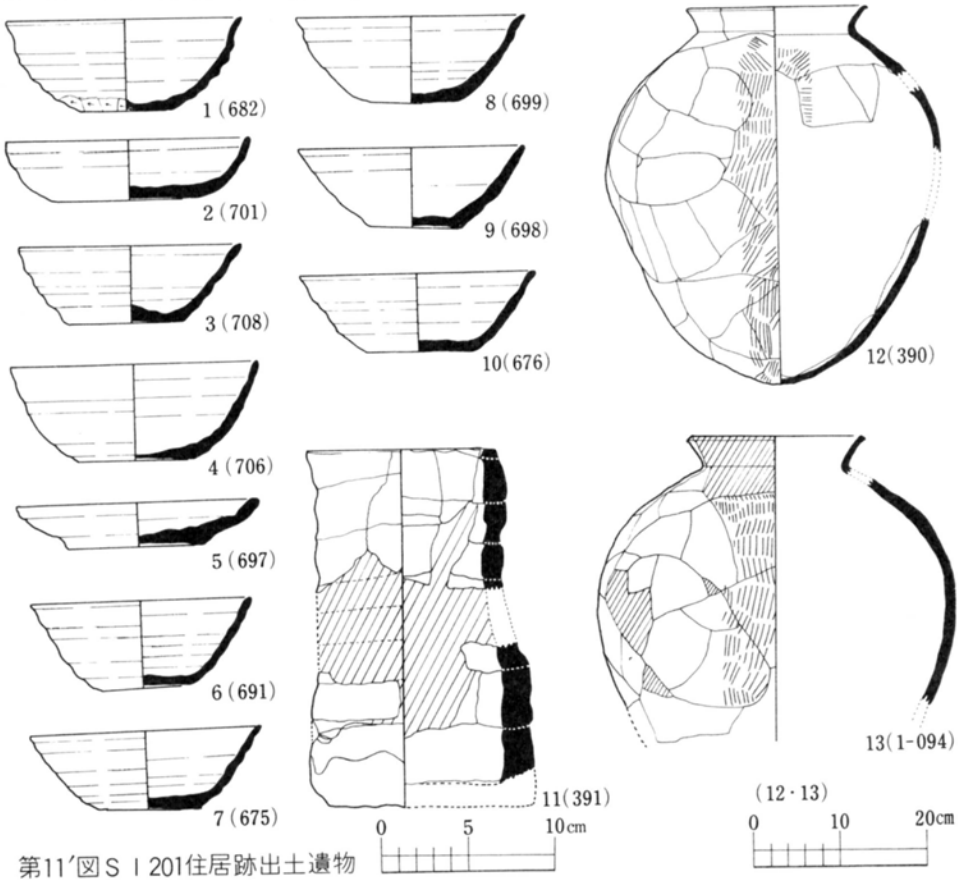
第17次調査で、密集した状態で42棟の竪穴住居跡が検出された。すべての住居跡に柱穴は認められない。

SI 201住居跡（第11図、図版11）

東西約 3.4 m、南北約 3.1 m のほぼ方形を呈する。第６層面で確認された。壁の状態は不良で、わずかに斜めに立ちあがっている。カマドと思われる痕跡は北東コーナー部にみられるが、両袖部は不明で、周辺には焼土、炭化物が多量に認められる。床面は全体に平



第11図 SI 201住居跡



第11′図 S I 201住居跡出土遺物

坦であり固くしまっている。

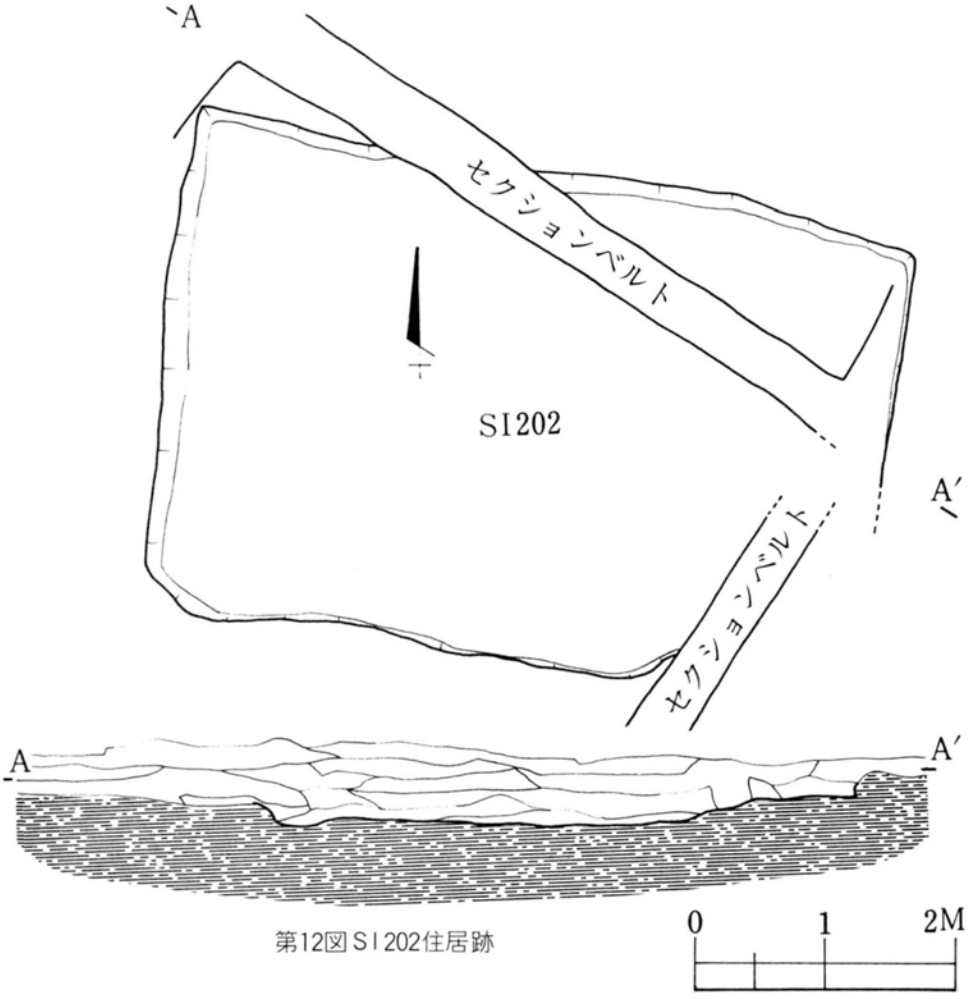
出土遺物（第11′図、図版26）

赤褐色土器

杯　2を除く他の土器は埋土内よりの出土である。1は回転糸切りで切り離し、ゆるく湾曲して立ちあがり、口縁部はわずかに外反する。体部下端には手持の荒いヘラケズリがみられる。3～10はいずれも回転糸切りで切り離し、再調整は施していない。胎土、焼成ともに良好である。2は床面より出土した杯で回転糸切りで切り離し、再調整はない。

円筒形土器

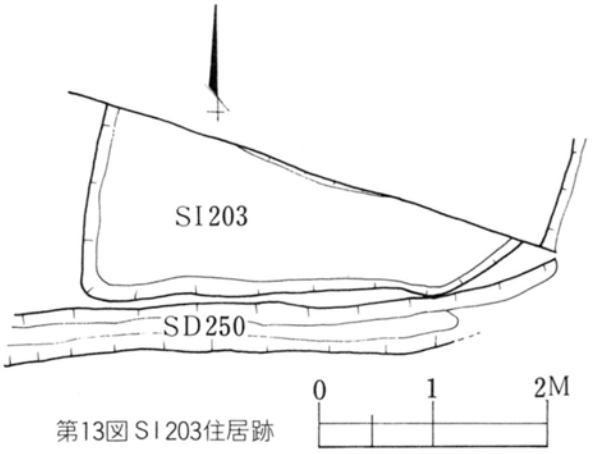
埋土内より3個体出土した。円筒形を呈し、明褐色である。中には口縁部に切り込みをもち、筒状を呈するものもある。11はその1点であり、口径11.2cm、器高21cmを測る。巾3cm程の粘土紐を左回りに巻きあげて成形しており、焼成は良好である。底部周辺は再加熱を受けて赤褐色を呈する。



第12図 SI 202住居跡

須恵器

甕　12は口径21㎝、器高44㎝を測る。13は口径20㎝、器高45㎝を測る。12、13ともに口縁部より頸部は内外面ともに横ナデを施している。体部から底部にかけては内面にアテ板を用い、外面に葉脈状のタタキ板で全体を叩きしめている。13は頸部より下方に自然釉がかかっている。12、13ともに胎土、焼成ともに良好である。



第13図 SI203住居跡

SI 202住居跡

（第12図、図版11）

東西5.6ｍ、南北3.8ｍの東西に長い、長方形のプランを呈する。壁の遺存状態も良好である。床面はゆるく凸凹をもつ。カマドは不明である。

出土遺物

（第15図1、2、図版27）

赤褐色土器

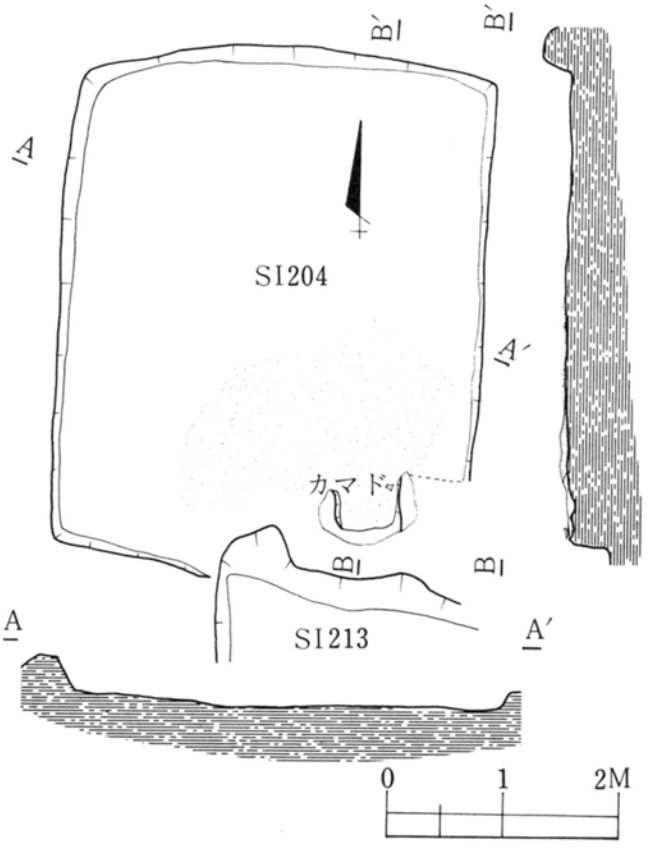
杯　1、2とも回転糸切りで再調整はない。1は内湾しながら立ちあがり口縁部は若干外反する。いずれも焼成はやや良好である。

SI 203住居跡（第13図）

調査地北側のグリットにかかっており南半分を検出したにすぎない。不整方形のプランを呈すると思われる。詳細は不明である。

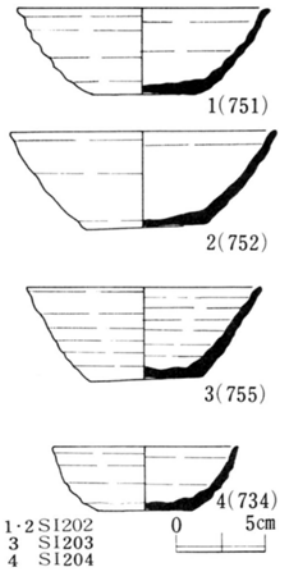
出土遺物（第15図3、図版27）

赤褐色土器



第14図 SI204住居跡

杯　3は回転糸切りで再調整はない。底部より斜めに真っすぐに立ちあがっている。胎土、焼成ともに良好である。



第15図出土遺物

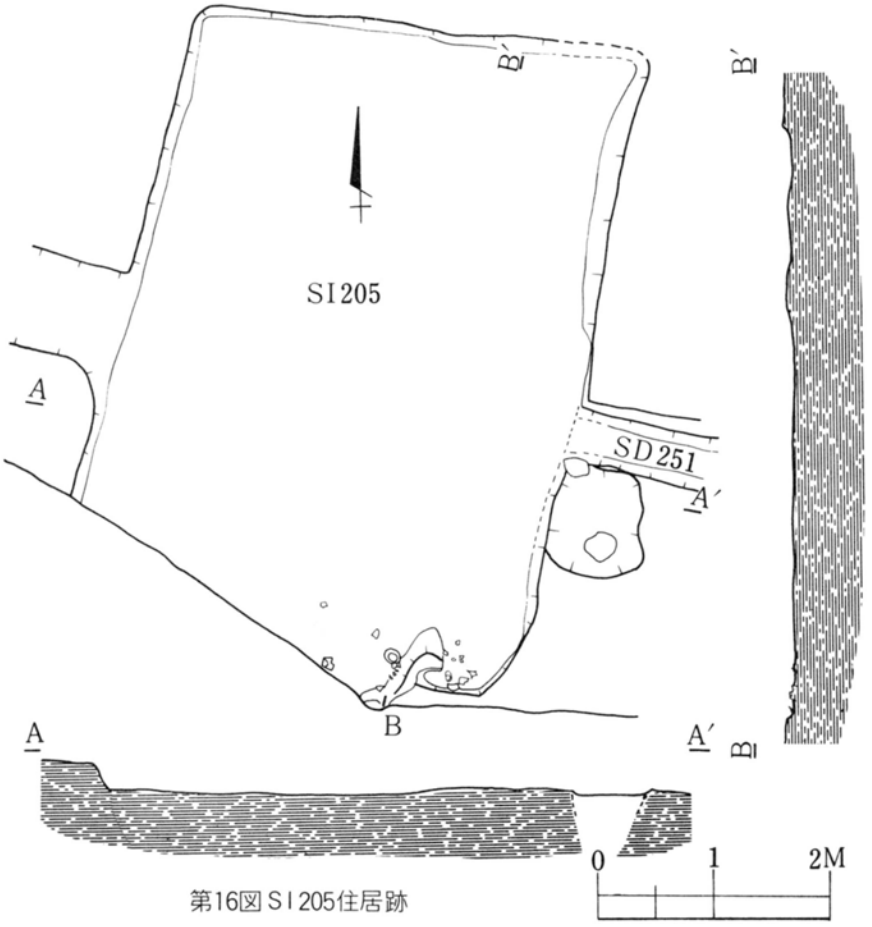
ＳＩ204住居跡（第14図、図版12）

東西約3.7ｍ、南北約4.2ｍのやや南北に長い、長方形のプランを呈する。壁は南壁が一部不明であるが、他は遺存状態も良好で、壁高は約30cmで斜めに立ちあがっている。床面は平坦で良好である。カマドは南壁の東寄りに粘土で構築されている。周辺には炭化物が広範囲に認められている。

出土遺物（第15図４、図版27）

赤褐色土器

杯　4は回転糸切りで、体部下端は手持のヘラケズリを施している。底部より内湾しながら立ちあがっている。焼成良好である。



第16図ＳＩ205住居跡

SI 205住居跡（第16図、図版12）

東西約4 m、南北約5.7 mの南北に長い長方形のプランを呈する。南壁に設置されたカマドの一部は調査地外のため検出できなかった。住居跡は東西に走る溝によって切られている。壁は西側では壁高30cmで遺存状態も良好であるが、北・東側はわずかに残る程度である。床面は平坦で固くしまって遺存状態も良好である。カマドは南壁の東寄りに粘土で構築している（第17図）。

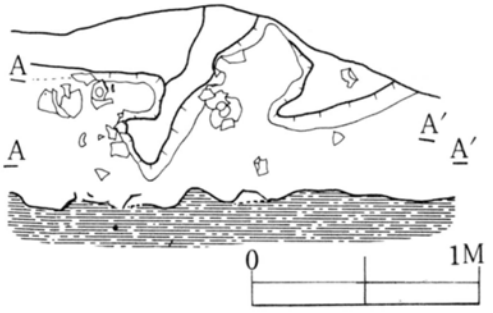
出土遺物（第18図、図版27）

赤褐色土器

杯　1・2、4～7、9・11・13はいずれも回転糸切りで切り離し再調整はみられない。胎土、焼成ともに良好であるが、1は再加熱をうけ胎土はもろい。2の内面には砂鉄の酸化物が付着している。11は内外面に煤状炭化物が付着している。

土師器

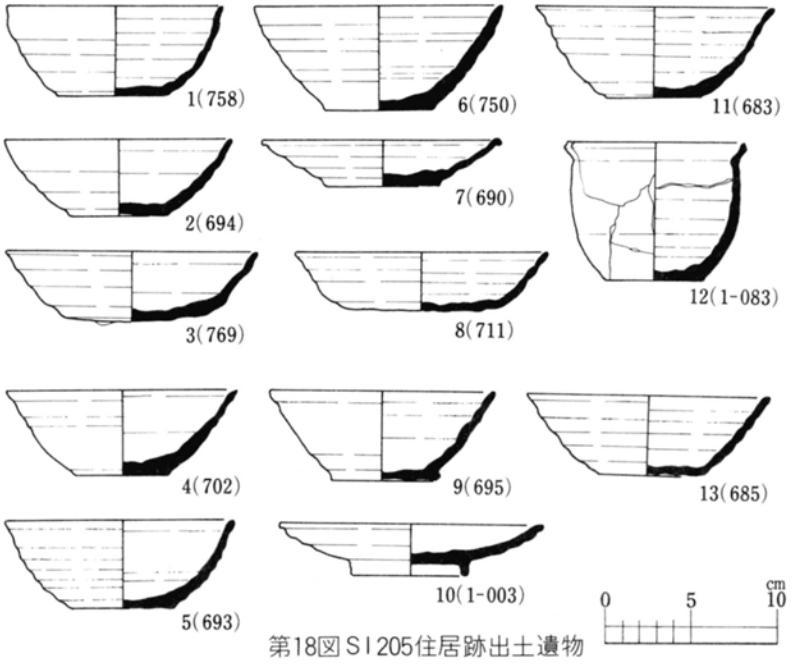
甕　底部を回転糸切りで切り離している。巻きあげの後にロクロによって整形され、内面にその痕跡がみられる。頸部よりゆるく外反している。外面胴部下方には回転ヘラケズリを施して整形している。内面頸部から口縁部には吹きこぼれ状の付着物がみられる。



第17図SI 205カマド

須恵器

杯　3、8ともに回転ヘラ切りであり、再調整はみられない。いずれも底部より丸味をもって立ちあがっている。3は内外面に火だすきがみられる。全体に鉄分を含む砂が付着している。8は胎土、焼成ともに良好で、重ね焼き痕がみられる。



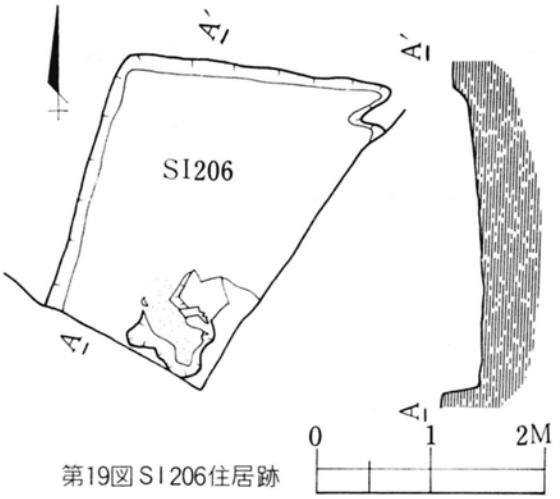
第18図SI205住居跡出土遺物

灰釉陶器

10は切り離し後、回転ヘラケズリを施し調整している。台は貼り付高台である。胎土、焼成ともに良好で、灰白色を呈する。内面全体に厚く釉がかかっている。

SI 206住居跡（第19図、図版17）

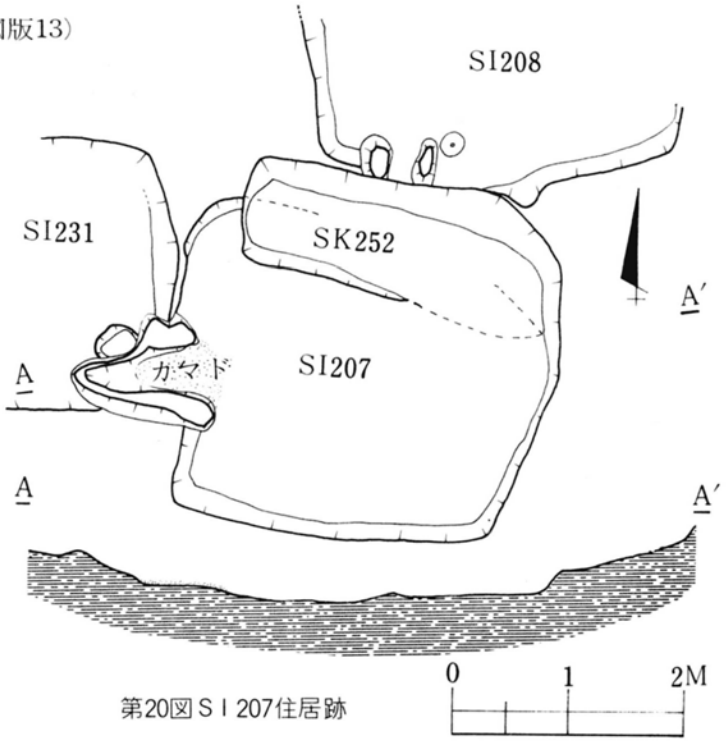
調査地東、南グリット壁にかかり、住居跡の一部を検出した。プランは方形を呈すると思われる。壁はゆるく立ちあがり、遺存状態は良好である。



第19図 SI 206住居跡

SI 207住居跡（第20図、図版13）

東西約3.3 m、南北約2.7 mのほぼ方形のプランを呈する北壁の大部分はSK252土坑によって切られ、西側の一部はSI231住居跡を切っている。壁高は約20cmでゆるく立ちあがる。遺存状態は良好である。カマドは西壁に設けられ、両袖部は粘土で固めた遺存状態の良好なものである。カマド内、焚口周辺には焼土、炭化物が認められる。床面は凸凹がみられる。



第20図 SI 207住居跡

出土遺物（第22図1、図版27）

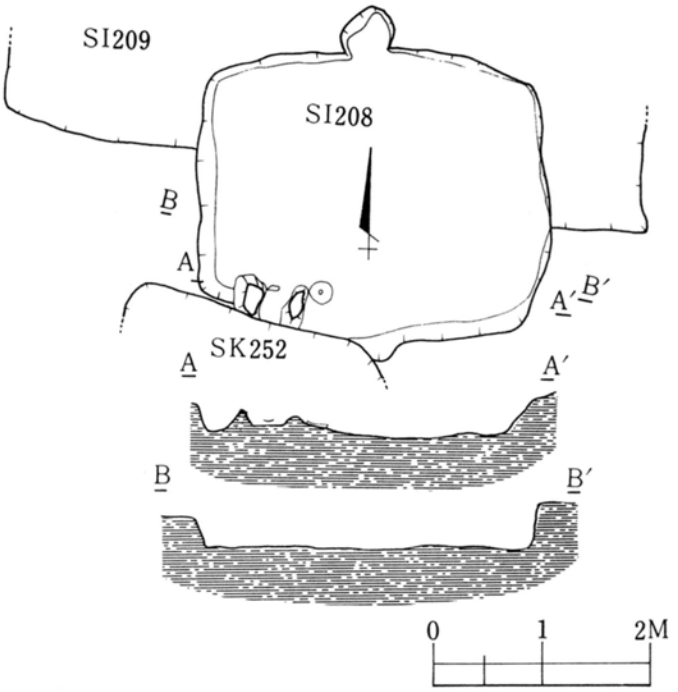
須恵器

杯　1は回転ヘラ切りで再調整はない。底部より丸味をもって立ちあがる。二次加熱をうけ内外面ともに黒色化を呈する。焼成は不良である。

SI 208住居跡

（第21図、図版14）

東西約3.3ｍ、南北約2.8ｍのほぼ方形のプランを呈する。北側ではＳＩ 209住居跡を切っており、南側はＳＫ252 土坑によって切られている。壁高は約30cmで部分的に異なるがほぼ垂直に立ちあがり、遺存状態は良好である。床面はゆるい凸凹をもつが良好である。カマドは南壁の西寄りに設けられ、一部をＳＫ252 土坑によって切られている。粘土で構築された両袖部の遺存状態は良好である。西袖突端部には丸瓦を立て補強材としている。カマド内、焚口部には焼土、炭化物が認められる。

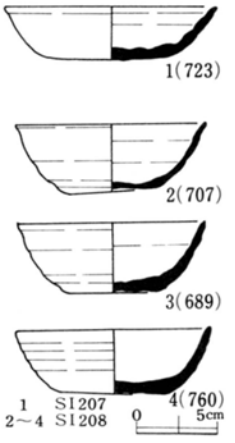


第21図ＳＩ208住居跡

出土遺物（第22図2～4、図版27）

赤褐色土器

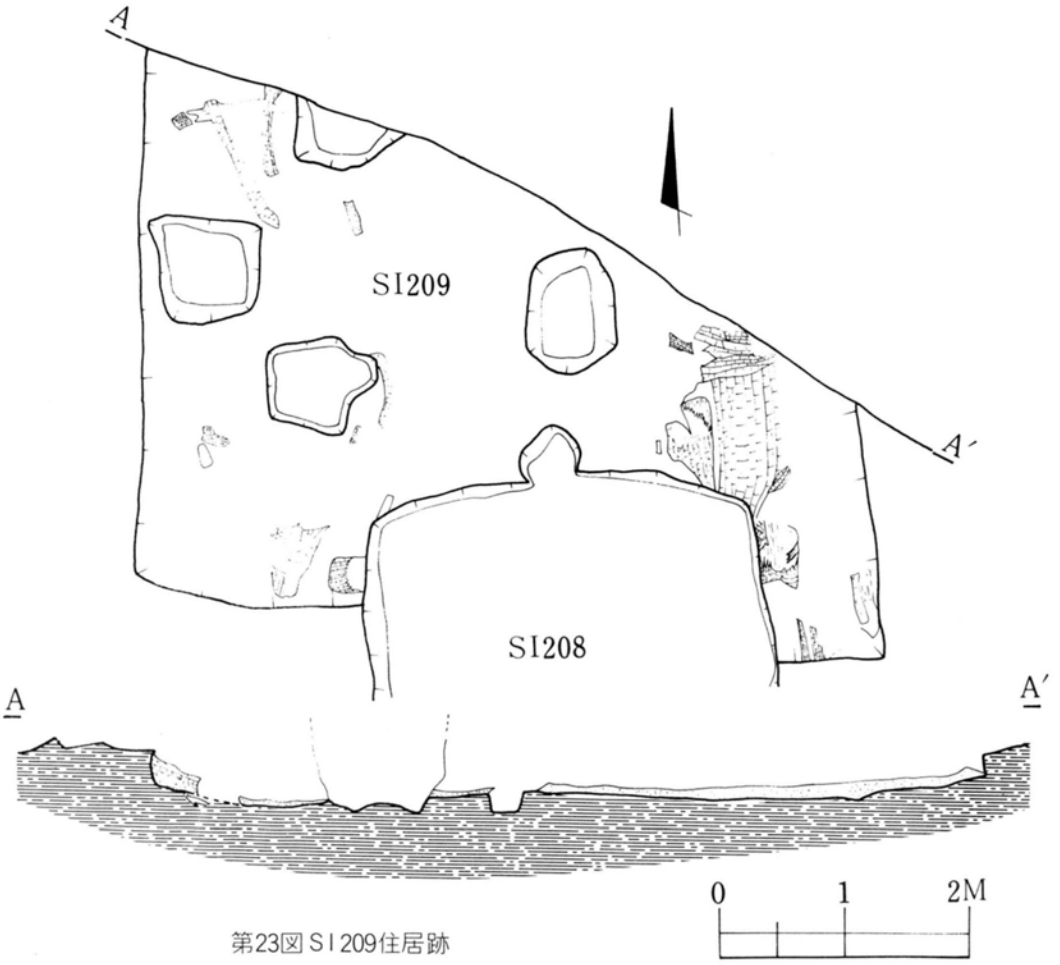
杯　２は回転糸切りである。底部外縁より体部下端にかけて回転ヘラケズリで調整を施している。底部より内湾しながら立ちあがり、口縁部は若干外反する。内外面の半分程には煤状炭化物が付着している。３は回転糸切りで再調整はない。底部より内湾しながら立ちあがる。内面には油煙状の黒色炭化物が付着している。いずれも胎土、焼成ともに良好である。



第22図出土遺物

須恵器

杯　４は埋土より出土した。回転ヘラ切りで再調整はない。底部周縁には指ナデがみられる。底部より内湾しながら立ちあがっている。赤褐色、黄橙色を呈し、須恵器の生焼けと思われる。内面一部に、黒色付着物がみられる。



第23図 SI209住居跡

SI209住居跡（第23図、図版14）

北側は調査地外で検出できなかった。また南側一部はSI208住居跡に切られている。東西約5.8mを測る。壁の立ちあがりは、グリット北側断面で確認し、壁高は約30cmである。床面は平坦でよくしまっている。また全面にわたって焼土、炭化物が堆積している。特に壁際には炭化材が良好な状態で残っていた。これらのことより本住居跡は火災を受けたと思われる。床面上にみられる柱穴はいずれも住居跡の上層より掘り込まれたものである。

出土遺物（第27図1、2、図版27）

須恵器

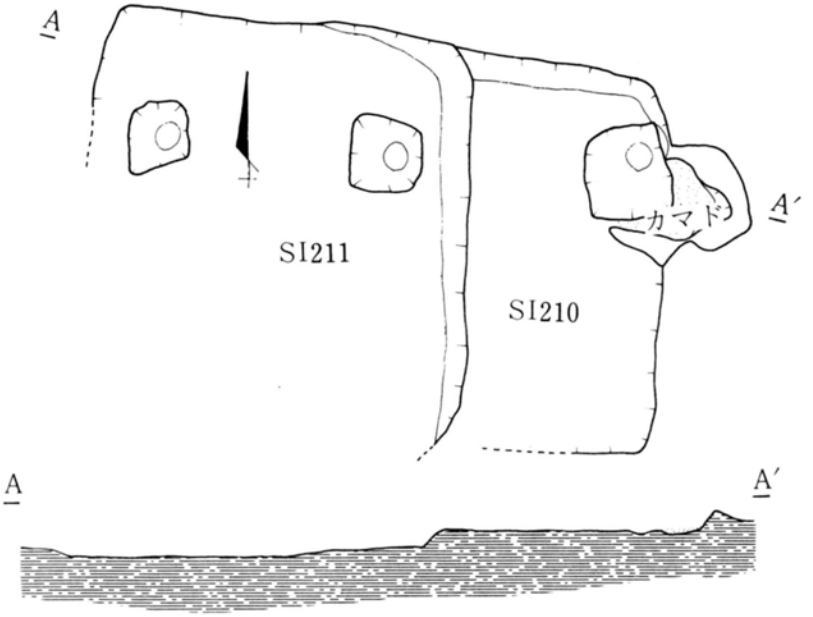
杯　1は回転ヘラ切りで再調整はない。丸底風を呈し、口縁部は若干外反する。胎土、焼成ともに良好である。部分的に重ね焼き痕がみられる。

蓋　2は偏平なツマミを有する。天井部には回転ヘラケズリを施しており、切り離しは不明である。

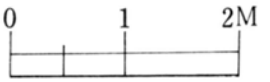
SI210住居跡

（第24図）

大部分がＳＩ211住居跡によって切られている。北・東壁の一部と、カマドが検出されたに過ぎない。北壁の遺存状態は良好である。カマドは東壁の北寄りに粘土で構築されているが、遺存状態は不良である。床面は平坦で軟弱である。



第24図 SI210住居跡



出土遺物

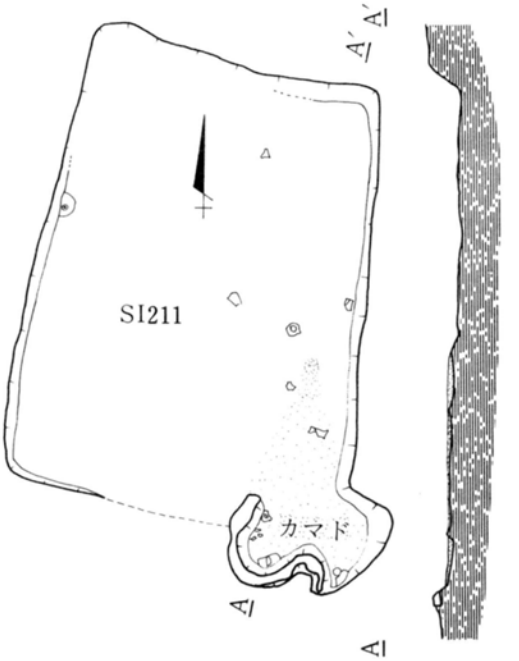
（第27図９～11、図版27）

須恵器

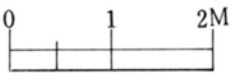
蓋　９は偏平なツマミを有する。天井部には回転ヘラケズリを施しており、切り離しは不明である。外面口縁部、内面口縁部より体部にかけては自然釉がかかっている。内面中央部には炭化物が付着し、わずかに磨滅しており硯に転用されている。

砥石　10は上部が一部欠損した砥石で、短冊形を呈する。使用痕は４面にみられ、特に表裏面が著るしい。石質は凝灰岩と思われる。

鉄鏃　11は全長9.8cm、巾1.3ｍを測る鉄鏃である。銹化が著るしく詳細は不明である。

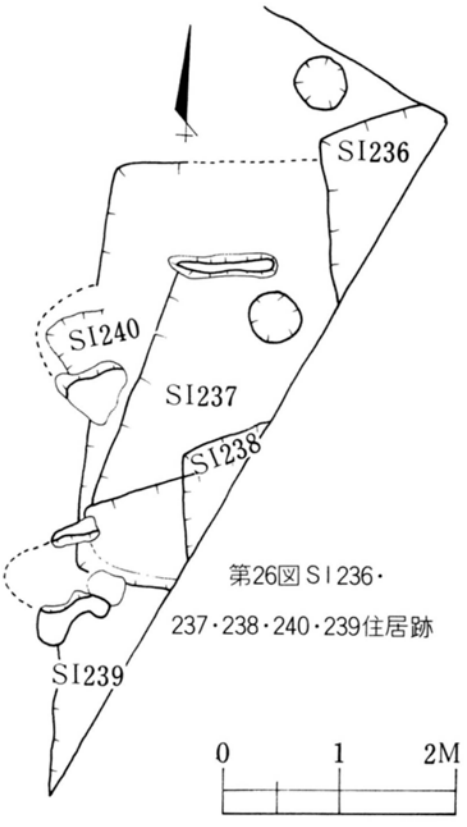


第25図 SI211住居跡



SI 211住居跡（第25図、図版13）

南北に長い長方形のプランを呈する。壁は北壁、及び他の壁の一部は認められないが、遺存状態の良好な部分では壁高約30cmで斜めに立ちあがる。床面は平坦で、軟弱である。カマドは南東コーナー部に粘土で構築されているが、遺存状態は不良である。カマド内、焚口、床面の一部には焼土、炭化物が薄く堆積している。本住居跡はＳＩ 210住居跡を切って構築されている。



第26図 SI236・237・238・240・239住居跡

出土遺物（第27図４～８、図版27）

赤褐色土器

杯　４、５ともに回転糸切りで、体部下端は回転ヘラケズリで再調整している。胎土、焼成ともに良好である。5は内外面ともに黒色の付着物がみられる。

須恵器

杯　6は回転糸切りで内外面ともになめらかである。口縁部には重ね焼きの痕跡がみられ、内外面ともに火だすきがみられる。７は回転ヘラ切りで再調整はみられない。内面は全面に茶褐色の樹皮状の付着物があり、パリパリとはがれる。いずれも胎土、焼成ともに良好である。

蓋　８は切り離し不明である。宝珠状のツマミを有し、天井部にはナデを施している。外面口縁部、内面口縁部より体部にかけて自然釉がかかっている。内面中央部は磨滅しており、炭化物が付着している。硯に転用している。

SI 236～240住居跡（第26図、図版21）

調査地東側グリットにかかり、５棟の住居跡が検出された。いずれも重複関係にあり、新しい順に整理すると、ＳＩ238→ＳＩ236→ＳＩ239→ＳＩ240→ＳＩ237住居跡となる。ＳＩ238住居跡は他の住居跡より上層で検出した。ＳＩ236住居跡はＳＩ240住居跡を切って構築され、北・西壁の一部を検出した。ＳＩ237住居跡はＳＩ240住居跡の下層で西壁、南壁の一部を検出した。SI 240住居跡はＳＩ236、239住居跡に切られており、西側の一部を検出した。壁の遺存状態は不良である。カマドは西壁にその痕跡を残す程度である。ＳＩ239住居跡はＳＩ240住居跡を切っており、西壁の一部とカマドを検出した。カマドは粘土で構築され、両袖部の他は壊されている。

ＳＩ 236出土遺物（第27図、図版27）

須恵器

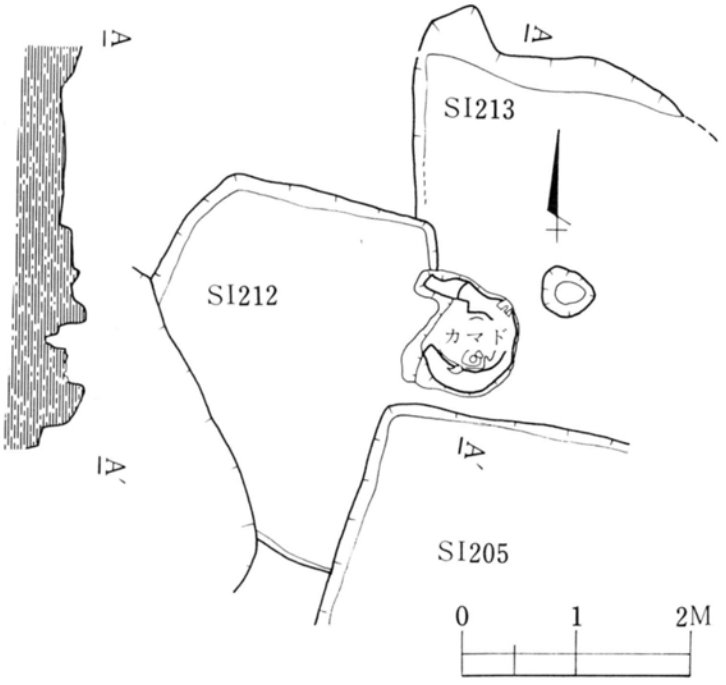
杯　３は回転ヘラ切りで底部より丸味をもって立ちあがり、再調整はみられない。胎土、焼成ともに良好である。重ね焼き痕がみられる。底部に墨書がみられるが判読不能である る。

ＳＩ 240出土遺物（第27図、図版27）

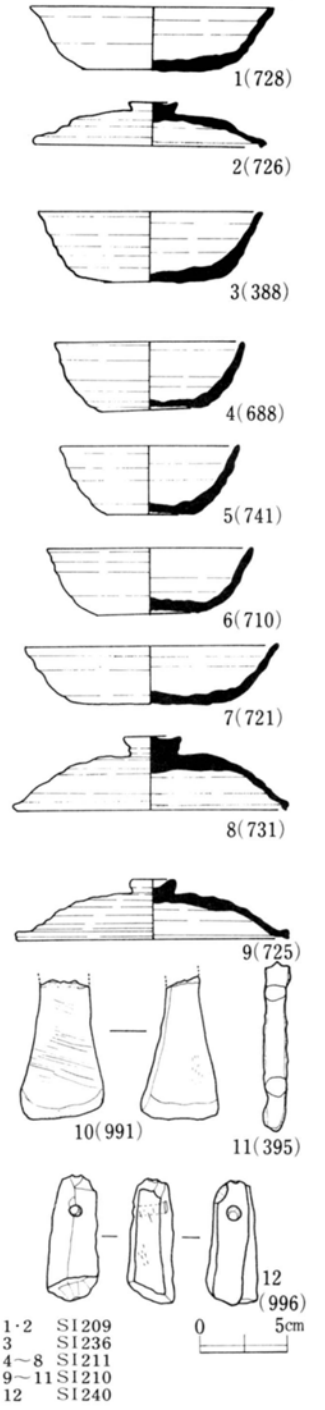
砥石　12は上部中央に径８㎜程の小孔を穿った携帯用のものである。全面に使用痕がみられる。石質は緑色凝灰岩である。

ＳＩ 212・213住居跡（第28図、図版15）

ＳＩ 212住居跡は南側半分を、近代の井戸試掘穴とＳＩ 205 住居跡に切られている。残存部の壁の遺存状態は不良で、わずかに立ちあがっている。カマドは東壁の北寄りに粘土で構築されており遺存状態は良好である。ＳＩ 213住居跡は、北、西壁の一部しか検出できなかった。



第28図ＳＩ212・213住居跡



第27図出土遺物

SI212出土遺物

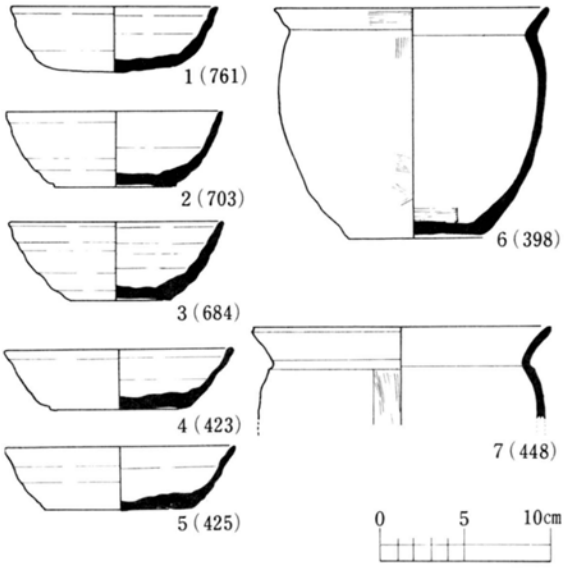
（第29図1～3、6、図版27）

赤褐色土器

杯　2、3ともに回転糸切りで再調整はみられない。いずれも底部より内湾しながら立ちあがる。胎土、焼成ともに良好である。

土師器

甕　口径16.4㎝、器高13.6㎝を測る。頸部は「く」の字状に外反する。内面口縁部に横ナデを施している。体部は細かいナデを施しており、スベスベしている。底部周縁にはカキ目がみられる。外面は頸部から口縁部にかけて横方向に細かいナデ、体部上方はタテ方向のカキ目を施した後にナデで整形し、下方にはハケ目がみられる。



第29図出土遺物　1～3、6 SI212　4、5、7 SI213

SI 213出土遺物（第29図4、5、7、図版27）

土師器

甕　7は口径17.8㎝を測る。頸部より口縁にかけて「く」の字状に外反する。内面には指ナデを施している。外面の頸部、口縁部には指による細かい横ナデが施され体部との間に稜をつくっている。体部にはタテ方向のカキ目が施されている。

須恵器

杯　4・5は回転ヘラ切りで再調整はみられない。いずれも胎土、焼成ともに良好で、火だすきと、4には明瞭に重ね焼きの痕跡が認められる。

SI 214A、B住居跡（第30・31図、図版15）

両住居跡ともに平面プランは同一のものであるが、床面は間層をはさんで上・下2面を検出し、下面をSI 214A住居跡、上面をSI 214B住居跡とした。東西約3.2m、南北約4.2mの南北に長い長方形のプランを呈する。埋土には炭化物が含まれる。床面はA・B面とも遺存状態は良好である。カマドは認められない。南側には本住居跡を切った柱穴がみられる。

出土遺物（第32図、図版27）

SI 214A、B住居跡の出土遺物は一括してSI 214住居跡出土遺物として記す。

赤褐色土器

杯　1～7、20は回転糸切りで切り離した後で、体部下端、あるいは底部周縁まで回転ヘラケズリを施しており、内面もナメラカである。器形はいずれも底部より内湾しながら立ちあがっている。5は底部周縁より体部下端にかけて回転ヘラケズリがみられる。3、6、7は口縁部の一部に油煙状の炭化物が付着しており燈明皿に転用されたと思われる。4は底部に墨書が認められるが判読不可能である。8は回転糸切りで切り離した後の再調整はみられない。底部より内湾しながら立ちあがっている。いずれも胎土焼成ともに良好である。

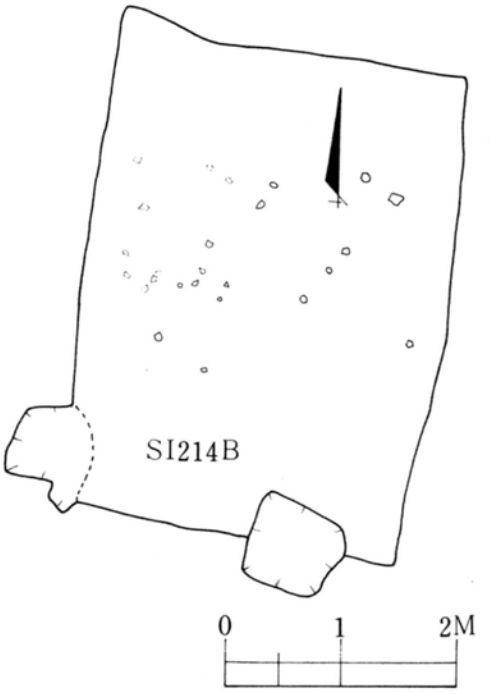
須恵器

杯　9～17、21は回転ヘラ切りで切り離した後の再調整はみられないが、11、12、15、16、21は指ナデを施している。大部分は底部より丸味をもって立ちあがっている。9、12～17には重ね焼きの痕跡がみられる。10の内面は非常に磨滅しており硯に転用したものと思われる。18を除いては胎土、焼成ともに良好である。18は灰白色を呈すが、体部下半は薄い肌色を呈しており、生焼けと思われる。

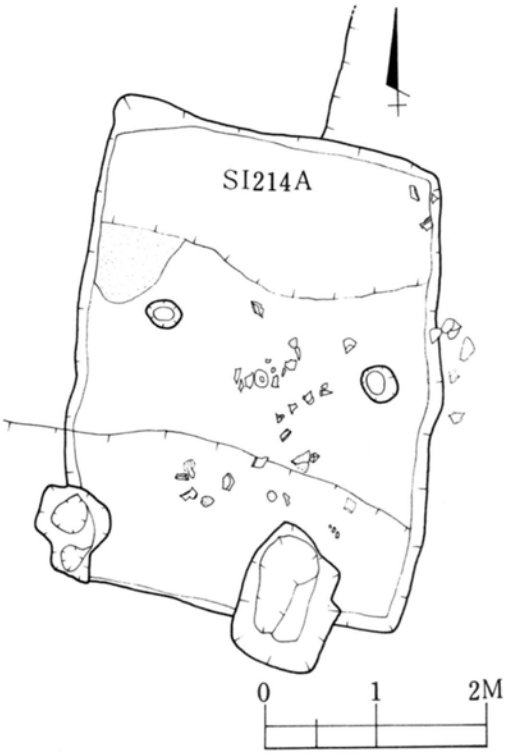
台付杯　19、20は回転ヘラ切りである。いずれも台は欠損している。22は底部周縁にナデがみられる。いずれも丸味をもって立ちあがり口縁部はわずかに外反する。胎土、焼成ともに良好である。

砥石

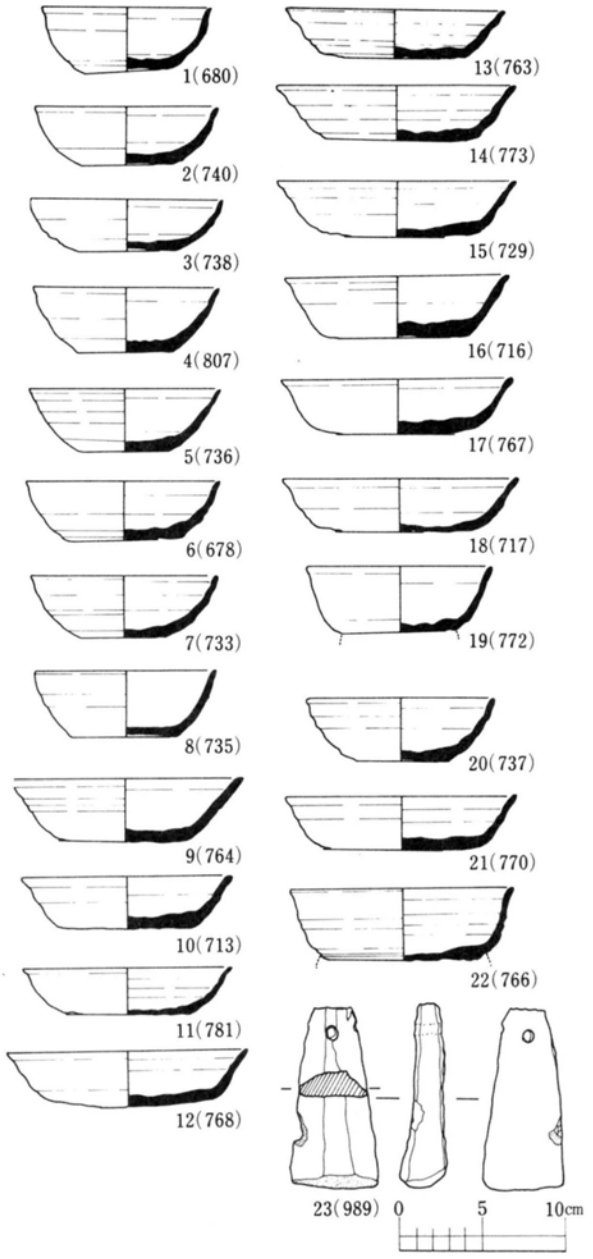
上部中央に小孔を穿った携帯用の砥石である。使用痕は4面にみられる。断面は台形を呈する。石質は緑色凝灰石である。



第30図ＳＩ214Ｂ住居跡



第31図SI214Ａ住居跡



第32図 S I 214住居跡出土遺物

S I 216、217住居跡

（第33図、図版16）

S I 216住居跡は、わずかに周辺との色調の違い、遺物の広がりの状態から方形のプランを呈するものと思われる。壁、カマドは不明である。S I 217住居跡の上層で検出した。

S I 217住居跡は東西約3.9 *m*、南北約3.6 *m*のほぼ方形のプランを呈する。壁高は約30 *cm*でほぼ垂直に立ちあがり、遺存状態は良好である。床面は東側にゆるく傾斜している。カマドは東壁の南寄りに粘土で構築されている。両袖部とも遺存状態は良好である。カマド内部、焚口部には炭化物が認められる（第34図）。床面にみられる柱穴には本住居跡よりも新しいものである。

S I 216出土遺物

（第35図1～12、図版28）

赤褐色土器

杯　1～7は回転糸切りで、体部下端にいずれも回転ヘラケズリを施している。底部から立ちあがる部分の器壁はいずれも厚い。5は口縁部の一部が黒色に変色しており、あるいは燈明皿に転用されたと思われる。いずれも焼成は良好である。8～10は回転糸切りで調整は施していない。8、9は胎土、焼成ともに良好である。

蓋　切り離しは不明である。ツマミは欠損している。天井部には回転ヘラケズリを施し調整している。胎土、焼成ともに良好である。

須恵器

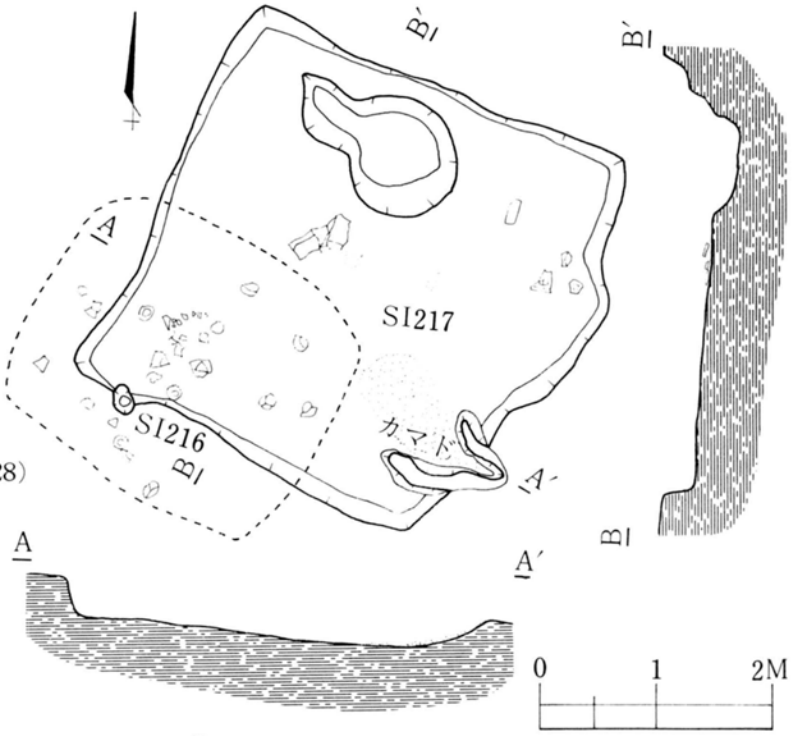
蓋　宝珠状のツマミを有し、天井部より体部にかけて回転ヘラケズリを施している。切り離しは不明である。内面には墨が付着しており硯に転用している。

SI 217出土遺物

（第35図13～19、図版28）

赤褐色土器

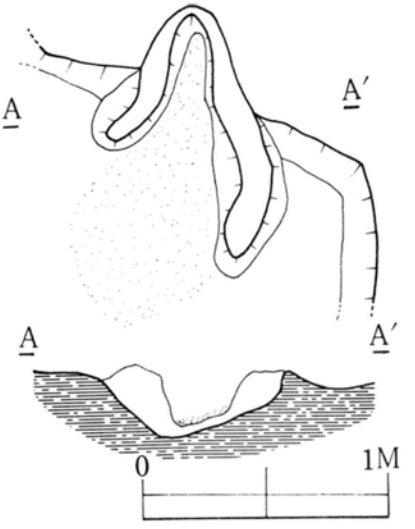
杯　13はカマド内よりの出土である。回転糸切りで切り離し、体部下端には回転ヘラケズリを施している。口縁部にはわずかに黒色付着物がみられる。胎土、焼成ともに良好である。



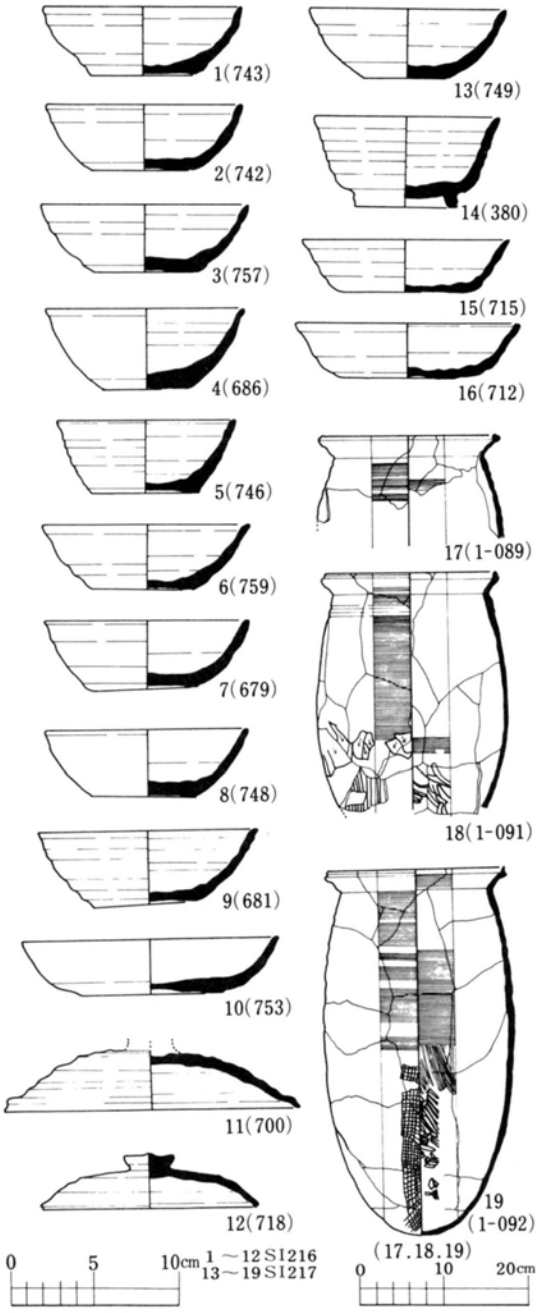
第33図SI216・SI217住居跡

土師器

甕　17は口径約20.3cmを測る。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は内反する。内外面ともに頸部より下方に巾1.3cm程のの間隔で横方向にカキ目を施している。胎土、焼成ともに良好である。18は口径20cmを測る。胴部巾は22.3cmで砲弾形を呈すると思われる。頸部は「く」の字状に外反し、口縁は若干内反する。外面には頸部より胴部にかけて横方向にカキ目を施し、一部にはタテ方向にヘラケズリを施している。さらに下方は内面にアテ板をあて、葉脈状のタタキ板で叩きしめている。内面には胴部下方に一部横方向のカキ目とアテ板痕がみられる。赤褐色で焼成良好である。19は口径21cm、器高42.8cmを測る。胴部巾は23cmで砲弾形を呈する。外面頸部より胴部には横方向のカキ目が施され、下方には内面にアテ板をあて葉脈状のタタキ板で叩きしめている。内面には横方向のカキ目とタテ方向のカキ目が、下方にはアテ板痕がみられる。赤褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。



第34図SI217カマド



第35図出土遺物

須恵器

杯　15、16ともに床面より出土した。いずれも回転ヘラ切リで切り離し再調整はみられない。底部より丸味をもって立ちあがっている。胎土、焼成ともに良好である。16は重ね焼きの痕跡がみられる。

台付杯　14は回転ヘラ切りと思われるが明瞭でない。貼り付け高台である。胎土、焼成ともに良好である。

SI218住居跡（第36図、図版18）

南側はＳＤ251溝によって切られているが、東西約3.5ｍ、南北約2.4ｍの長方形のプランを呈する。壁高は約30cmで斜めに立ちあがっている。遺存状態は良好である。床面はほぼ平坦で軟弱である。カマドは東壁の南寄りに黄褐色粘土を用いて構築した遺存状態の良好なものである（第37図）。カマド内部から床面の一部には、焼土、炭化物が広く認められる。北側のピットはＳＢ242掘立柱建物跡の掘り方である。

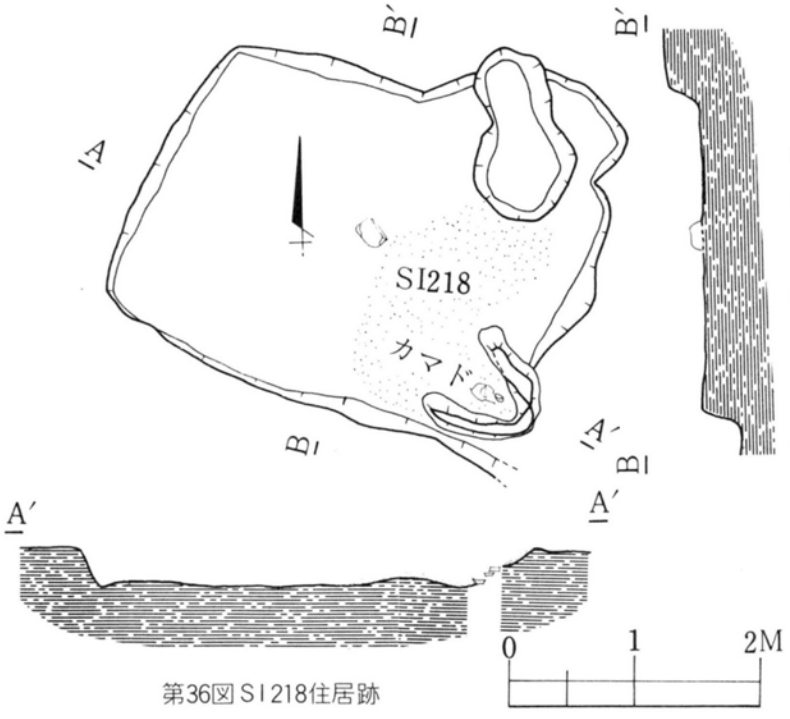
出土遺物（第38図、図版28）

須恵器

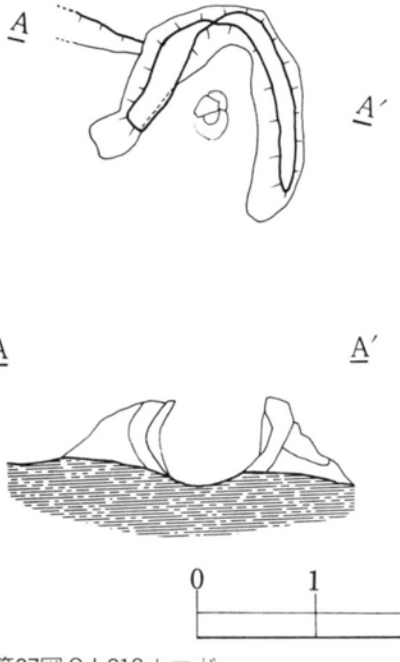
杯　１・２ともに回転ヘラ切りで再調整はない。2は底部より内湾しながら立ちあがっている。外面口縁部の一部と内面全体に油煙状の黒色付着物がみられる。

ＳＩ219住居跡（第39図、図版19）

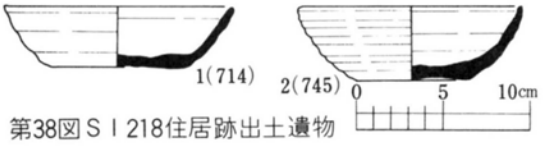
壁は確認できず、かすかに南側のプランが検出された。東側に粘土で構築されたカマドを設けている。詳細は不明である。



第36図 S I 218住居跡



第37図 S I 218カマド



第38図 S I 218住居跡出土遺物

出土遺物

（第41図1～7、図版29）

赤褐色土器

杯　1、2は回転糸切りで体部下端には回転ヘラケズリを施している。底部より内湾しながら立ちあがっている。3は回転糸切りで、磨滅が激しく調整の有無は不明である。いずれも胎土、焼成とも良好である。

須恵器

杯　4～7ともに回転ヘラ切りで再調整はない。4～6は底部より丸味をもって立ちあがる。4は薄い赤橙色を呈し生焼けと思われる。5、6は重ね焼き痕がみられる。7は口縁部内面に油煙状の付着物がみられる。5～7とも焼成良好である。

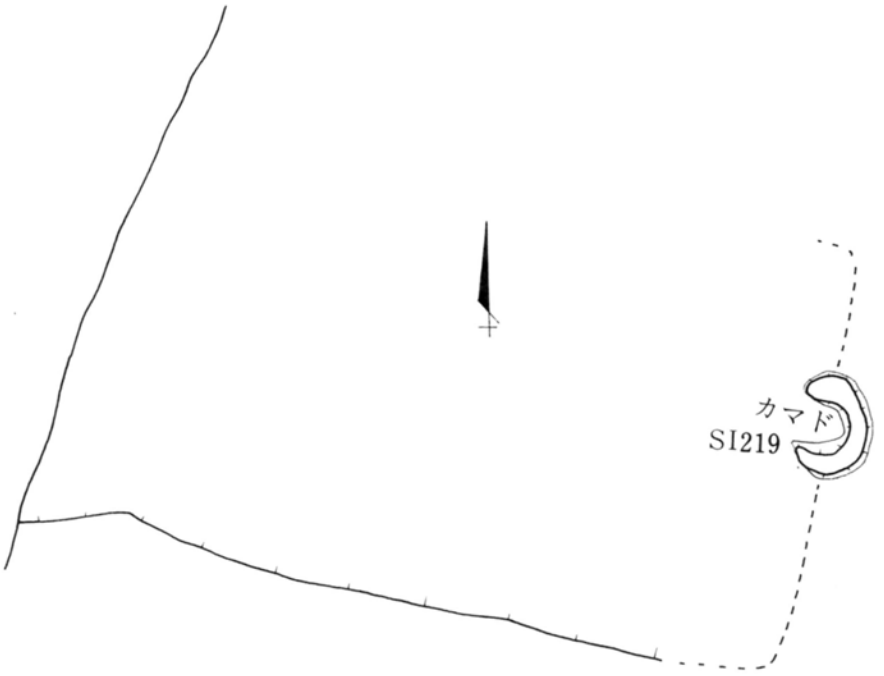
S I 223住居跡（第40図、図版20）

調査地外のためその一部を検出した。南側はＳＤ251溝によって一部切られている。全体のプランは不明である。カマドは北壁に設けられ、長さは約2 *m*を測る長大なもので黄褐色粘土で構築した遺存状態の良好なものである。北から南にゆるく傾斜している。焚口、床面の一部には炭化物が認められている。

出土遺物（第41図８、図版29）

土師器

甕　8は口径23.6*cm*を測る。輪積成形によるもので、内外面に輪積痕がみられる。頸部より口縁にかけてゆるく外反している。内面には頸部下方に巾1.4 *cm*程のヘラ状工具による

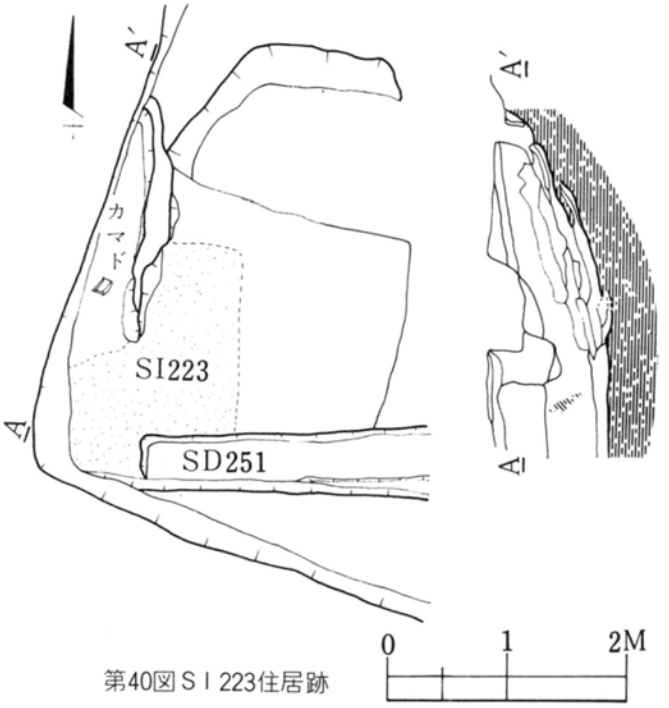


第39図 SI219住居跡

と思われる横方向のカキ目が施されている。外面にはタテ方向のカキ目が施されているが二次的な炭化物の付着によって一部しかみられない。

SI220住居跡（第42図、図版14）

南側はＳＤ250 溝によって切られ、西壁の一部と北壁を検出した。特に西壁には一部分ではあるが、炭化した板材が直立して壁に張りついていた。床面は平坦でよくしまっている。床面上には焼土、炭化物が全面に認められ、火災を受けたと思われる。床面上にみられる柱穴は上層より掘り込まれたものである。



第40図 SI 223住居跡

SI 221、222住居跡（第43図、図版20）

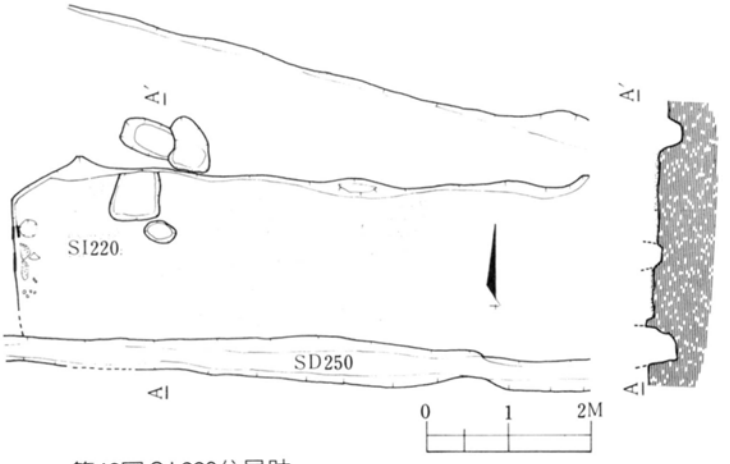
SI222住居跡は東西約3.3m、南北約3.0mのほぼ方形のプランを呈する。北壁の一部は不明であるが、他の壁の遺存状態は良好である。床面は平坦で軟弱である。カマドは北西コーナー部に粘土で構築され、両袖部は遺存状態の良好なものである（第44図）。内部、焚口部付近には焼土、炭化物が認められる。本住居跡はSI 221住居跡を切っている。

SI 221住居跡は北・東壁の遺存状態は良好であるが、他は不明である。壁高はは約20cmで斜めに立ちあがっている。SI 222住居跡床面下より粘土ブロック、焼土、炭化物が多量に認められ、カマドの痕跡と思われる。

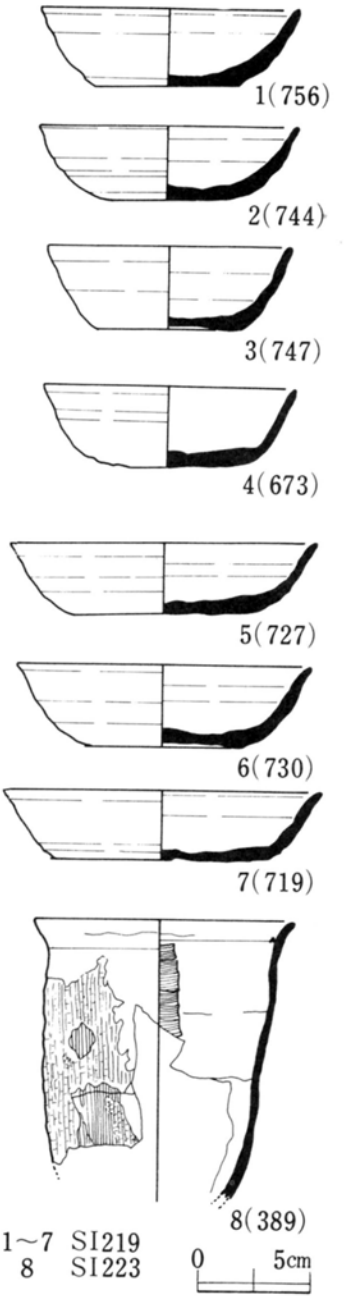
SI 221出土遺物　（第45図、図版29）

土師器

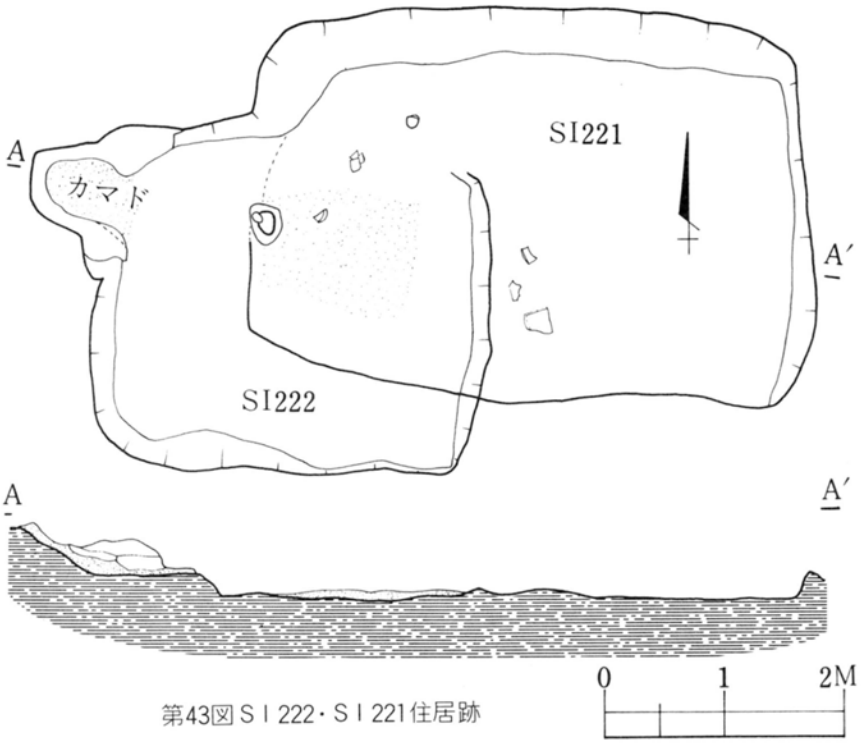
甕　3は口径13.6cm、器高9.5cmを測る。頸部より口縁部にかけて、ゆるく「く」の字状に外反している。口縁部内面には横ナデを施している。外面は頸部より底部にかけて全面に手持ちのヘラケズリを施している。輪積の痕跡が一部にみられる。胎土、焼成ともに良好である。4は口径12.2cm、器高13cmを測る。胴部との間に口縁部を横ナデによって整形した時にできたと思われる稜を形成している。内面は口縁部より胴部下方にかけてきめの細かいナデを施している。さらに下方は巾1.5cm程のヘラ状工具による整形を施している。外面は口縁部、頸部には横ナデを施している。胴部より下方にはタテ方向のカキ目を施した後に上から下にかけ、手持ちのヘラケズリで整形している。一部に輪積の



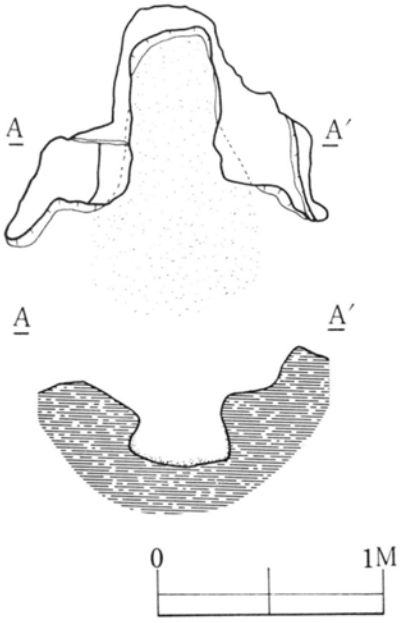
第42図 SI 220住居跡



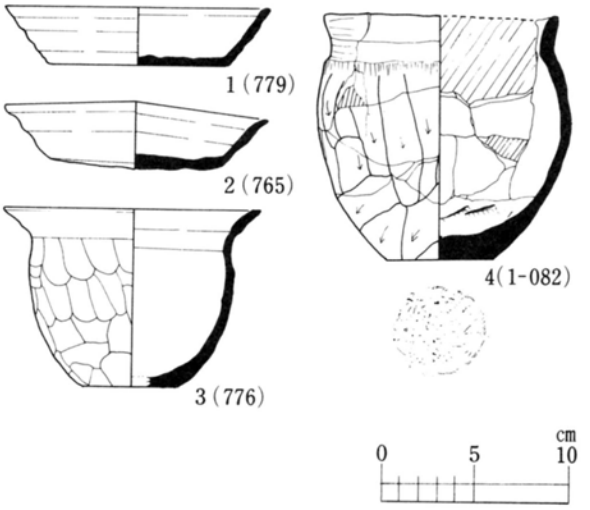
第41図出土遺物
1～7 SI219
8 SI223



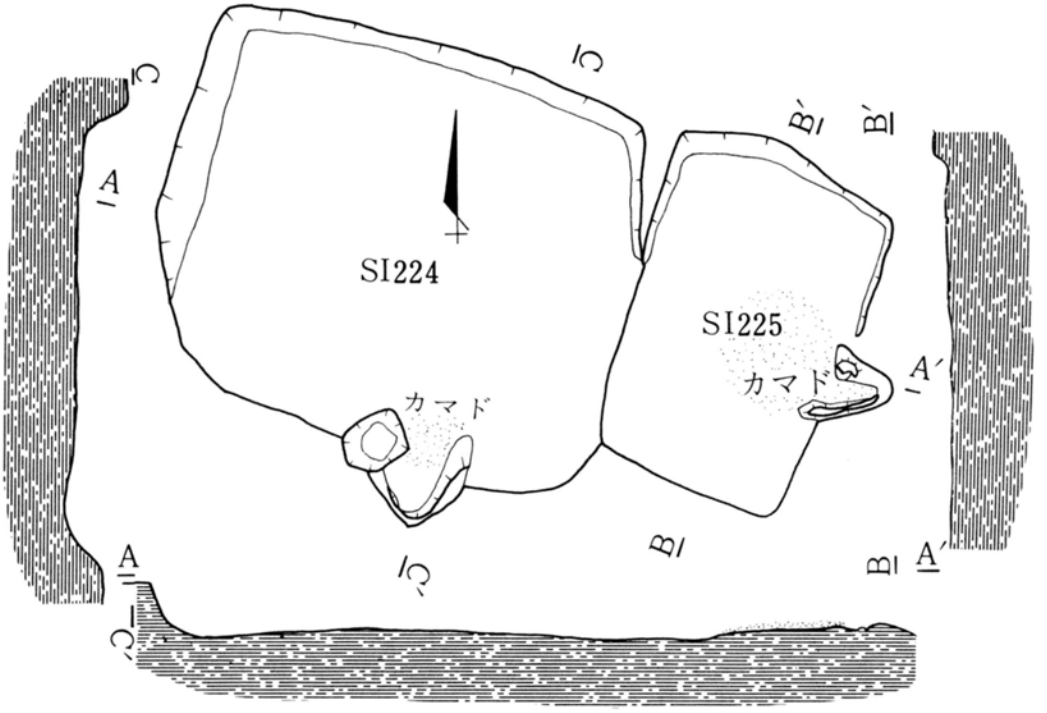
第43図 S I 222・S I 221住居跡



第44図 S I 222カマド

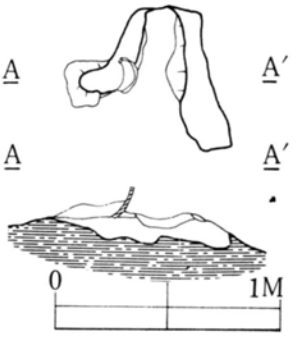


第45図 S I 221住居跡出土遺物



第46図 SI 225・SI 224住居跡

痕跡がみられる。底部は木葉痕が明瞭にみられる。



第47図 SI 225カマド

SI 224、225住居跡（第46図、図版17）

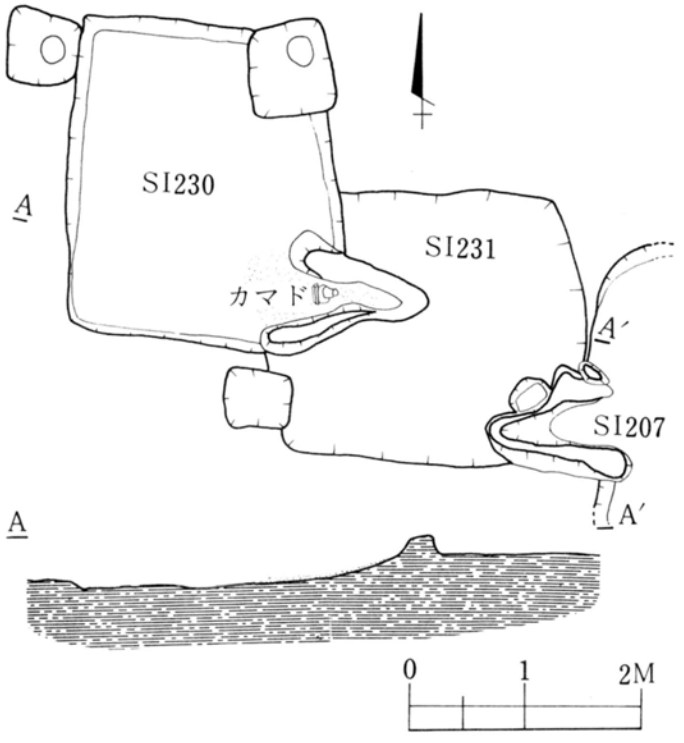
SI 225住居跡は東西約1.8 m、南北約2.6 mの長方形のプランを呈する。壁は北壁と、東西壁の一部を残す。カマドは東壁の中央に粘土で構築されている。北側の袖には丸瓦を立てて補強している。カマド内、焚口、床面の一部には焼土、炭化物が多量に分布している（第47図）。本住居跡はＳＩ224住居跡を切っている。

SI 224住居跡は東西約3.6 m、南北約3.1 mのやや東西に長い長方形のプランを呈する。SI 225住居跡と同様、壁は北壁と東、西壁の一部を残すのみである。壁高は西壁で約40cmで丸味をもって立ちあがる遺存状態の良好なものである。カマドは南壁に粘土で構築されている。カマド内、焚口部に焼土、炭化物が多量に分布している。本住居跡はＳＩ 225住居跡に切られている。

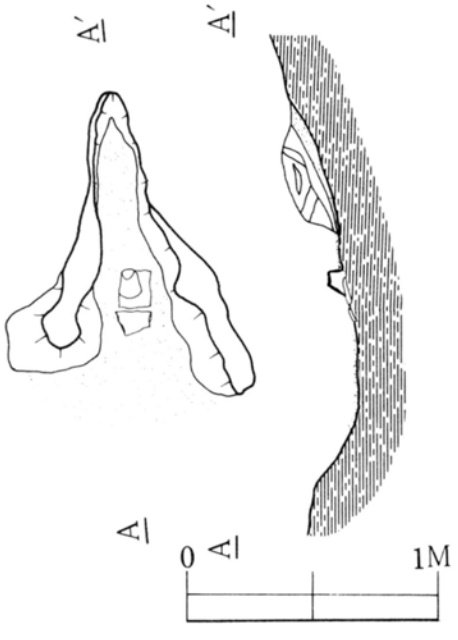
SI 225出土遺物（第50図３、図版29）

須恵器

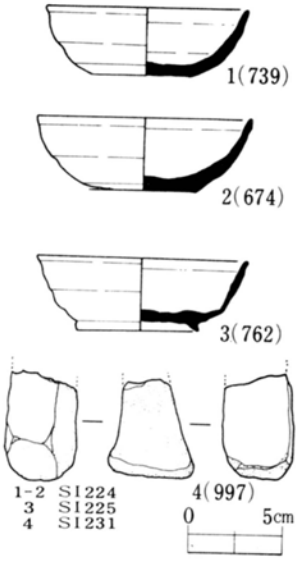
台付杯　３は回転糸切りで切り離し、その後高台を貼り付けている。底部よりゆるやかに立ちあが



第48図 SI230・SI231住居跡



第49図 SI230カマド



第50図出土遺物

り、体部下端で急角度でほぼ真っすぐに立ちあがる。胎土、焼成ともに良好である。

SI 224出土遺物

（第50図１・２、図版29）

赤褐色土器

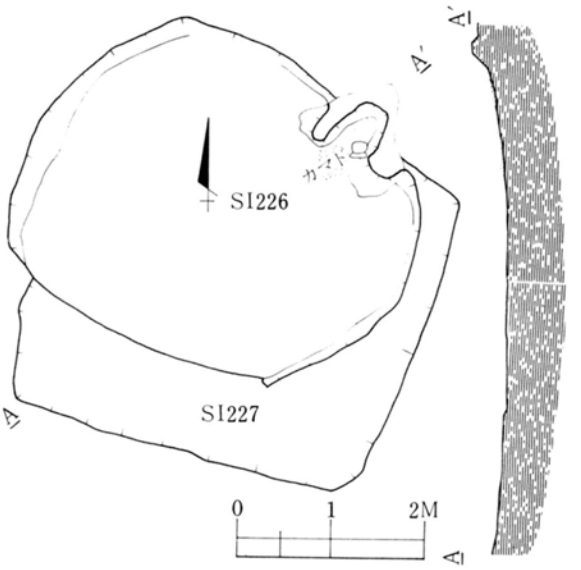
杯　１、２とも回転糸切りで、底部よりゆるく内湾しながら立ちあがっている。２は体部下端に回転ヘラケズリを施している。１は底部の周縁より体部下端にかけて回転ヘラケズリを施している。いずれも焼成良好である。

SI230、231住居跡（第48図、図版22）

SI230住居跡は東西約2.3ｍ、南北約2.7ｍのほぼ方形のプランを呈する。壁の遺存状態は良好で壁高はわずかに10cm程で丸味をもって立ちあがる。カマドは南東コーナー部に粘土で構築された遺存状態の良好なものである（第49図）。カマド内より平瓦、丸瓦が出土しているがカマドに使用されたものかは、不明である。煙道部、焚口部は焼土、

炭化物が広く分布している。本住居跡はSI231住居跡を切っており、また北側ではＳＢ244掘立柱建物跡の掘り方によって一部切られている。

ＳＩ231住居跡は東側をＳＩ207住居跡に、西側をＳＩ230住居跡により切られている。かろうじて北、南、東壁の一部がわかる程度である。カマドは不明である。



第51図ＳＩ226・ＳＩ227住居跡

SI 231出土遺物

（第50図４、図版29）

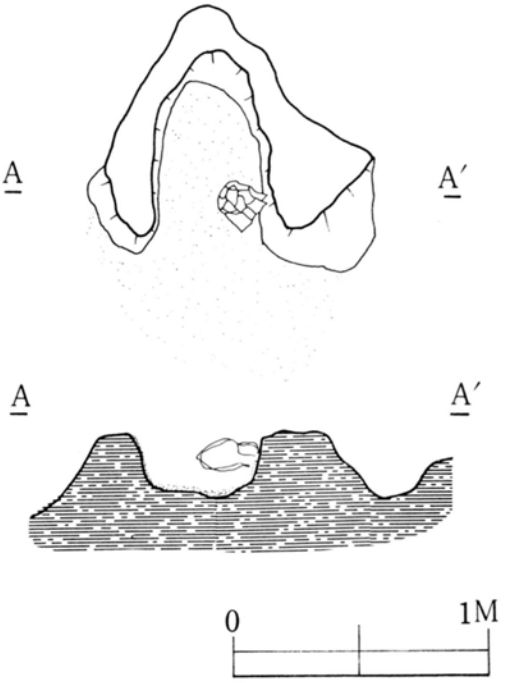
砥石

４は上部が欠損しているが短冊形を呈するものである。表裏面に使用痕がみられる。石質は緑色凝灰岩である。

SI226、227住居跡（第51図、図版21）

ＳＩ226住居跡は東西約4.3ｍ、南北約3.4ｍの隅丸方形のプランを呈する。壁高はよく残っている部分で約30cmである。カマドは北壁東寄りに粘土で構築された遺存の良好なものである（第52図）。両袖部は特にしっかりしている。内部、焚口部付近には焼土、炭化物が多量に分布している。本住居跡はＳＩ 227 住居跡を切っている。

ＳＩ227住居跡はＳＩ226住居跡によってその大半を切られている。プランは方形を呈するものと思われる。壁の遺存状態は不良でカマドも不明である。

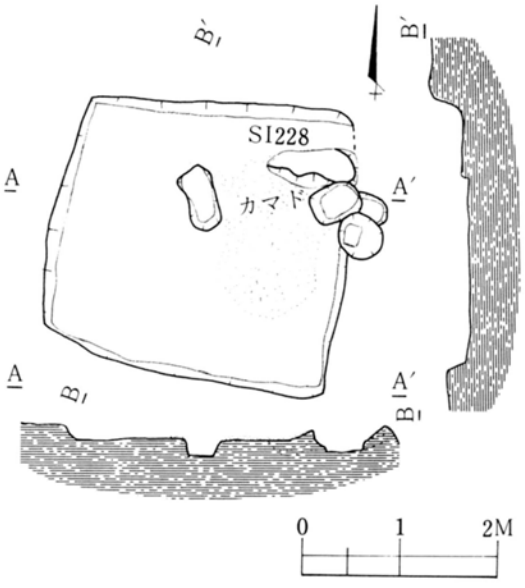


第52図ＳＩ 226カマド

SI226出土遺物（第54図１、図版29）

土師器

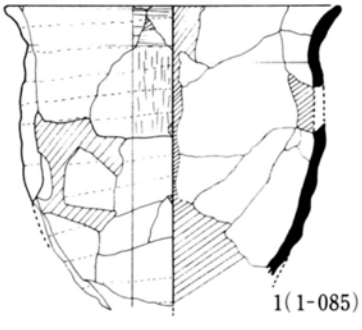
甕　1は口径18cmを測る。底部は欠損しているが器形からみて平底を呈すると思われる。頸部から口縁部にかけてゆるく外反している。内面にはナデ、外面は頸部より口縁部にかけて横方向のナデ、体部にはタテ方向のカキ目を施している。体部下半は再加熱を受けてもろくなっており胎土表面が剝落している。



第53図 SI 228住居跡

SI228住居跡（第53図、図版16）

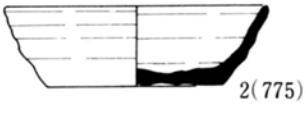
東西約3.1m、南北約2.9mのほぼ方形のプランを呈する。壁高は約20cmで丸味をもって立ちあがり、遺存状態は良好である。床面は南側でやや凹んでおり、軟弱である。カマドは東壁の北寄りに設けられているが、北側の袖を残し、他はピットに切られている。袖部は粘土で構築されている。焚口付近、床面の一部には炭化物が分布している。床面上の柱穴は本住居跡より新しいものである。

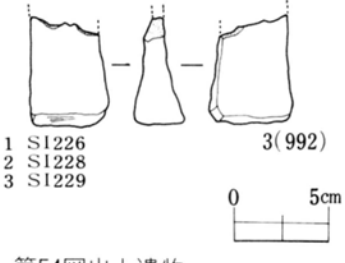


出土遺物（54図２、図版29）

須恵器

杯　2は回転ヘラ切りで再調整はみられない。内外面口縁部には煤状炭化物が付着しており、燈明皿に転用したと思われる。胎土、焼成ともに良好である。

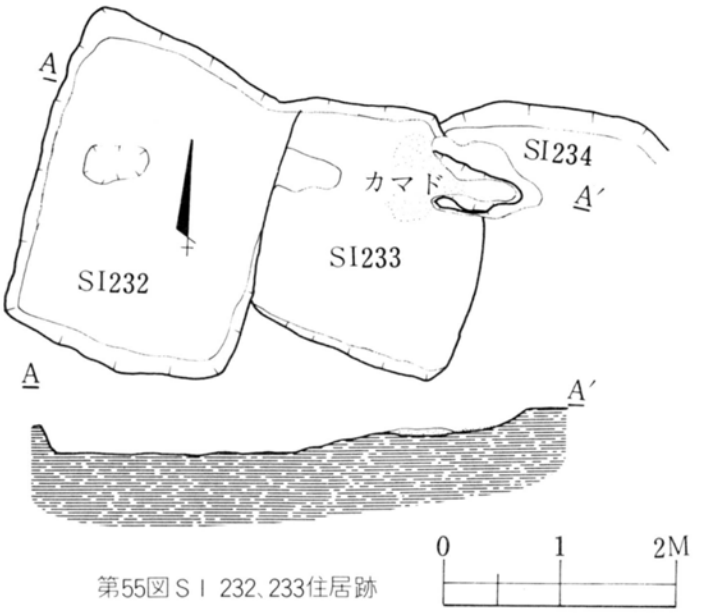




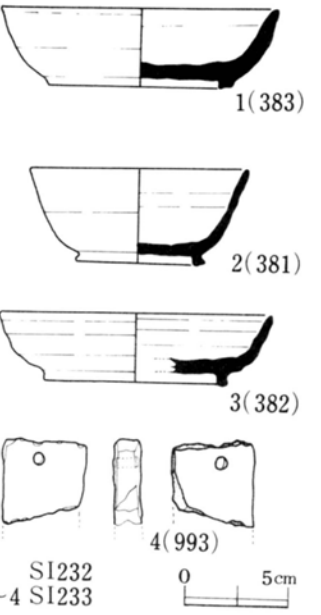
第54図出土遺物

SI 232、233住居跡（第55図、図版17）

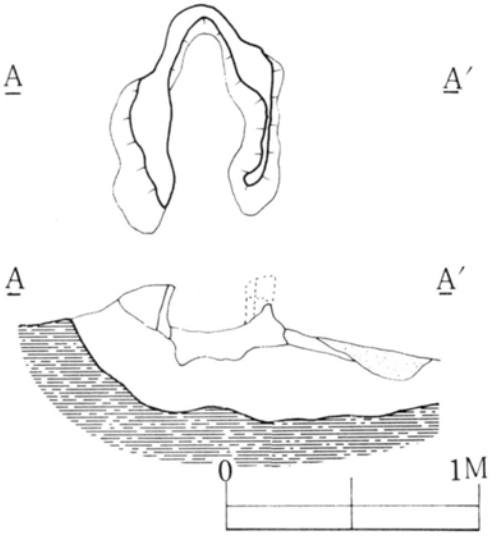
SI 232住居跡はSI 233住居跡に東壁の一部を切られている。東西約2.1m、南北約2.9mの長方形のプランを呈する。壁高は約30cmで斜めに立ちあがっている。カマドは東側の粘土ブロック、焼土、炭化物などからSI 233住居跡に壊されたものと考えられる。



第55図ＳＩ 232、233住居跡



第57図出土遺物



第56図ＳＩ233カマド

ＳＩ 233住居跡はＳＩ 235、232住居跡を切って構築されている。東西約1.9ｍ、南北約2.1ｍのほぼ方形のプランを呈する。北、南壁の遺存状態は良好である。カマドは東壁の北寄りに黄色粘土で構築され、両袖部は特に良好である（第56図）。内壁は10cm程の厚さで赤く焼けており、焚口、燃焼部に焼土、炭化物が多量に認められる。

SI 232出土遺物（第57図、１、図版29）

須恵器

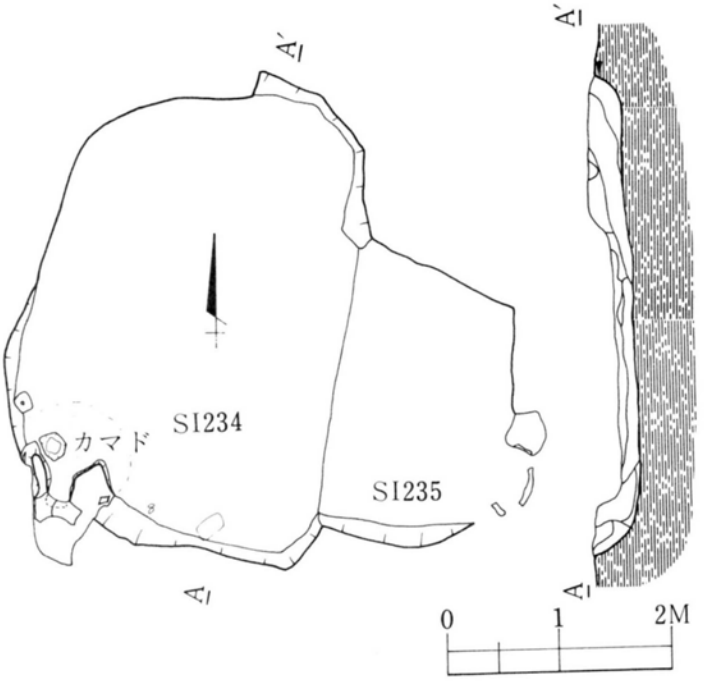
台付杯　１は回転ヘラ切り後、指ナデを施してなめらかにしている。高台は貼り付け高台である。器壁は比較的厚い。胎土、焼成ともに良好である。

SI 233出土遺物（第57図２～４、図版29）

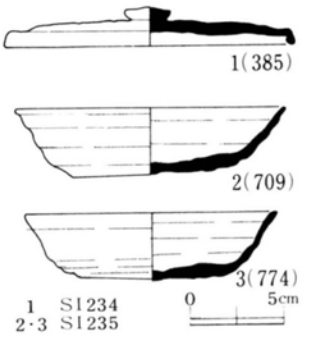
須恵器

台付杯　２、３ともに回転ヘラ切り後、指ナデを施してなめらかにしている。高台は貼り付け高台である。２は比較的器高が高い。３は胎土、焼成ともに良好である。

砥石

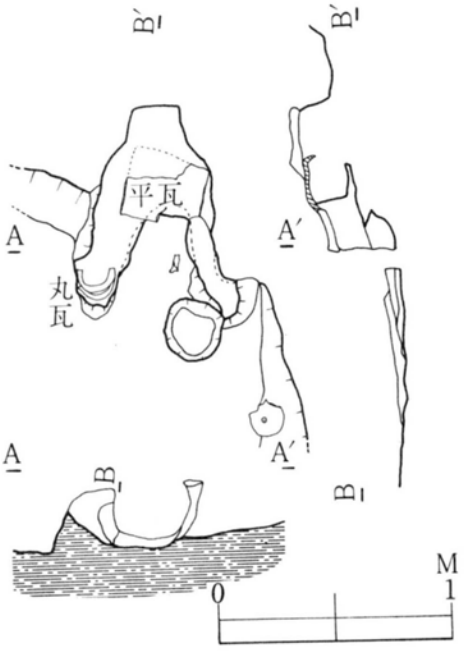


第58図 SI234・SI235住居跡



第60図出土遺物

4の1点のみである。下半は欠損している。上部中央に径5㎜程の小孔を穿った携帯用のものである。使用痕は4面にみられる。石質は緑色凝灰岩である。

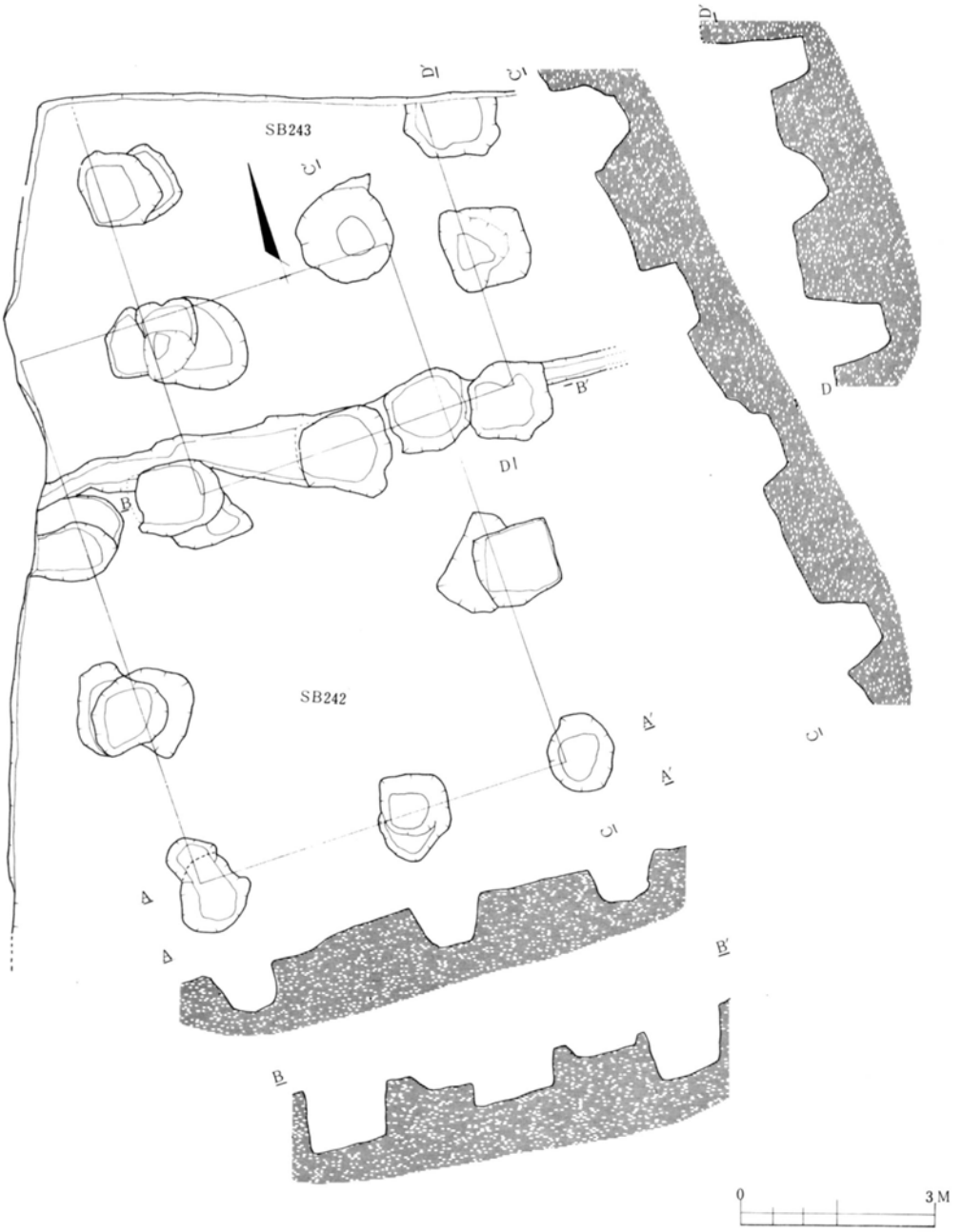


第59図 SI234カマド

SI 234、235住居跡（第58図、図版17、18）

SI 235住居跡はSI 234 住居跡の上層で検出した。東西に長い長方形のプランを呈すると思われる。壁、カマドの遺存状態は不良である。カマドはSI 206住居跡によって壊されているが、粘土で構築され、平瓦を使用して補強したものである。

SI 234住居跡は東側をSI 235住居跡、北西側をSI 233住居跡に切られているが、東西約2.8m、南北約4.3mの南北に長い隅丸長方形のプランを呈する。壁高は約30cmで丸味をもちながら斜めに立ちあがり、遺存状態は良好である。床面はゆるい凹凸があり、一面に炭化物が認められる。カマドは南西コーナー部に粘土と瓦で構築されている。天井部には平瓦を使用し、両袖部には丸瓦を立てて粘土で固め補強している（第59図）。カマドの焚口、内部は焼土、炭化物が多量に認められる。床面にみられる柱穴は性格不明である。



第61図ＳＢ242・ＳＢ243掘立柱建物跡

SI 235出土遺物（60図２、３、図版29）

須恵器

杯　２、３ともに回転ヘラ切りで再調整は施されていない。いずれも底部より丸味をもって立ちあがる。胎土、焼成ともに良好である。２は重ね焼き痕がみられる。３は内外面に火だすきがみられる。

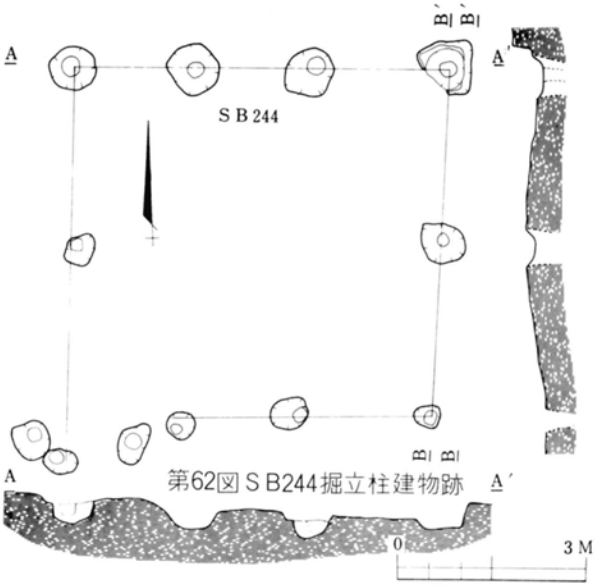
SI 234出土遺物（第60図１、図版29）

須恵器

蓋　１は宝珠状のツマミを有する。回転ヘラ切りで再調整はみられない。体部より口縁部にかけてナデ痕がみられる。

掘立柱建物跡

第17次調査で３棟の掘立柱建物跡を検出した。



第62図ＳＢ244掘立柱建物跡

ＳＢ242掘立柱建物跡

（第61図、図版８）

ＳＢ242建物跡は２間×３間の、ほぼ真北線にのる南北棟である。柱間寸法は、いずれの掘り方からも柱の「アタリ」が検出できず、正確にとらえることはできないが、掘り方の心心をとると梁行でほぼ6.5ｍ(3.25+3.25)、桁行でほぼ９ｍ（３＋３＋３）である。掘り方は第４層黒色土の下層より掘り込んでいる。掘り込み面の土質は部分的に異なる。黄白色粘土混りの砂質土であり、この建物跡を構築する際の整地層と考えられる。掘り方埋土には、褐色砂、粘土ブロック混りの砂質土、灰白色粘土等が堆積している。大きさは各１ｍ～1.5ｍほどの不整円形を呈し、深さは確認面より60cm程でほぼ一定している。壁は底面が砂地のため円錘状に立ちあがる。大部分の掘り方に柱の抜き取り穴と思われる掘り込みがみられる。

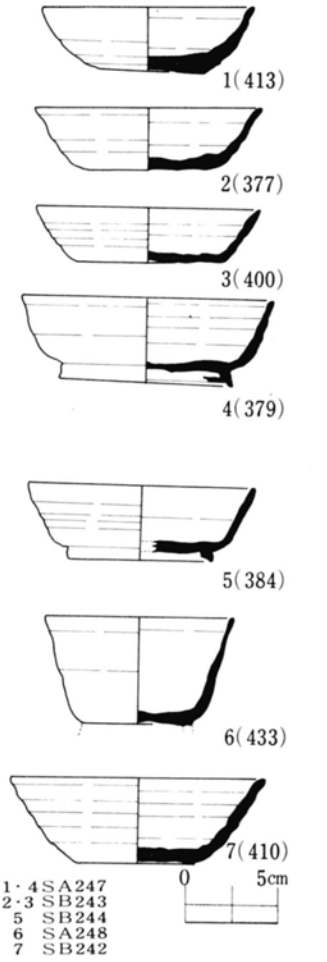
出土遺物（第63図７、図版29）

赤褐色土器

杯　７は回転糸切りで再調整はみられない。底部より丸味をもって立ちあがる。胎土、焼成ともに良好である。

ＳＢ243掘立柱建物跡（第61図、図版８）

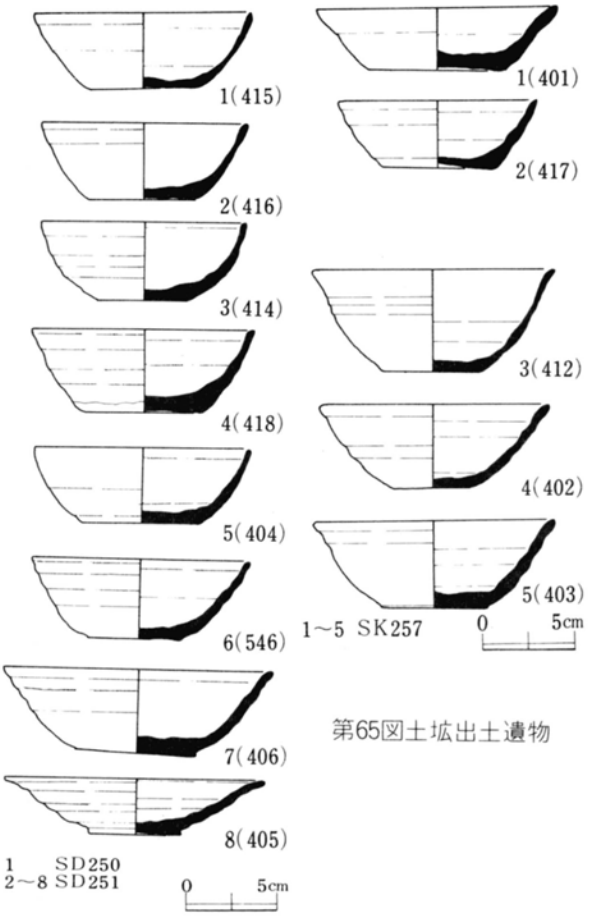
ＳＢ243建物跡は北側が調査地外のため、全体を検出することはできなかったが、検出した掘り方より推定して、２間×３間のほぼ真北線にのる南北棟であると考えられる。柱間寸法はＳＢ242建物跡と同様



第63図出土遺物

にいずれの掘り方からも柱の「アタリ」が検出できず正確にとらえることはできないが、掘り方の心心で、梁行でほぼ5.5m（2.75+2.75）、、と桁行は推定でほぼ7.5m（2.5+2.5+2.5）と思われる。掘り方はＳＢ242建物跡が掘り込んでいる黄白色粘土混りの砂質土の下層より掘り込まれている。埋土は焼土を含む汚れた褐色砂、粘土粒、焼土粒を含む褐色砂、明褐色砂等がレンズ状に堆積している。大きさはほぼ1.3m程の不整円形を呈する。深さは確認面より70cm～１m程の円錘状である。掘り方に柱の抜き取り穴と思われる掘り込みがみられる。

ＳＢ243建物跡はＳＢ242建物跡が掘り込んでいる整地層と考えられる黄白色粘土混り砂質土のさらに下層より掘り込まれており、ＳＢ242建物跡よりも古いものであることが土層の観察で確認された。



第64図溝出土遺物

第65図土坑出土遺物

出土遺物（63図２、３、図版29）

須恵器

杯　２、３ともに回転ヘラ切りで再調整はみられない。３は底部にかるいナデを施している。２は底部より丸味をもって立ちあがる。いずれも胎土、焼成ともに良好で、重ね焼きの痕跡がみられる。

ＳＢ244掘立柱建物跡（第62図、図版８）

調査地東側で検出した。２間×３間の東西棟である。建物の方位は７°北西方向に偏している。柱間寸法は検出した掘り方内より、柱の「アタリ」が確認され、梁行5.5m（2.75+2.75）、桁行６m（２＋２＋２）である。北東側柱筋は明瞭に通るが南西部では詳細は不明である。掘り方の掘り込み面は不明であるが、確認面での大きさは北側列で約80cmの楕円形、南側列では40～60cmの楕円形である。柱の「アタリ」は遺存状態良好な北側列で計測したが約28cm程である。深さは確認面より約30cm程である。本建物跡はＳＩ 230住居跡を切っておりＳＩ 230住居跡よりは新しく、ＳＩ 211住居跡よりは古いものである。

出土遺物（第63図５、図版29）

須恵器

杯　５は底部回転ヘラケズリを施しているため切り離しは不明である。黒色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。

SA256柱列（第10図、図版10）

13個の掘り方は、地山砂（飛砂層）面で確認された。ほぼ東西方向に延びるが、東ではW－65ラインで止まっている。西にはさらに延びる可能性がある。掘り方プランは、70㎝～１ｍのほぼ円形を呈し、径約20㎝程の柱の「アタリ」がみられるが、柱筋は通らない。柱間は、おおよそ２ｍ位であるが、いくつかは遠近がある。埋土は、赤褐色砂で全体にボソボソしている。検出時の掘り方の深さは、約30㎝であるが、当初は上層から掘り込まれもっと深かったと考えられる。

SD250、251溝（第９図、図版９）

ほぼ東西に走る時期の異なる溝が２本検出された。溝間の距離は、西側では約９ｍ程であるが、東側では12ｍ程に広がる。北側のＳＤ250溝は巾約80㎝、深さ約30㎝で、第９層面から掘り込まれている。したがってＳＢ242、243掘立柱建物跡より古い時期である。ＳＤ251溝は巾約80㎝、深さ約１ｍで第６層面より掘り込まれている。埋土は赤褐色砂、黄色粘土ブロックが混入する。第５号住居跡よりは古い時期である。

SD250出土遺物（第64図１、図版29）

赤褐色土器

杯　１は回転糸切りで切り離した後に体部下端に回転ヘラケズリを施し、底部より内湾しながら立ちあがる。胎土、焼成ともに良好である。

SD251出土遺物（第64図２～８、図版29）

赤褐色土器

杯　２～４は回転糸切りで切り離した後に体部下端に回転ヘラケズリを施している。胎土、焼成ともに良好である。６～８は回転糸切りで再調整はみられない。８は外面口縁部から体部にかけて黒色炭化物が付着している。

須恵器

杯　回転ヘラ切りで、再調整はみられない。内湾しながら立ちあがる。赤褐色を呈しており、生焼け品と思われる。

SA247、248掘り方内出土遺物（第63図１、４、６、図版29）

赤褐色土器

杯　１はＳＡ247掘り方より出土した。1は回転糸切りで切り離し、その後体部下端に回転ヘラケズリを施している。内湾しながら立ちあがり、胎土、焼成ともに良好である。

須恵器

台付杯　４はＳＡ 247掘り方より出土した。回転ヘラ切りである。貼り付け高台で、周縁に軽いナデを施している。６はＳＡ248掘り方より出土した。回転ヘラ切りで、周縁にナデを施しているが、高台は欠損している。丸味をもって、まっすぐに立ちあがり、器高が深く、胎土、焼成ともに良好である。

ＬＤ・Ｅ－23、24ＳＫ255土坑内出土土器（第65図、図版29）

楕円形を呈するＳＫ 255より赤褐色土器杯が出土した。１～５は回転糸切りで、再調整はみられず、胎土、焼成ともに良好である。４、５は油煙が多量に付着しており、燈明皿に転用されたものと思われる。

（石郷岡　誠　一）

(3)　各層位出土遺物

各層位出土土器杯は、すべてロクロ引きで、切り離しは回転糸切り、ヘラ切りである。以後、糸切り、ヘラ切りと呼ぶ。

須恵器、土師器（内面黒色処理）の他に、赤褐色または茶褐色・明褐色を呈する土器は、すべて赤褐色土器と仮称した。これには、二次調整を施さないものと、体部下端および底部を回転・手持ちのヘラケズリを施したものがある。回転ヘラケズリは、単にヘラケズリ、手持の場合は、手持ちヘラケズリと記述する。

表土～第４層出土土器（第66図１～12、図版30の１～10）

赤褐色土器：１～９は、糸切り痕を有する土器である。器形は、底部から直線的に開く比較的器高の高い土器と、やや内反ぎみに立ちあがる土器に大別できる。11は、体部下端を約６㎜巾でヘラケズリを施しており、器全体が丸味を呈する土器である。

須恵器：12は、須恵器の短頸壺で、切り離しは糸切りである。

土師器：10は、内面黒色処理を施しており、ヘラミガキは、内面と外面口縁部にまでおよんでいる。

第５層出土土器（第66、67図13～55、図版30、31の11～42、１～８）

赤褐色土器：13～15は、体部下端を約1㎝巾でヘラケズリを施し、器全体が丸味を帯びている。14は、手持ちヘラケズリである。16～48の土器は、底部から直線的に立ちあがる土器と内反ぎみに立ちあがるものと大別できる。切り離しは、すべて糸切りである。

須恵器：50～52は糸切り、53、54はヘラ切りである。前者は後者に比べ、口径に対する底径が大きく器高が高い。

土師器：55は、内面と外面口縁部にヘラミガキを施した内面黒色土器である。切り離しは糸切りである。

第6層出土土器（第67、68図56～105、図版31、32の9～41、1～17）

赤褐色土器：56～68は、体部下端に約6㎜～2㎝巾でヘラケズリを施している。56、61は手持ちヘラケズリである。切り離しは糸切りである。

69～72は、底部から極端に開き直線的に口縁部に至る。69～96は、糸切りである。98、99は、赤褐色を呈する蓋である。肩部にはヘラケズリがみられる。61、62、64、92は、口縁部内外に油煙と考えられる黒色の付着物がみられる。

須恵器：100～103の切り離しは、ヘラ切りである。100は、丸味を帯びた底部であるが他の3点は直線的である。101、103の、口縁部に重ね焼き痕と考えられる帯状の色調の相違がみられる。104は、窯内で生じたと思われるユガミがみられ、切り離しは糸切りである。

その他の土器：105は、赤褐色を呈する焼成良好な鉢形土器である。全体をロクロで整形した後に、内面は全面細かいヘラミガキ、外面は口縁部を2㎝巾で細かいヘラミガキ、体部下半から底部全面にかけてあらい手持ちヘラケズリを施している。同層からは、片口の破片も出土しているので片口鉢の可能性も考えられる。106は、明褐色を呈する。内面は布目痕があることより、型によって成形されたものと考えられる。外面は、横、斜め方向に全面にわたって葉脈状の叩き板痕跡がみられる。上部には、欠損しているが鈕と考えられる二ヶ所の突起痕がある。蓋であろうか。

第7層出土土器（第68、69図107～156、図版32、33の18～33、1～34）

赤褐色土器：107～122は、体部下端に、約6㎜～1.6㎝巾のヘラケズリを施している。111、113、119は、手持ちのヘラケズリである。116は、内外面に赤色顔料を密に塗っている。また他の土器と比較すると整形も細かく、器重が軽い。切り離しは、すべて回転糸切りである。

123～139の、切り離しは、糸切りである。　器形は、直線的に開く皿形（123～125）、わずかに内反して口縁部に至る浅い杯、（126～127）やや深い杯、そして台付杯に大別できる。140、141は、ヘラケズリで肩部を整形している。140の切り離しは糸切りである。

須恵器：142～144の蓋は、前者の赤褐色土器の蓋と比較し、口径、器高とも小柄である。肩部は、ヘラケズリを施している。145～150は、ヘラ切りで切り離し、底部から体部への立ちあがりは丸味を帯びている。151、152の切り離しは糸切りである。前者に比較し、器高が高く、底部から口縁部

にかけて、ほぼ直線的にのびる。

土師器：153～155は、内面黒色処理を施している。切り離しは、糸切りである。153は体部下端をヘラケズリ、154は、外面全面にヘラケズリを施している。

その他の土器：156は、明褐色を呈する片口鉢である。全体は、ロクロで整形し、その後に体部下端を巾2㎝程右から左方向にあらいヘラケズリを施している。

第8層出土土器（第69、70図157～182、図版33、34の35～38、1～22）

赤褐色土器：157～169は、体部下端に、巾6㎜～2㎝のヘラケズリを施している。切り離しは、糸切りである。器形は、下端からゆるく内反するものと、167～169のように、ほぼ直線的に口縁部に至るものとに大別できる。後者の方は、口径に比べ器高が大である。170～175の切り離しは糸切りである。二次調査は施さない。176は、明褐色を呈する鉢で、切り離しは糸切りである。内面は、指（布）ナデにより滑らかである。177は、肩部にヘラケズリが施されている。

須恵器：178は、肩部にヘラケズリが施されている。179、180は、ヘラ切りによって直線的な底部を呈する。口縁部1㎝に、重ね焼痕と思われる色調の相違がみられる。181、182は、糸切り痕を有する。

第9層出土土器（第70、71図183～206、図版34、35の23～43、1～3）

赤褐色土器：183～195は、体部下端および底部に至るヘラケズリを施している。189は、手持ちヘラケズリ、185、188は、体部下端から底部全面におよぶヘラケズリが施されている。口縁部内外に一部油煙が付着している。燈明皿に使用したものであろうか。

196～198は、比較的器高の低い杯である。切り離しは、糸切りで二次調整は施されていない。

須恵器：199～204の切り離しは、ヘラ切りである。203は、底部の立ちあがりが丸味を持つ。200は粘土で杯を2個つなぎ合わせ、さらに、両者間に径6㎜程の穴が貫通している。199、201、203は、口縁部に重ね焼き痕がみられる。

土師器：205は、体部下端から底部全面に至るヘラケズリ、内面は黒色処理が施されている。切り離しは、不明である。206は外面頸部より下方は、縦方向のカキ目、内面は、外面と同工具で横方向のカキ目が施されている。頸部から口縁部に至る内外面は、横ナデが施されている。

第10層出土土器（第71図207～212、図版35の4～9）

赤褐色土器：207、208は、体部下端にはヘラケズリを施している。切り離しは、糸切りである。207は、口縁部内外に一部油煙が付着している。

須恵器：209、210の切り離しは、ヘラ切り、二次調整はなされていない。209は、内外面とも赤褐色を呈し比較的もろい。半焼成であろうか。211の切り離しは、糸切りである。212は、ヘラ切りで

切り離し、体部中央に把手が付されている。

最下層出土土器（第71図213～219、図版35の10～16）

赤褐色土器：213、214は、体部下端にヘラケズリを施している。切り離しは、糸切りである。

須恵器：215～217の切り離しは、ヘラ切りである。215は、体部中央よりやや口縁部よりに２つの把手が付されている。218の切り離しは、糸切りで比較的底径が大きい。213、218には口縁部に重ね焼痕がみられる。219は注口を有する須恵器である。注口は、器形の整形がなされた後に、1.5cm程の穴を穿って取り付け、その後に、その周囲をヘラケズリ整形している。

その他の出土遺物（第71、72図、図版35、36）

灰釉陶器（220、221）：220は、底部と見込部を除き内外面に淡緑色の釉がかけられている。体部下端と底部は、ヘラケズリが施されている。高台は、貼り付け高台である。221は、見込部を除いた内面に釉がかけられている。底部は回転ヘラケズリが施されている。胎土は、粒子が細かく非常に密で堅く焼きしまっている。断面は、灰白色を呈する。この他に、十数点の小片が出土している。

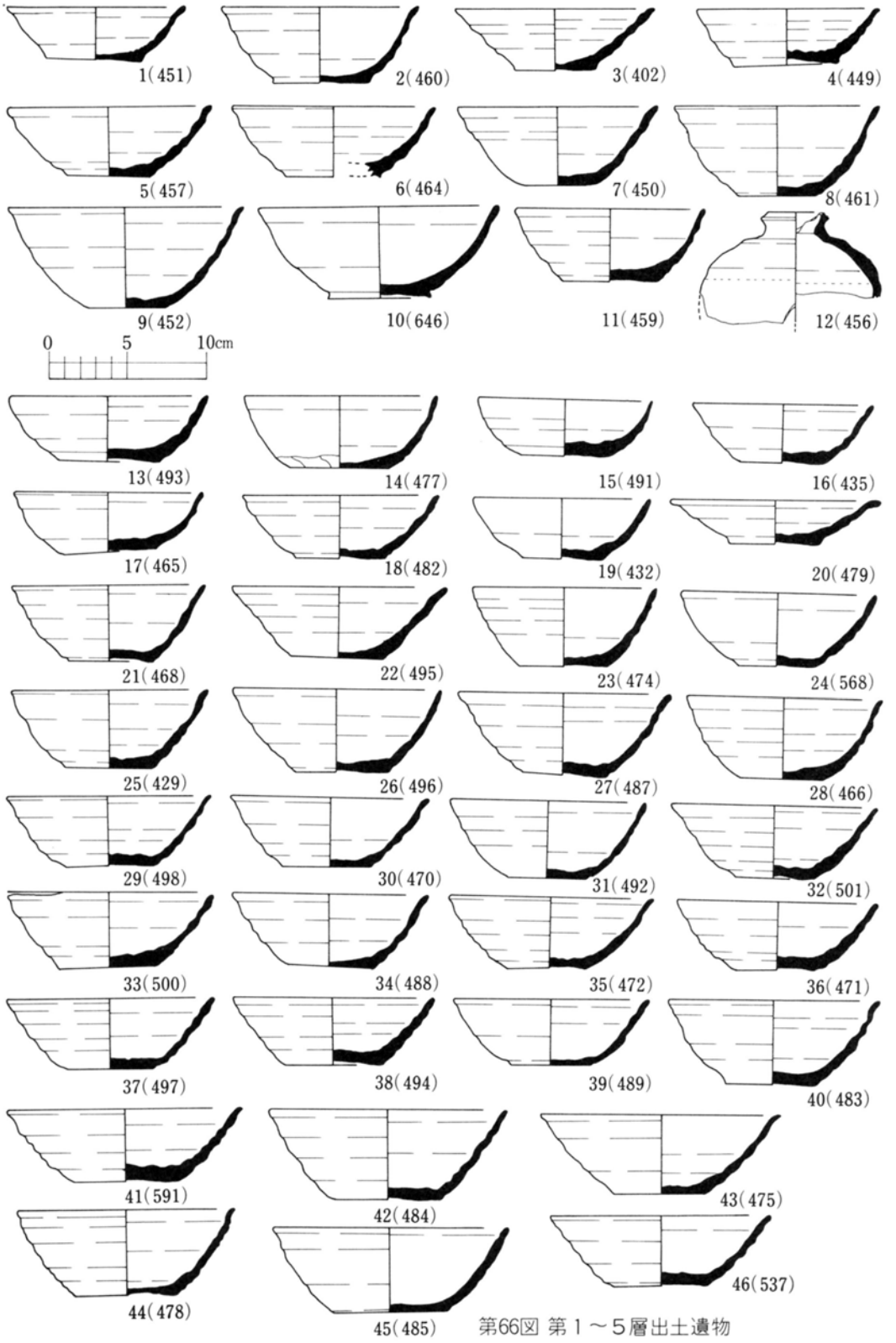
緑釉陶器（222、223）：底部のみで、全形は知り得ないが比較的大きい皿状のものと、小さめの碗状の土器である。釉は全面にかけられている。胎土は、粒子が細かく堅く焼きしまっており、断面は、灰青色を呈する。

硯（224、229）：風字硯と円面硯が出土している。224～226は風字硯である。224は、薄手に成形され、内外全面にわたって細かいヘラケズリが施されている。脚は、高さが約2.2 cmで９面に面取りされている。225は、全体に厚手である。側縁部は、葉脈状のタタキ板で叩き締めた後にヘラケズリで整形されている。内面は、わずかに傾斜して海部となる。脚は、約９面に面取りされている。226の側縁端は、同上の工具で叩き締められ、一部面取りされている。脚は円錘形を呈する。227～229は円面硯である。脚部は、ヘラ描きによる直線の沈線がみられる。また227、229は透かしと考えられる切り込みがある。

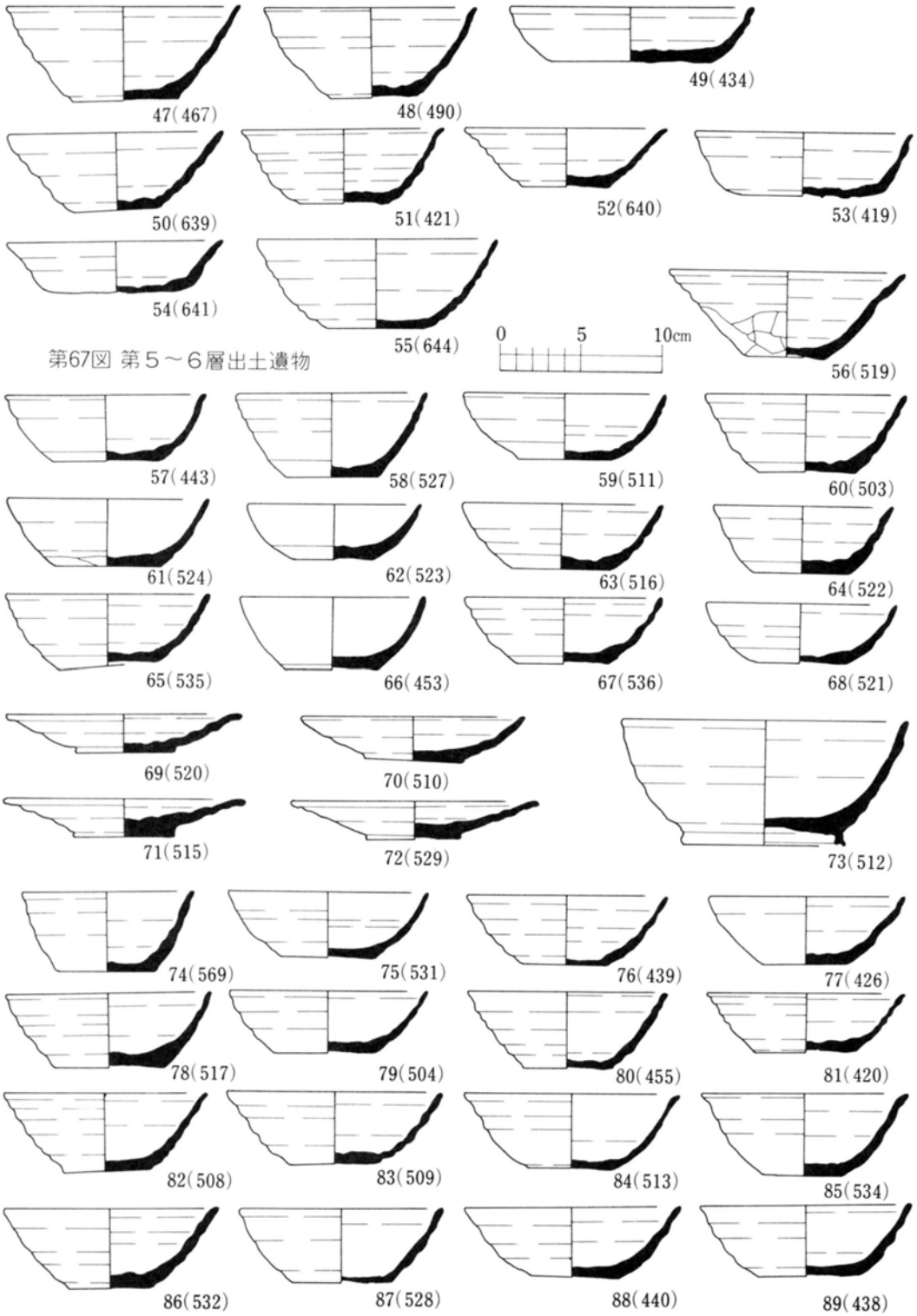
土錘（230～244）：230はあらいヘラケズリを施している。231は、両側面が凹み、工字状を呈する。235、236は球状に近い形である。237～244は長さ約４～６cmの小型を呈し、いずれも焼成は良好である。

坩堝：245、246は、器高2.3～2.5cmの坩堝と考えられる。胎土は、粒子があらく、堅く焼きしまっている。内面には、一部鉄滓が付着している。

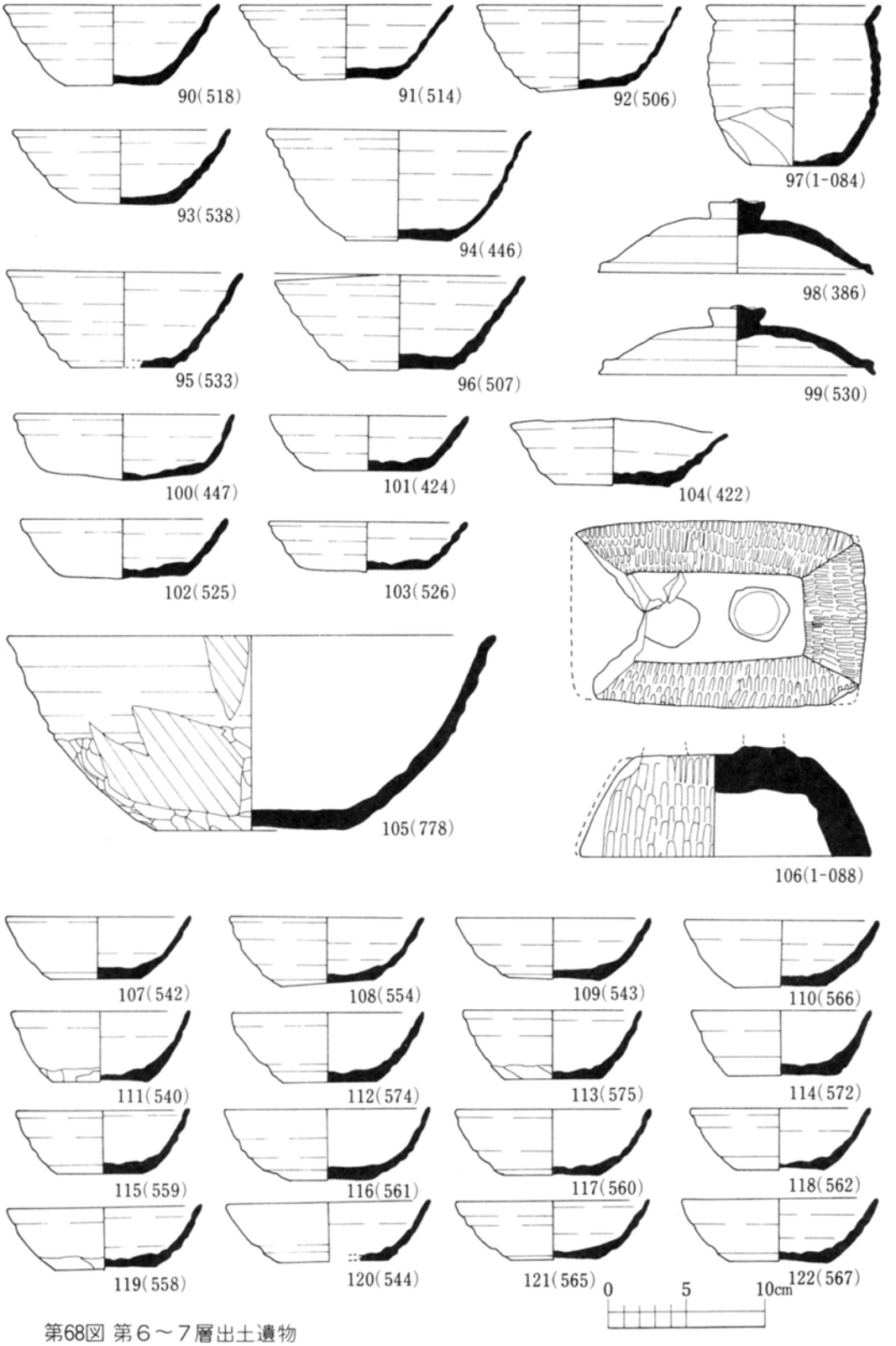
塼形状土製品（247～249）：小片なので全容はあきらかでないが、塼とほぼ同じ大きさと考えれる。しかし、中央部には径約1.5cm程の穴が貫通しており、塼とは異なるものである。２点には、ヘラ記号（文字か）がみられる。



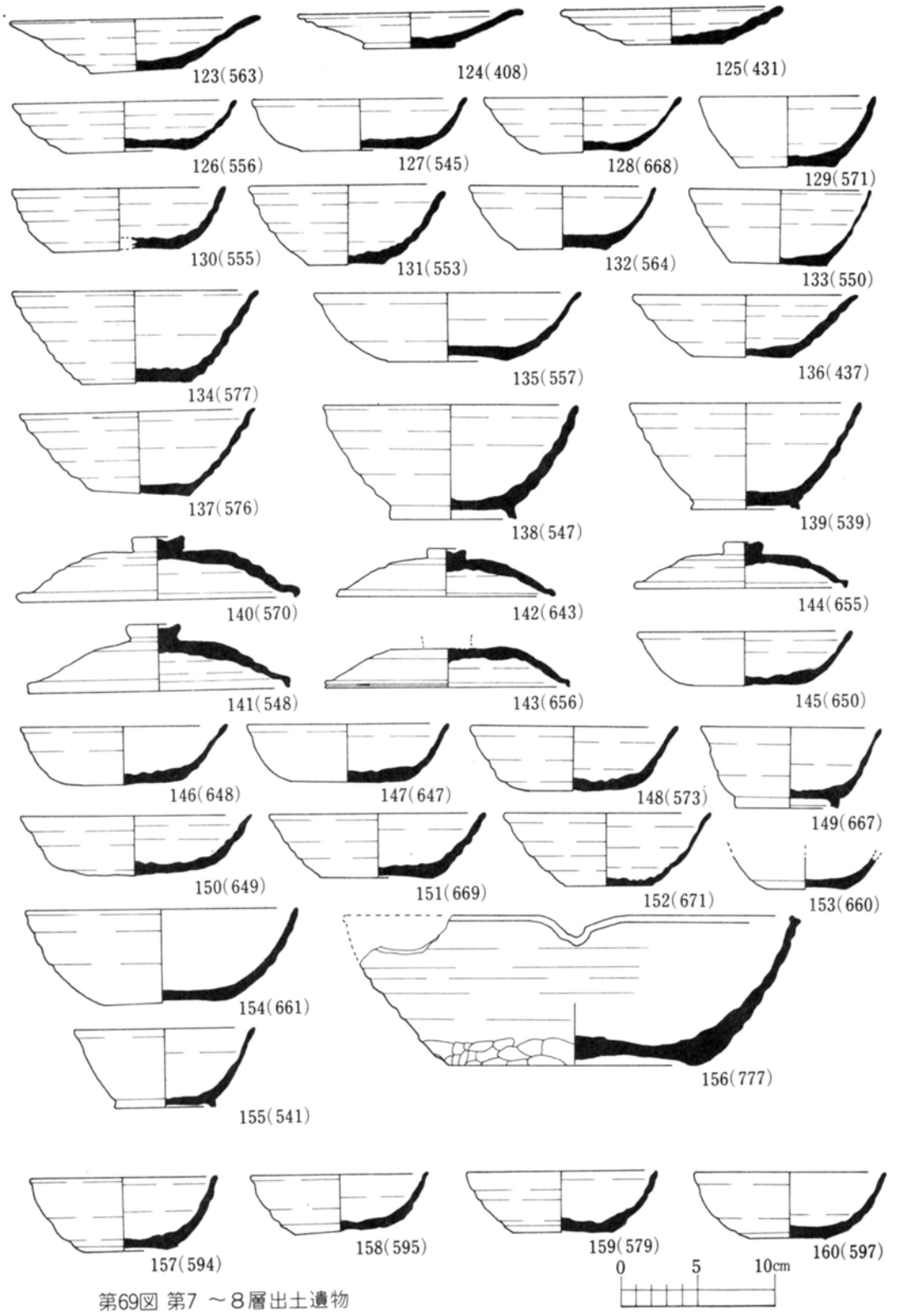
第66図 第１～５層出土遺物



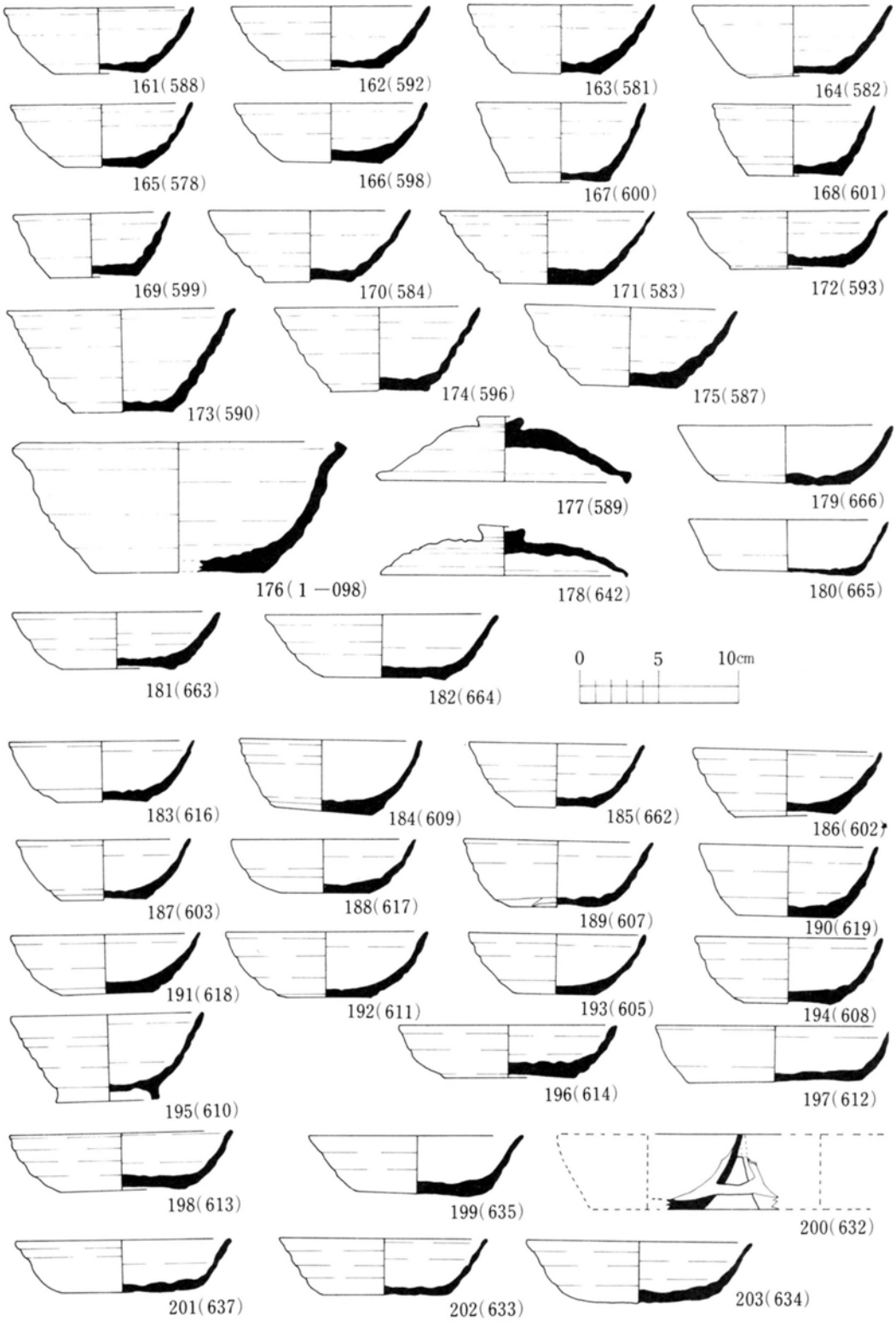
第67図 第５～６層出土遺物



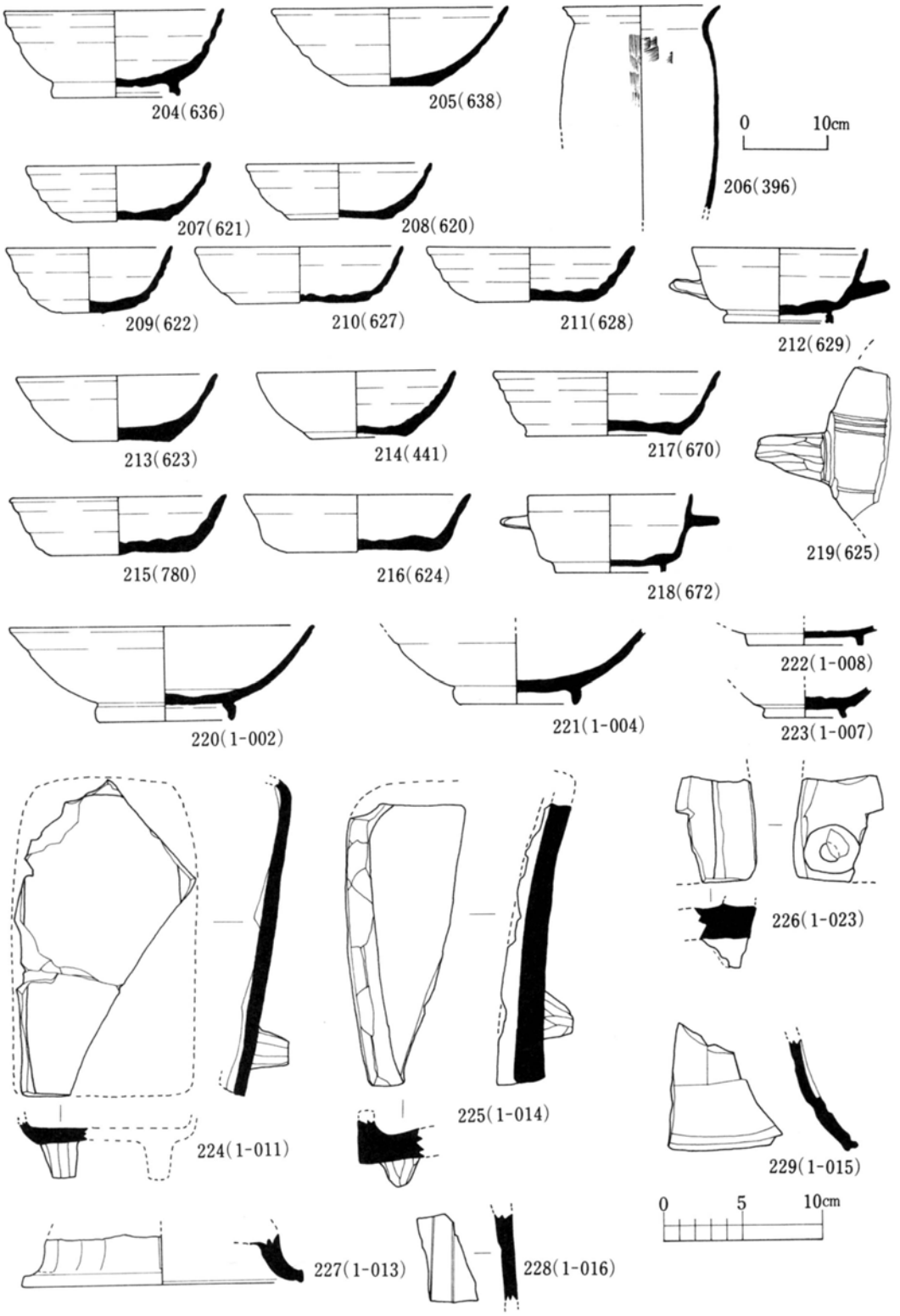
第68図 第６～７層出土遺物



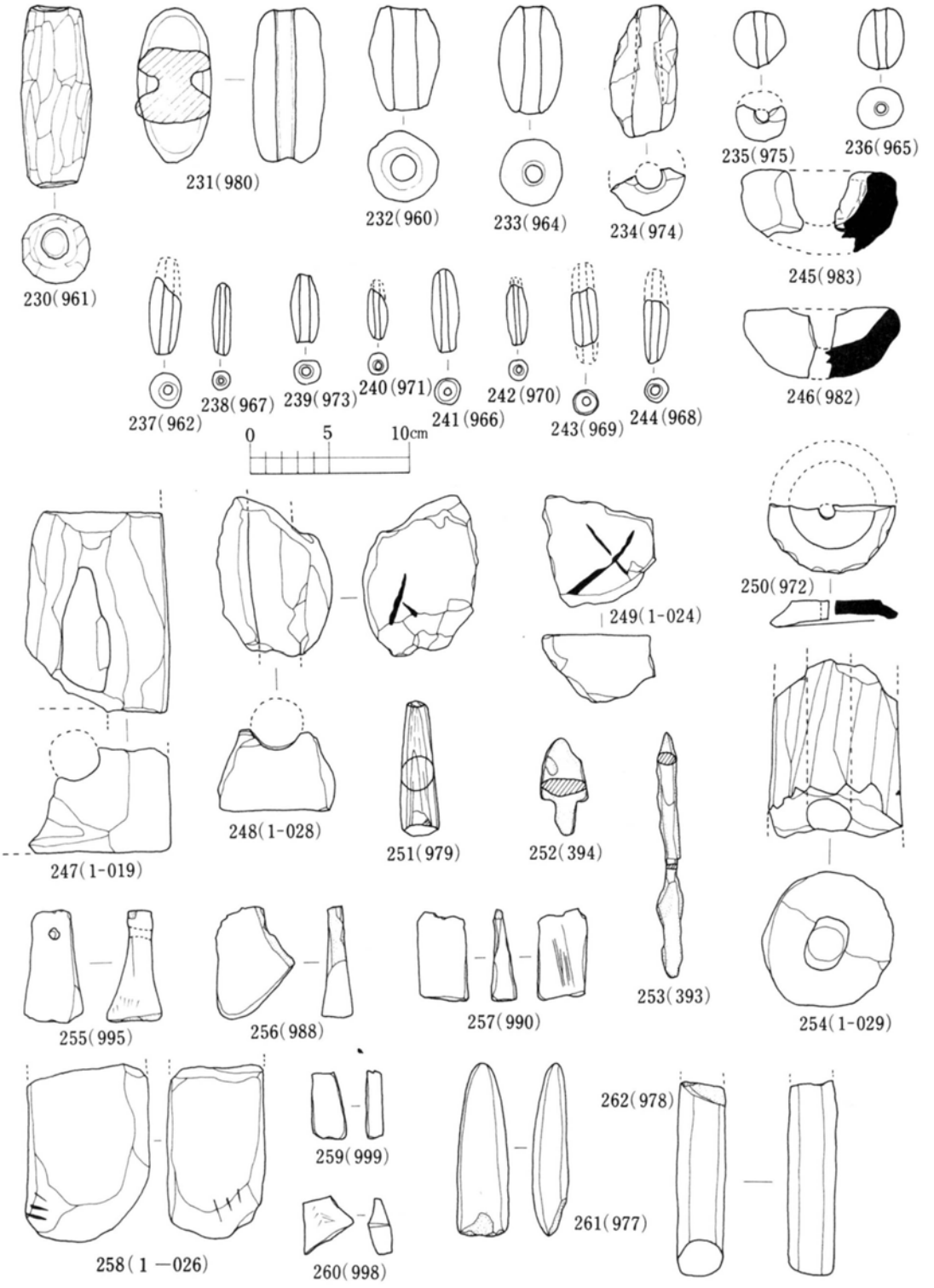
第69図 第7 ～8層出土遺物



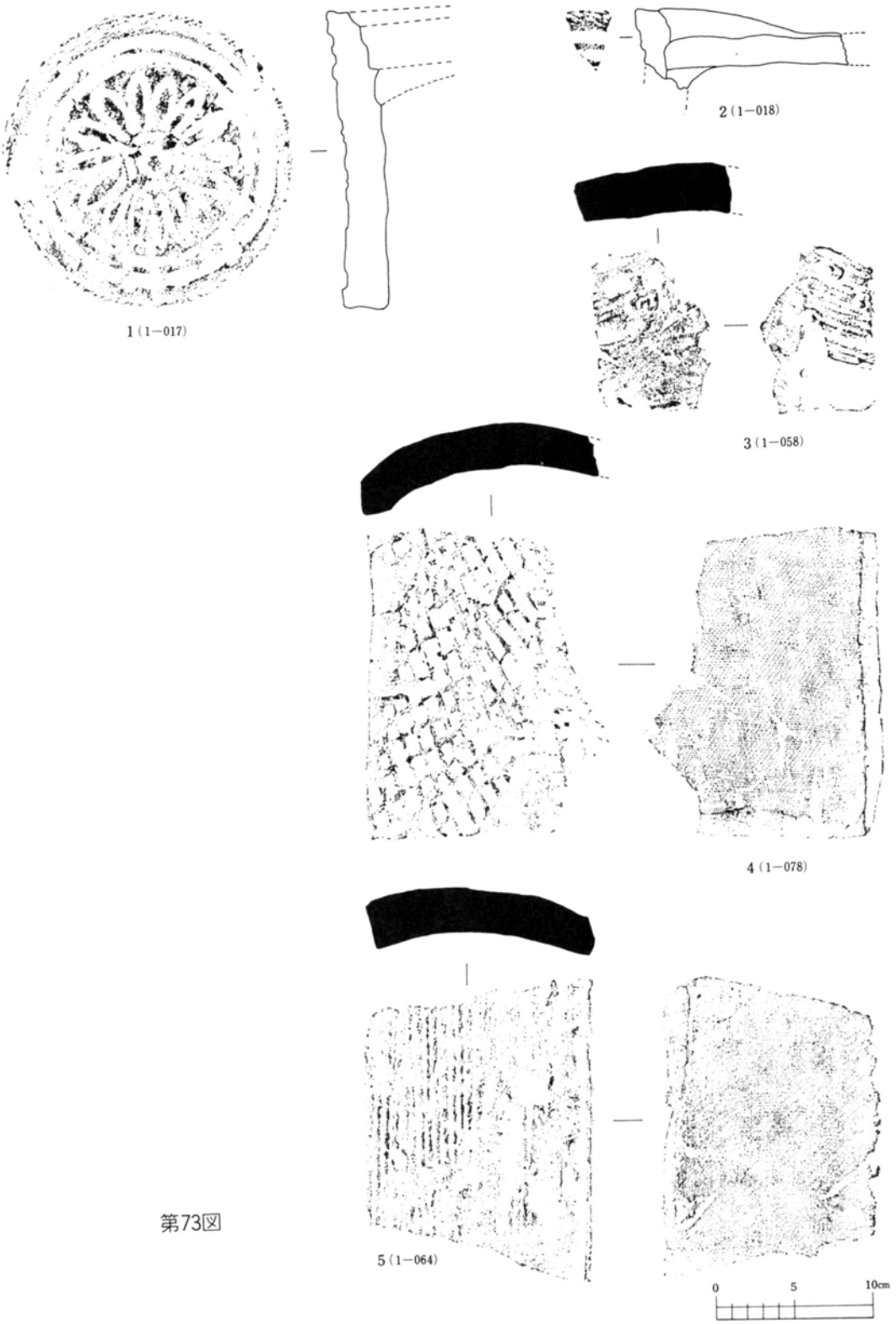
第70図 第８・９層出土遺物



第71図第９～最下層出土土器とその他の出土遺物


230(961)
231(980)
232(960)
233(964)
234(974)
235(975)
236(965)
245(983)
237(962)
238(967)
239(973)
240(971)
241(966)
242(970)
243(969)
244(968)
246(982)
0
5
10cm
247(1-019)
248(1-028)
249(1-024)
250(972)
251(979)
252(394)
253(393)
254(1-029)
255(995)
256(988)
257(990)
258(1 —026)
259(999)
260(998)
261(977)
262(978)

第72図 その他の遺物



第73図

紡錘車（250）：赤褐色土器の底部周囲を打ち欠き、中心部に径1㎝の穴を穿っている。

鉄製品：252、253は、茎部が欠損している。253は、全長が7.7㎝である。

フイゴ羽口：254は径約8㎝で中心部に約1㎝の穴が貫通している。

砥石（255～260）：255は携帯用の小孔が穿たれている。257、258、260は、沈線状の使用痕がみられる。石質はすべて緑色凝灰岩である。

石製品：261は、磨製石斧で石質は、粗粒玄武岩質安山岩である。262は、石棒片であるが一方端に斜めに研磨痕がみられる。石質は、泥板岩である。251は、頁岩製の石製品である。

瓦（第73図、図版37の4、5、6、7）

1は第7層出土の軒丸瓦で、これまで検出したものと同笵である。15葉細弁蓮華文で、中房には1+4の蓮子がある。2は第5層出土の軒丸瓦の周縁の破片である。3は第7層出土の「高」の刻印のある格子目瓦である。4は第3層出土の格子の大きな格子目瓦である。5は第9層出土の熨斗瓦で、1枚造りの平瓦を半截したものである。分割線は厚さ3㎜程を残し切り込まれており、半截は乾燥後或いは焼成後に行なわれている。

尚、石質については、秋田県立博物館学芸主事の加藤万太郎氏に御教示を得た。

墨書土器（第74～84図、図版38～43）

墨書土器は、住居跡、掘り方、各層位から出土し、判読可能なもの176点、判読不能あるいは墨のついた土器片80点、総計256点に達する。これらを各出土別に表示すると表Ⅷ～Ⅺのようになる。

大部分は杯類であるが、他に蓋、甕、石等にもみられる。墨書部位は（表Ⅶ）、底部が最も多く、次に体部、また底部の他に体部に数文字配列される場合もある（第83図、155）。蓋の場合は、外面肩部が最も多く、特殊なものとして内面に墨書された例もある。

文字の種類は、判読可能なものを層位ごとにみると表Ⅴのようになる。各層位に最も多い文字は「厨」、「大」、「上」で、量的にも共通性がある。特に興味をひくのは、「中食」が第8層に集中することである。「中食」、「中」については、他に第18号住居跡内で4点出土している。

墨書土器全体からみた文字別数量は、表Ⅵになる。ここでも「厨」が最も多く、ついで「上」、「大」の順序である。

「厨」の場合は、一字の墨書が多いが、その他に「厨」を用いた熟語に「厨酒」、「厨上」、「口厨舎」、「官厨舎」、「官厨」等がみられ、機能あるいは使用場所の相違が考えられる。同様に、使用場所を意味すると考えられる墨書には、「政所」、「六郎官」、「井」、「酒所」、「中食」などがあげられる。「中食」、「官厨」、「官」は、住居跡内からまとまって出土しているので、その住居跡の性格などの考察には重要な要素となるであろう。

この他の注意すべき墨書には、郡の四等官のうち第4番目を指す「主帳」、広義では天皇または皇

族に近待し、雑役にあたる官人である「舎人」などがあげられる。

固有名詞と思われる墨書として出土地点、層位は異なるが「秋田」「雄城」があげられる。「秋田」はいうまでもなく「秋田城」を意味するものであるが、「雄城」は、「雄勝城」と考えられ、両者の相互関係を示すものとして注目される。ちなみに、「雄城」の墨書土器は第5・7層から出土しており、3点とも切り離しは回転糸切り、底部は口径に比べ小さく、ほぼ直線的に口縁部に至る。胎土・焼成は良好で、断面に白いブツブツが混入するのも共通性がある。

127は、須恵器蓋の内面に「橘」＝まつかぜそう科、みかん類の総称。「橡」＝ぶな科の落葉高木。「槙」＝いぬまき科の常緑高木。の墨書があり、いずれも樹木名を意味する。96は、赤褐色土器の小破片に「秀」の字が、太字と細字を重ねて習書されている。

特殊な墨書には、10、21がある。10は「諱」と判読できるが、部首「言」の「口」の部分のみ朱書である。「諱」は、「忌み名」であり、その意味を含む朱書であろうか。21は「慮」と判読できる。字画とは直接関係はないが、やはり朱書がみられる。

書体は大部分が「行書体」、「草

表－Ⅴ　墨書別各層位出土量

	4	5	6	7	8	9	10	11	計
厨	1	6	3	3	5	4			22
大	1		1	3	2				7
上	1		1	1	1	5			9
〔直〕	1								1
机〔所〕	1								1
縄	1								1
仁		1							1
水〔取〕		1							1
六郎官		1							1
舘		1							1
下人給		1							1
雄　城		1		1					2
太			1						1
井			2						2
〔継〕			1						1
〔厨〕〔酒〕			1						1
望			1						1
主			1						1
〔御〕〔料〕			1						1
下			1		1				2
毛　十				1					1
国				1					1
廣				1					1
清				1					1
中				1					1
縣				1					1
役　口				1					1
一				1					1
御				1					1
酒〔所〕				1					1
〔奈〕					1				1
見					1				1
中　食					4				4
政　所					1				1
厨　上					1				1
官						2			2
十　万						1			1
舎　人						1			1
政						1			1
秋　田									
二								1	1
允						1	1		2
人								1	1
計	6	12	16	16	17	16	1	2	86

表－Ⅵ墨書別個数

墨　書	個数
厨	28
上	9
大	8
中　食	6
官	5
中	4
秋　田	4
雄　城	3
井	3
厨　酒	3
太	2
下	2
政	2
国	2
計	81

表－Ⅶ墨書部位

部　位	個数
底　部	127
体　部	35
底体部	2
蓋外面	8
蓋内面	1
蓋　鈕	1
甕外面	1
石	1
計	176

表 Ⅷ

番号	器種	調整技法	切り離し	色調	墨書部位	出土層位	書体	備考
1 (954)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	底部	4層	行	縄
2 (937)	赤褐色土器		〃	〃	〃	4層	草	机□〔所〕ヵ
3 (904)	赤褐色土器		〃	〃	〃	4層	行	厨
4 (863)	赤褐色土器		不明	〃	体部	4層	草	〔丸ヵ〕丸は瓦の異体字
5 (845)	赤褐色土器		〃	〃	〃	4層	草	大□
6 (867)	赤褐色土器		糸切り	〃	底部	4層	行	真
7 (802)	赤褐色土器		〃	〃	〃	4層	行	上
8 (923)	赤褐色土器		不明	〃	体部	4層	行	大
9 (861)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	行	仁
10 (865)	赤褐色土器		糸切り	〃	底部	5層	行	〔諱ヵ〕言の「口」が朱
11 (952)	赤褐色土器		不明	茶褐色	体部	5層	草	水〔取ヵ〕
12 (826)	土師器	底部手持ヘラケズリ	〃	〃	底部	5層	草	六郎□〔官ヵ〕
13 (874)	赤褐色土器		糸切り	〃	〃	5層	行	〔舘ヵ〕
14 (860)	土師器	内面黒色処理	不明	〃	体部	4層	楷	〔合ヵ〕又は〔給ヵ〕
15 (906)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	底部	5層	草	厨
16 (911)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	草	〔厨ヵ〕
17 (900)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	草	厨
18 (917)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	草	厨
19 (897)	土師器		〃	赤褐色	〃	5層	草	厨
20 (910)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	行	〔厨ヵ〕
21 (936)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	明褐色	体部	5層	行	下人給
22 (815)	赤褐色土器		〃	〃	〃	5層	草	〔慮ヵ〕
23 (859)	赤褐色土器		ヘラ切り	灰青色	底部	5層	行	〔出ヵ〕
24 (948)	須恵器		糸切り	〃	〃	5層	行	□〔雒ニ雄ヵ〕□〔城ヵ〕
25 (919)	須恵器		〃	〃	体部	6層	行	大
26 (876)	土師器	内面黒色処理	不〃明	赤褐色	〃	6.7層	行	太
27 (857)	土師器	〃	糸り	〃	〃	6層	行	太
28 (933)	土師器	〃	〃	〃	〃	6層	行	井
29 (934)	土師器	〃	〃	〃	〃	6層	行	井
30 (892)	須恵器		ヘラ切り	灰褐色	底部	6~9層ベルト	草	〔厨ヵ〕
31 (908)	須恵器		〃	灰青色	〃	6層	草	厨
32 (915)	赤褐色土器		不明	赤褐色	体部	6層	行	〔厨ヵ〕
33 (914)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	底部	6層	行	〔厨ヵ〕
34 (870)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	体部	6層	草	□□□〔判〕他に1~2文字あったか
35 (810)	須恵器		ヘラ切り	灰白色	底部	6層～9層	草	〔継ヵ〕
36 (887)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	〃	6層	行	□〔厨ヵ〕□〔酒ヵ〕
37 (872)	須恵器		ヘラ切り	赤褐色	〃	6層	行	望
38 (875)	須恵器		糸切り	灰青色	〃	6層	行	主
39 (836)	須恵器		ヘラ切り	〃	〃	6層～9層	草	〔左ヵ〕
40 (953)	須恵器		糸切り	〃	〃	6層	草	□〔御ヵ〕□〔料ヵ〕
41 (798)	須恵器		〃	赤褐色	〃	6層	行	下
42 (844)	須恵器		ヘラ切り	灰褐色	〃	6層	行	判読不能
43 (832)	土師器	内面黒色処理	糸切り	赤褐色	〃	6層	草	□〔毛ヵ〕十
44 (841)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	〃	6層～9層	行	国ニ国

表 IX

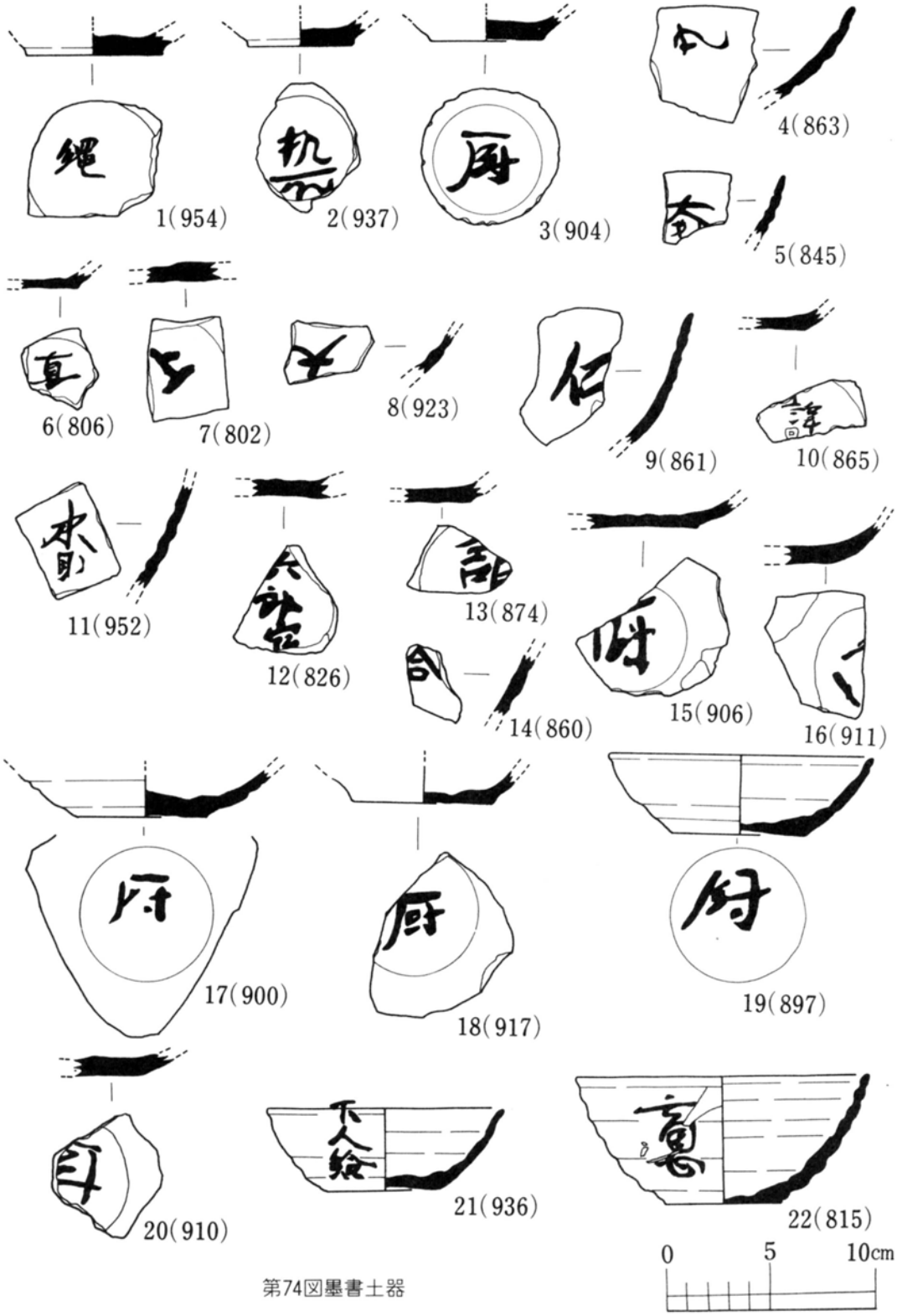
番号	器種	調整技法	切り離し	色調	墨書部位	出土層位	書体	備考
45 (820)	赤褐色土器		不明	赤褐色	体部	6 層	草	□〔乗ヵ棄ヵ〕
46 (801)	須恵器蓋		〃	灰青色	外面	6 層	行	上
47 (854)	須恵器		ヘラ切り	〃	底部	7 層	行	廣＝広
48 (847)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	〃	7 層	行	清 糸ヘンヵ 綉
49 (782)	須恵器		ヘラ切り	灰白色	〃	7 層	行	中
50 (941)	須恵器		〃	灰青色	〃	7 層	行	縣
51 (823)	須恵器		〃	〃	〃	7 層		□ 判読不能
52 (950)	須恵器		糸切り	灰白色	〃	7 層	草	雄 城 碓は雄の異体字
53 (863)	赤褐色土器		〃	赤褐色	体底部	7 層	楷	□〔伯ヵ〕□ 開
54 (943)	須恵器		〃	灰青色	底部	7 層	行	役 □
55 (837)	須恵器		〃	〃	〃	7 層	行	一
56 (862)	赤褐色土器		〃	赤褐色	〃	7 層	行	〔所ヵ〕
57 (800)	須恵器		ヘラ切り	〃	〃	7 層	行	上
58 (886)	赤褐色土器		糸切り	〃	〃	7 層	行	□〔酒ヵ〕□
59 (824)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	7 層		□ □ 判読不能
60 (831)	〃	〃	〃	〃	〃	7 層	行	□〔五ヵ〕□
61 (939)	須恵器蓋	外面肩部回転ヘラケズリ	不明	灰青色	外面	7 層	草	〔御ヵ〕
62 (902)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	底部	7 層	草	厨
63 (883)	土師器	体部下端底部回転ヘラケズリ	不明	〃	〃	7 層		□ □〔厨ヵ〕
64 (916)	赤褐色土器		糸切り	〃	〃	7 層	草	厨
65 (913)	〃		〃	〃	〃	7 層	草	厨
66 (884)	〃		〃	〃	〃	7 層	草	□ □〔酒ヵ〕〔所ヵ〕
67 (921)	須恵器		ヘラ切り	〃	〃	7 層	草	大
68 (920)	赤褐色土器		糸切り	〃	〃	7 層	草	大
69 (927)	土師器	内面黒色処理	〃	〃	底部	7 層	行	大
70 (893)	〃	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	8 層	行	〔上ヵ〕
71 (819)	赤褐色土器		不明	灰白色	体部	8 層	行	□ □〔長ヵ〕
72 (817)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	底部	8 層	行	〔盛ヵ〕
73 (812)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	〃	8.9 層ベルト		□ 判読不能
74 (806)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	8 層	草	下
75 (799)	赤褐色土器		〃	明褐色	〃	8.9層ベルト	草	上
76 (808)	〃		〃	赤褐色	体部	8 層		□ 判読不能
77 (931)	〃		不明	〃	〃	8 層	草	秀を太字、細字で重書き
78 (946)	土師器	内面黒色処理	糸切り	〃	底部	8.9層ベルト	行	〔奈〕
79 (848)	須恵器		〃	灰白色	〃	8 層	行	見
80 (784)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	赤褐色	〃	8 層	行	中食
81 (783)	赤褐色土器		〃	明褐色	〃	8 層	行	中食
82 (794)	〃		〃	赤褐色	〃	8.9層ベルト内	行	中食
83 (791)	〃		〃	〃	〃	8.9層ベルト内	行	中食 内面に赤色顔料の付着あり
84 (909)	須恵器		ヘラ切り	〃	〃	8.9 層	行	厨
85 (888)	赤褐色土器		〃	明褐色	〃	8 層	草	厨
86 (881)	〃		糸切り	〃	〃	8 層	草	政厨
87 (891)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	8 層	草	厨上
88 (905)	赤褐色土器		〃	赤褐色	〃	8 層	草	厨

表 X

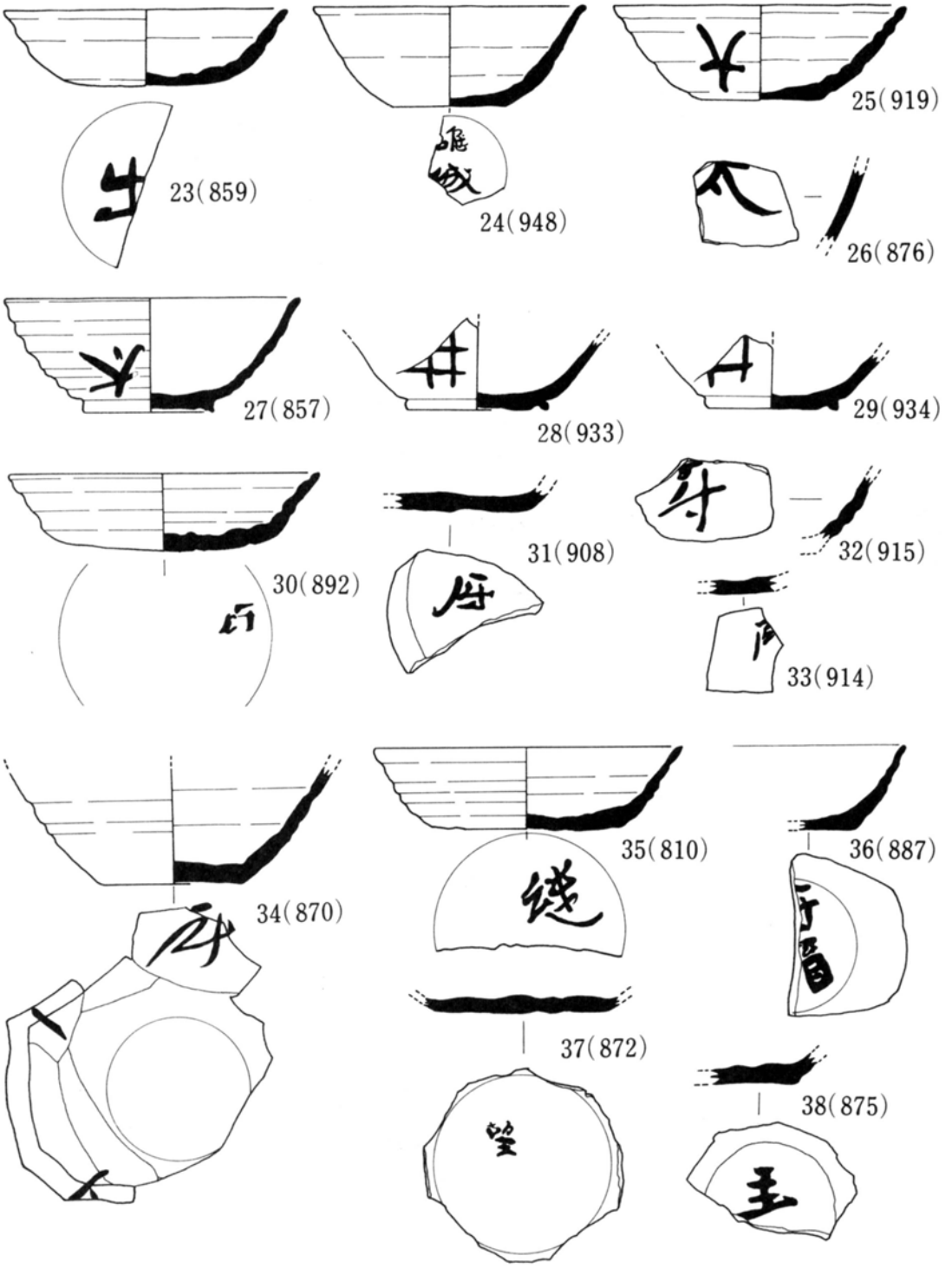
番号	器種	調整技法	切り離し	色調	墨書部位	出土層位	書体	備考
89 (889)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	底部	8 層	㊟草	厨
90 (912)	赤褐色土器		不明	赤褐色	体部	8.9 層	㊟草	厨
91 (922)	〃		糸切り	灰白色	底部	8 層	㊟楷	大
92 (896)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	赤褐色	〃	9 層	㊟行	厨
93 (924)	須恵器		〃	灰褐色	体部	8.9 層	㊟行	大
94 (895)	〃		ヘラ切り	灰青色	底部	9 層	㊟草	厨
95 (615)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	糸切り	赤褐色	〃	9 層	㊟草	厨
96 (918)	須恵器		ヘラ切り	灰褐色	〃	9 層	㊟草	厨
97 (804)	赤褐色土器		糸切り	〃	〃	9 層	㊟草	上
98 (929)	土師器	内面黒色処理	〃	赤褐色	〃	9 層	㊟草	上
99 (797)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	〃	9 層	㊟草	〔上カ〕
100 (803)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	〃	9 層	㊟行	上
101 (796)	石					9 層	㊟行	上(石英質の礫)
102 (850)	須恵器		不明	灰青色	体部	9 層	㊟草	官
103 (851)	〃		ヘラ切り	灰白色	底部	9 層	㊟草	官
104 (833)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	体部	9 層	㊟行	十万
105 (834)	須恵器		〃	灰白色	底部	9 層	㊟草	舎人
106 (935)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	9 層	㊟草	政
107 (838)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	〃	9 層	㊟草	石 □
108 (879)	〃		〃	〃	〃	9 層	㊟草	允カ
109 (869)	〃		糸切り	灰白色	〃	9 層	㊟草	成
110 (944)	〃		ヘラ切り	灰青色	〃	9 層	㊟行	〔権カ〕
111 (957)	〃		〃	〃	〃	9 層	㊟行	刀
112 (1-098)	須恵器蓋		〃	〃	外面	9 層	㊟行	秋田
113 (840)	須恵器		〃	〃	底部	9 層	㊟草	□ 厨舎
114 (816)	須恵器		〃	〃	〃	9 層		〔衆カ〕
115 (842)	須恵器蓋		不明	〃	外面	9層内ピット内	㊟行	大手
116 (828)	須恵器		ヘラ切り	赤褐色	底部	10 層	㊟行	□ 判読不能〔飲カ〕
117 (877)	〃		〃	灰青色	〃	10 層		允
118 (822)	須恵器蓋		不明	〃	内面	10 層		平仮名状の墨書
119 (956)	須恵器		ヘラ切り	〃	底部	10 層	㊟草	〔之カ〕〔允カ〕
120 (805)	〃		〃	灰白色	体部	10 層	㊟行	上 □
121 (846)	須恵器蓋	外面肩部回転ヘラケズリ	不明	赤褐色	外面	11 層	㊟行	二
122 (928)	須恵器	体部下端回転ヘラケズリ	ヘラ切り	灰褐色	底部	砂層直上	㊟行	人
123 (938)	〃		〃	〃	〃	方形掘方 14号東南	㊟行	人長
124 (864)	〃		〃	灰青色	〃	地山砂	㊟行	〔慶カ〕
125 (894)	〃		糸切り	〃	〃	11号内 掘り方	㊟行	厨
126 (844)	〃		ヘラ切り	〃	〃	掘り方内	㊟行	国
127 (949)	〃		〃	赤褐色	〃	〃	㊟草	〔之カ〕与カ
128 (871)	須恵器蓋		不明	灰青色	外面	掘り方内 地山土砂層	㊟草	橘 橡 □〔槇カ〕□□
129 (839)	赤褐色土器		糸切り	灰褐色	底部	灰白色粘土 落ち込み	㊟草	金
130 (898)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	落ち込み 褐色砂	㊟草	厨
131 (925)	須恵器		〃	灰青色	体部	落ち込み内	㊟行	大
132 (789)	須恵器甕			〃	肩部	溝内埋土	㊟行	官

表 XI

番号	器種	調整技法	切り離し	色調	墨書部位	出土層位	書体	備考
133 (873)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	底部	黄褐色砂層		□判読不能
134 (788)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	〃	〃	3層	行	食
135 (795)	須恵器		ヘラ切り	〃	〃	焼土内	草	秋田
136 (853)	〃		〃	灰青色	体部	褐色砂	行	田
137 (811)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	底部	表採	草	秋田
138 (899)	須恵器		〃	灰青色	〃	褐色砂	草	〔厨ヵ〕
139 (903)	赤褐色土器		〃	赤褐色	〃	表採	草	〔厨ヵ〕
140 (901)	赤褐色土器		〃	〃	〃	北壁ベルト内	草	〔厨ヵ〕
141 (825)	〃		〃	〃	〃	表採	行	□判読不能〔則ヵ〕
142 (792)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	明褐色	〃	ベルト内	行	中食
143 (932)	須恵器蓋	外面肩部回転ヘラケズリ	不明	灰白色	外面	表採	行	長岡〔正〕
144 (855)	〃	〃	糸切り	〃	鈕	表採	行	五万
145 (882)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	明褐色	底部	東壁	草	政□〔厨ヵ〕
146 (955)	須恵器		ヘラ切り	灰褐色	〃	表採	草	政
147 (866)	〃	体部下端底部回転ヘラケズリ	〃	灰白色	〃	赤褐色砂層		〔佐ヵ〕
148 (945)	赤褐色土器		糸切り	赤褐色	体部	北壁ベルト内	草	□□〔所ヵ〕
149 (959)	〃		不明	〃	〃	〃	草	□中
150 (930)	〃		〃	〃	〃	灰白色土	行	井
151 (830)	須恵器		ヘラ切り	灰褐色	〃	赤褐色砂層	楷	正
152 (947)	〃		糸切り	灰白色	底部	ベルト内	行	雄□〔城ヵ〕雄は雄の異体字
153 (940)	〃		ヘラ切り	灰青色	〃	9層面落ち込み	行	〔信ヵ〕
154 (878)	〃		〃	〃	〃	9層面落ち込み		□判読不能
155 (958)	〃	体部下端回転ヘラケズリ	〃	灰褐色	底部体部	LDE25ラインベルト内	草	馬他□□□他二文字の可能性あり
156 (829)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	底部	1号住埋土	草	長
157 (890)	須恵器		ヘラ切り	灰白色	〃	4号住床面	草	厨上
158 (809)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	体部	1号住居跡埋土		木
159 (813)	〃		不明	〃	〃	2号住内炭化物層		□□判読不能
160 (942)	〃		〃	〃	〃	5号住埋土	行	主帳
161 (856)	〃		糸切り	〃	〃	5号住カマド付近	草	加
162 (821)	土師(赤褐色土器)		不明	〃	〃	5号住居埋土	草	□判読不能
163 (926)	土師器	内面黒色処理	糸切り	〃	〃	9号赤褐色砂	行	□大
164 (849)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	底部	9号住埋土	草	官
165 (907)	〃		〃	灰白色	〃	9号床面	草	厨
166 (843)	須恵器		〃	灰青色	〃	11号埋土	草	官厨舎
167 (793)	須恵器蓋	外面肩部回転ヘラケズリ	不明	〃	外面	14号住床面	行	秋田
168 (951)	土師器	底部回転ヘラケズリ	〃	赤褐色	底部	14号下床面	草	〔金ヵ〕
169 (885)	須恵器		ヘラ切り	灰青色	〃	14号住埋土	行	官
170 (880)	〃		〃	〃	〃	14号床面	草	官厨
171 (785)	赤褐色土器		糸切り	明褐色	〃	18号住床面	行	中食
172 (790)	〃		〃	赤褐色	〃	18号住床面	行	中
173 (787)	土師器	体部下端回転ヘラケズリ	〃	明褐色	〃	18号住床面	行	中
174 (786)	赤褐色土器		〃	赤褐色	〃	18号住床面	行	中
175 (858)	〃		静止糸切り	〃	〃	28号住床面	草	殿
176 (835)	須恵器		ヘラ切り	灰白色	〃	29号住床面	楷	寸
177 (827)	須恵器		〃	〃	〃	29号住埋土	行	官□

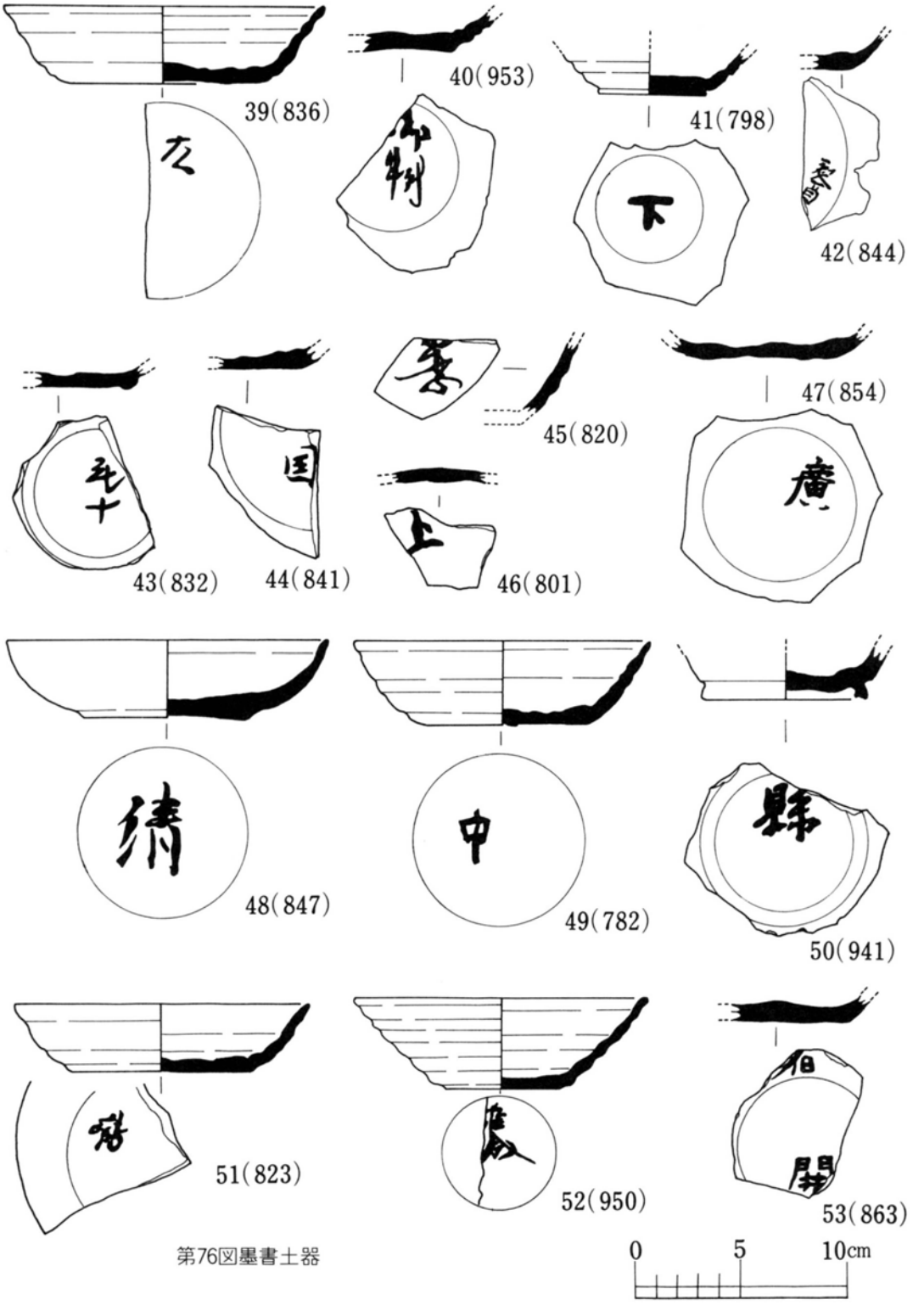

1(954)
2(937)
3(904)
4(863)
5(845)
6(806)
7(802)
8(923)
9(861)
10(865)
11(952)
12(826)
13(874)
14(860)
15(906)
16(911)
17(900)
18(917)
19(897)
20(910)
21(936)
22(815)
0
5
10cm

第74図墨書土器

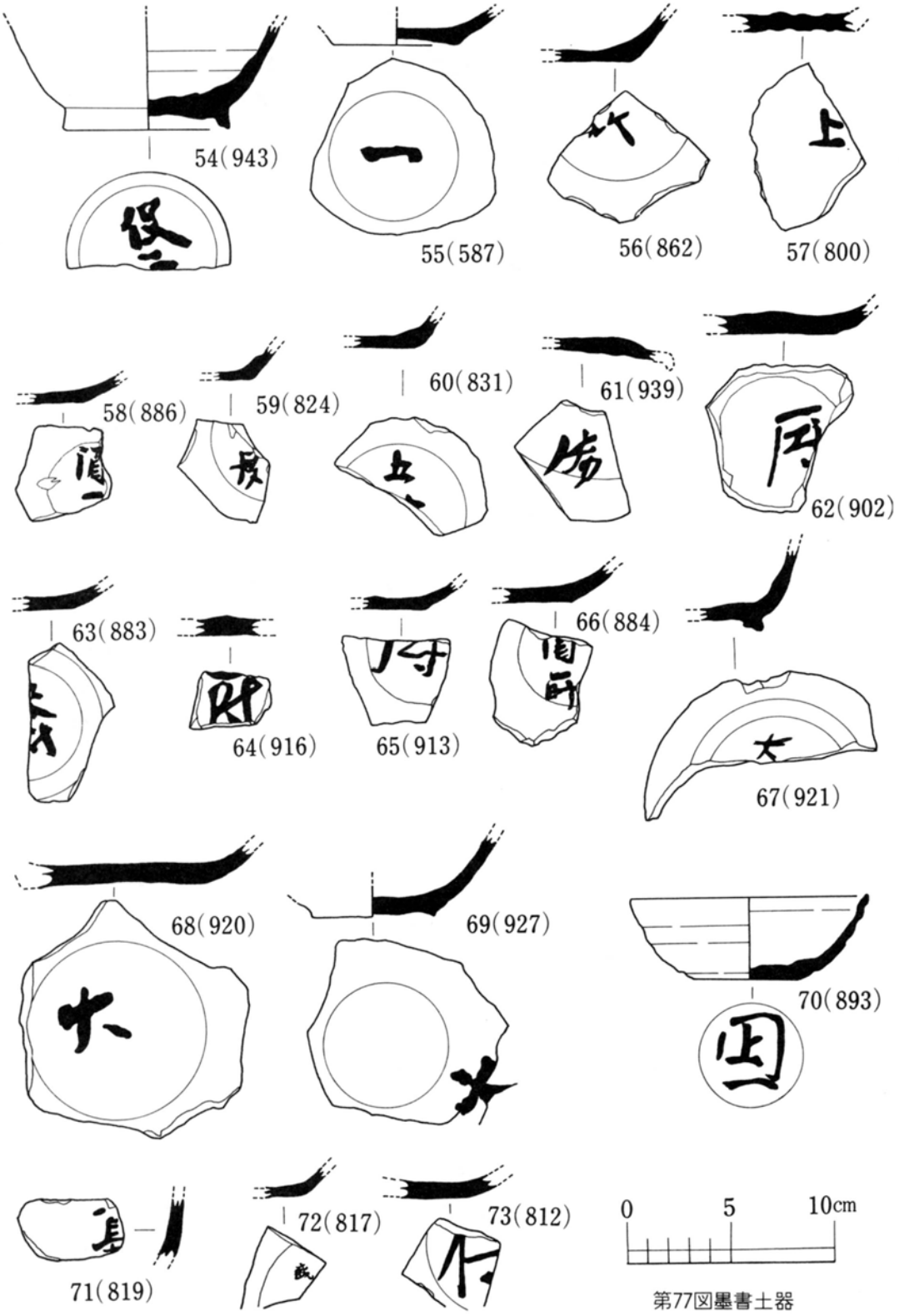


第75図墨書土器

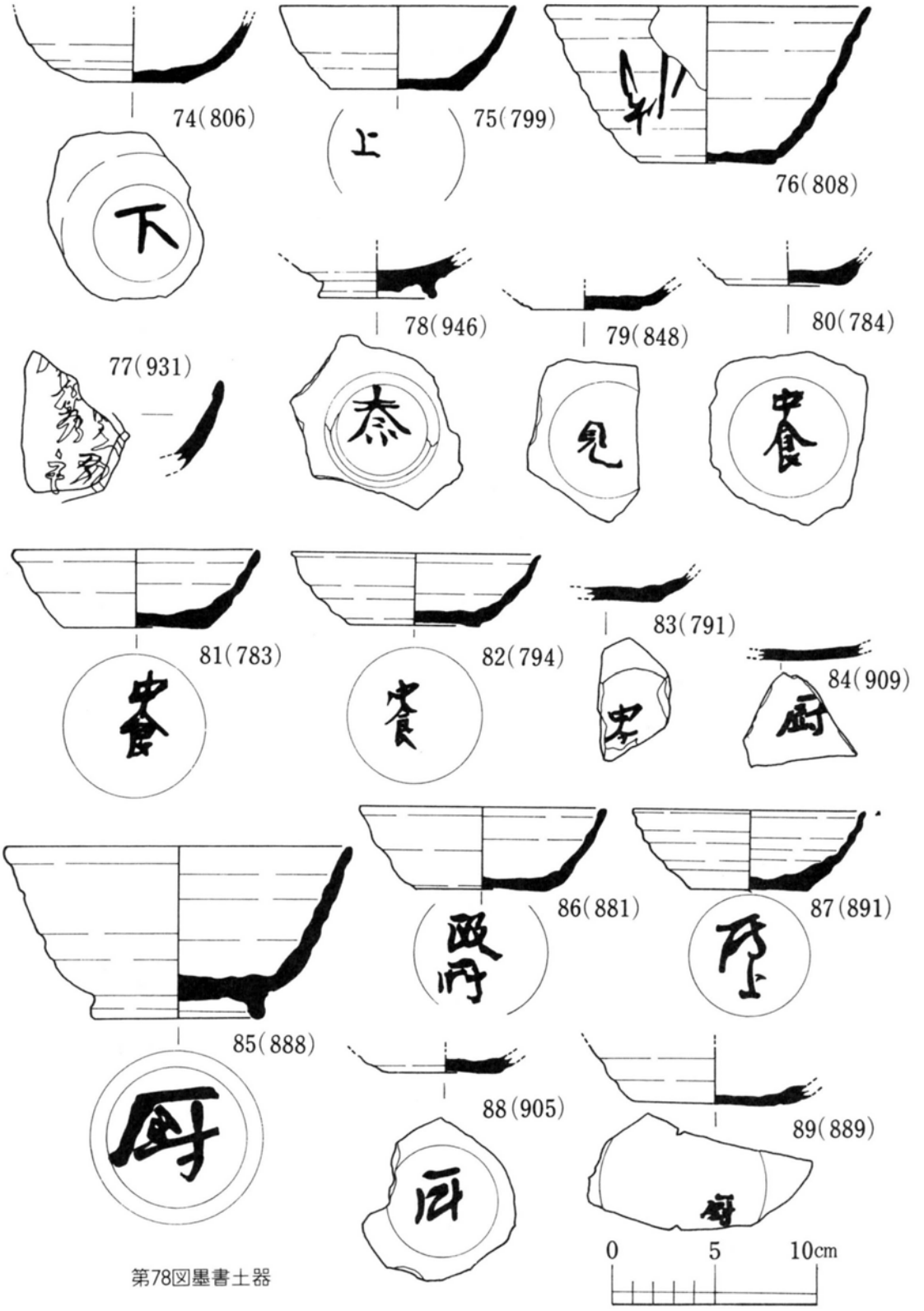
0 5 10cm


39(836)
40(953)
41(798)
42(844)
43(832)
44(841)
45(820)
46(801)
47(854)
48(847)
49(782)
50(941)
51(823)
52(950)
53(863)
0
5
10cm

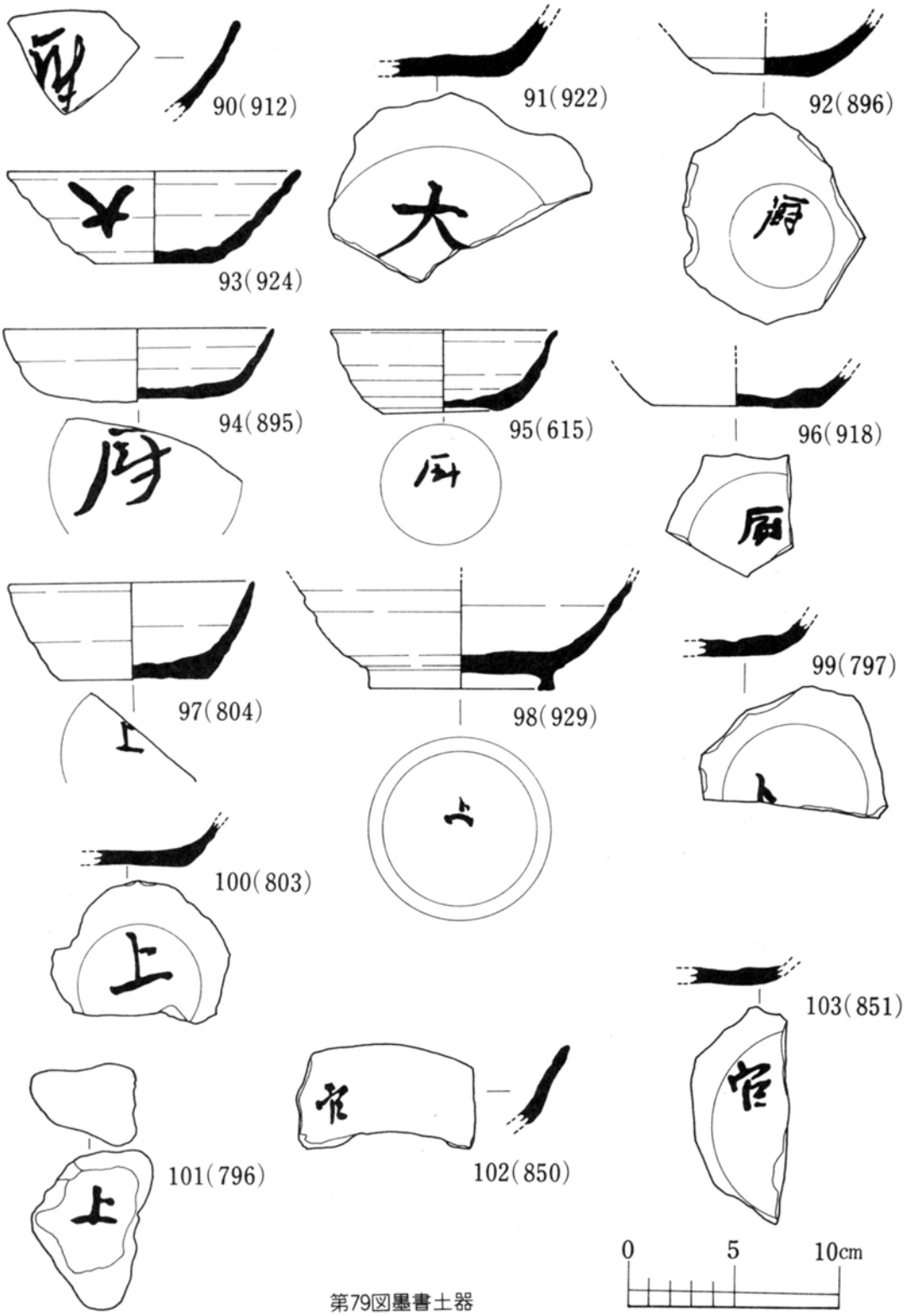
第76図墨書土器


54(943)
55(587)
56(862)
57(800)
58(886)
59(824)
60(831)
61(939)
62(902)
63(883)
64(916)
65(913)
66(884)
67(921)
68(920)
69(927)
70(893)
71(819)
72(817)
73(812)
0
5
10cm

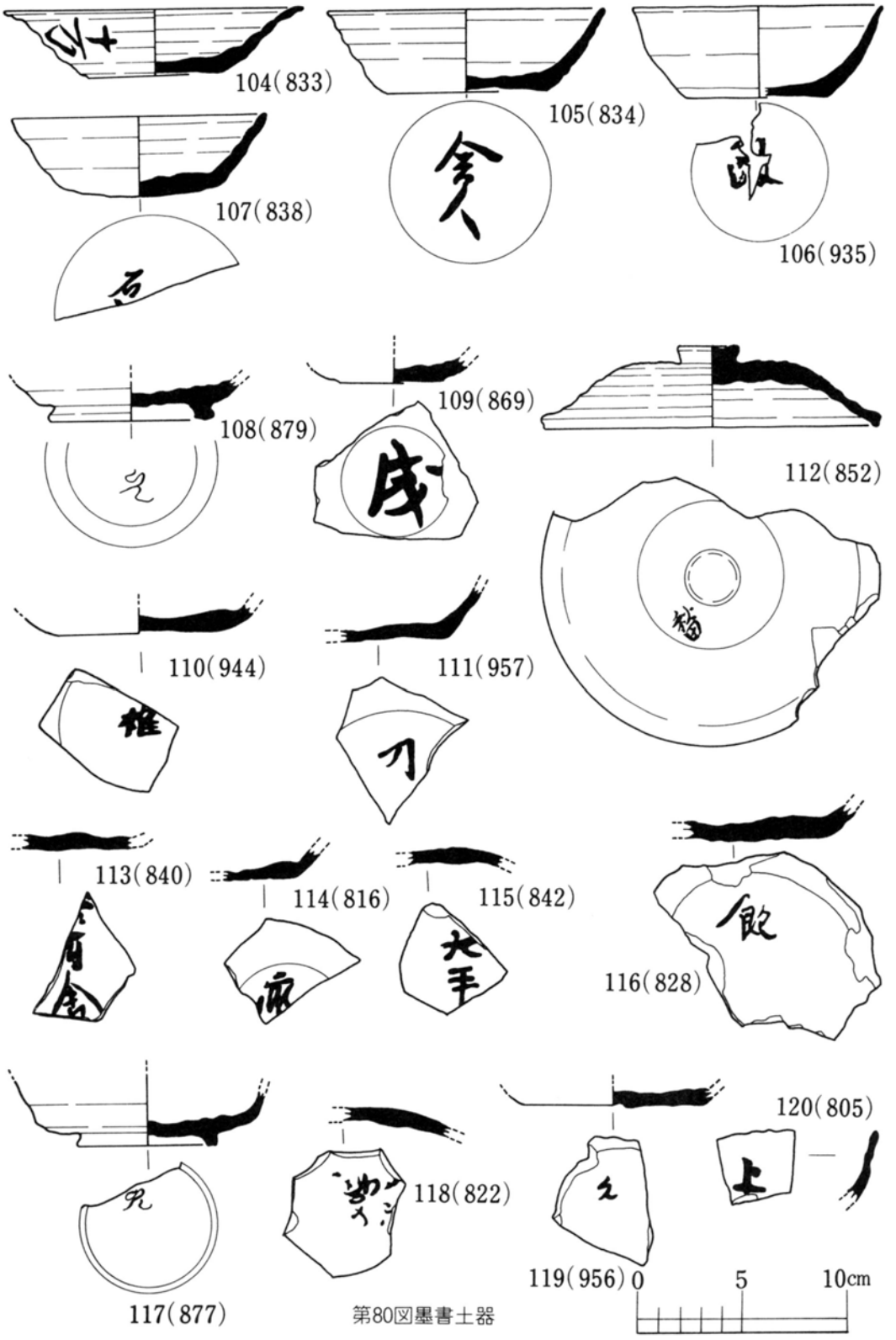
第77図墨書土器


74(806)
75(799)
76(808)
78(946)
79(848)
80(784)
77(931)
81(783)
82(794)
83(791)
84(909)
86(881)
87(891)
85(888)
88(905)
89(889)
0
5
10cm

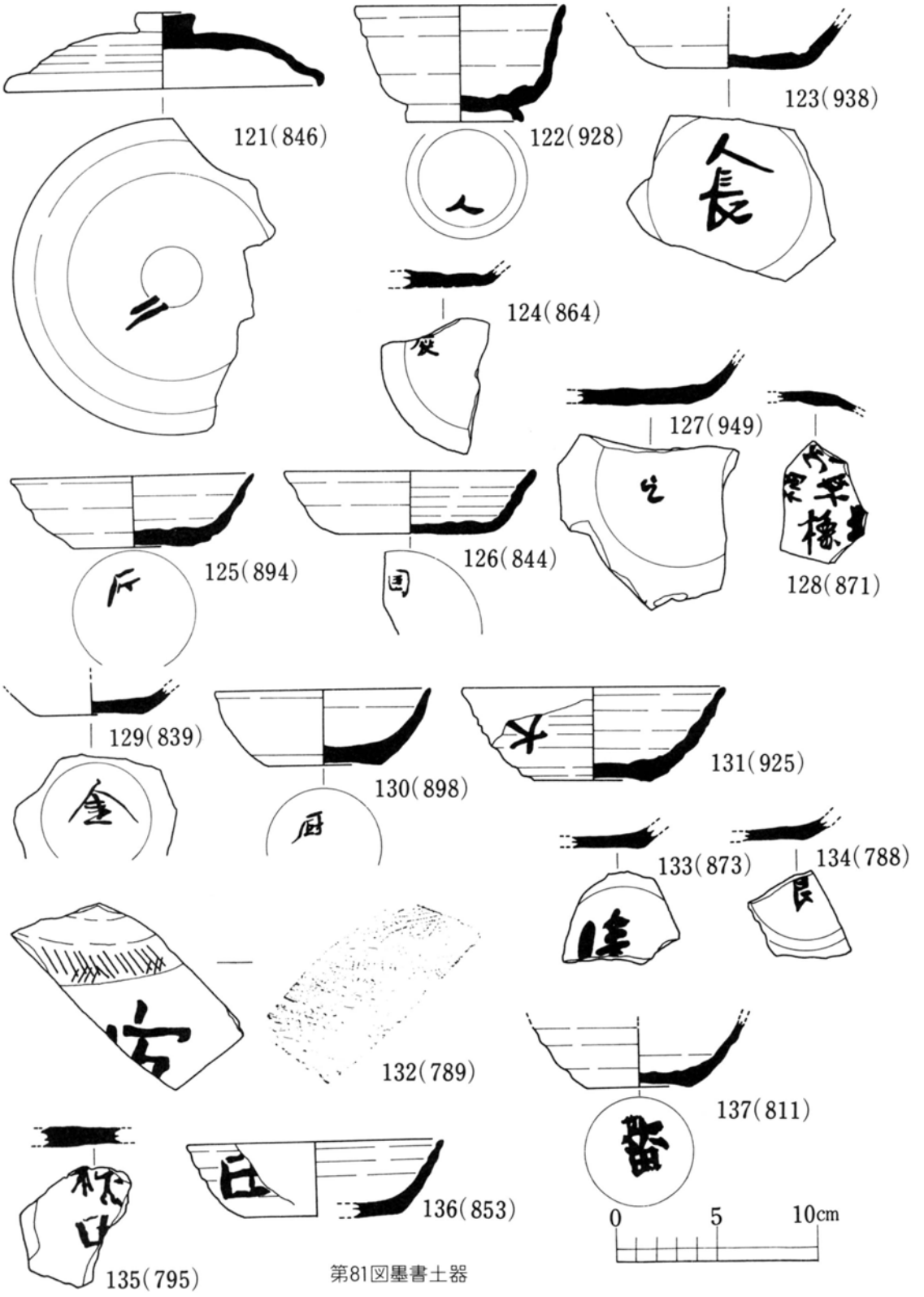
第78図墨書土器


90(912)
91(922)
92(896)
93(924)
94(895)
95(615)
96(918)
97(804)
98(929)
99(797)
100(803)
101(796)
102(850)
103(851)
0
5
10cm

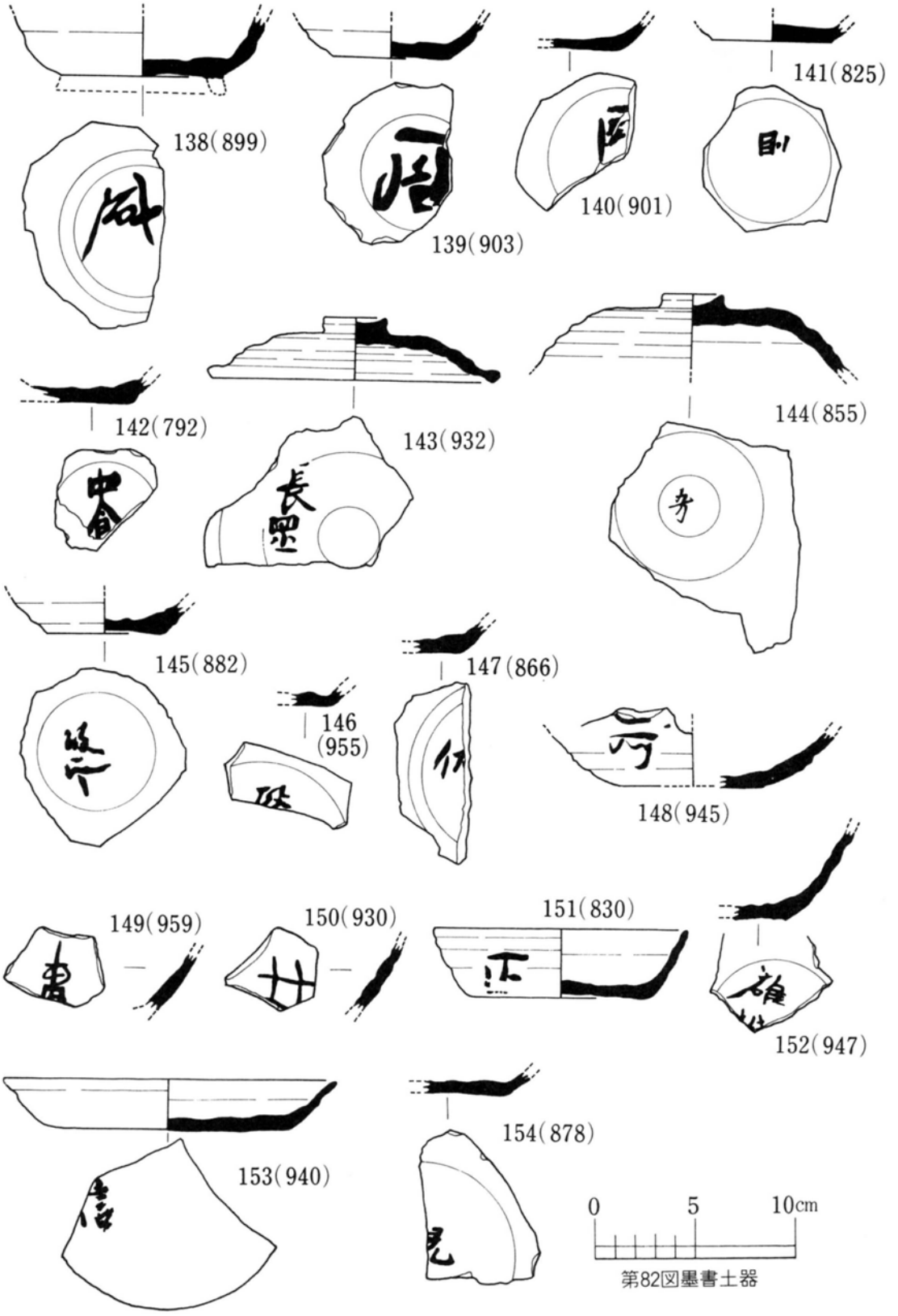
第79図墨書土器


104(833)
105(834)
107(838)
106(935)
108(879)
109(869)
112(852)
110(944)
111(957)
113(840)
114(816)
115(842)
116(828)
117(877)
118(822)
119(956)
120(805)
0
5
10cm

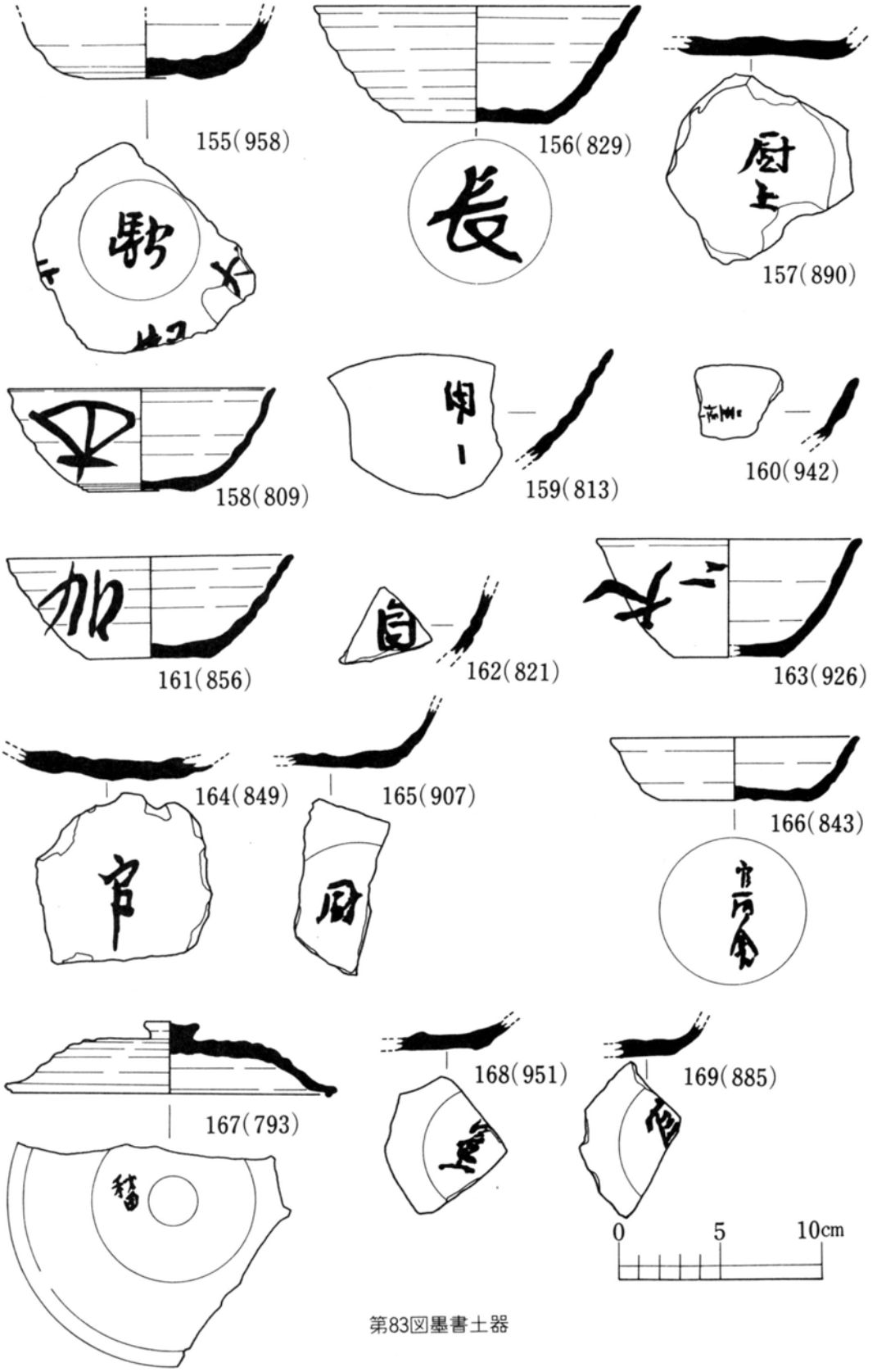
第80図墨書土器


121(846)
122(928)
123(938)
124(864)
125(894)
126(844)
127(949)
128(871)
129(839)
130(898)
131(925)
132(789)
133(873)
134(788)
135(795)
136(853)
137(811)
0
5
10cm

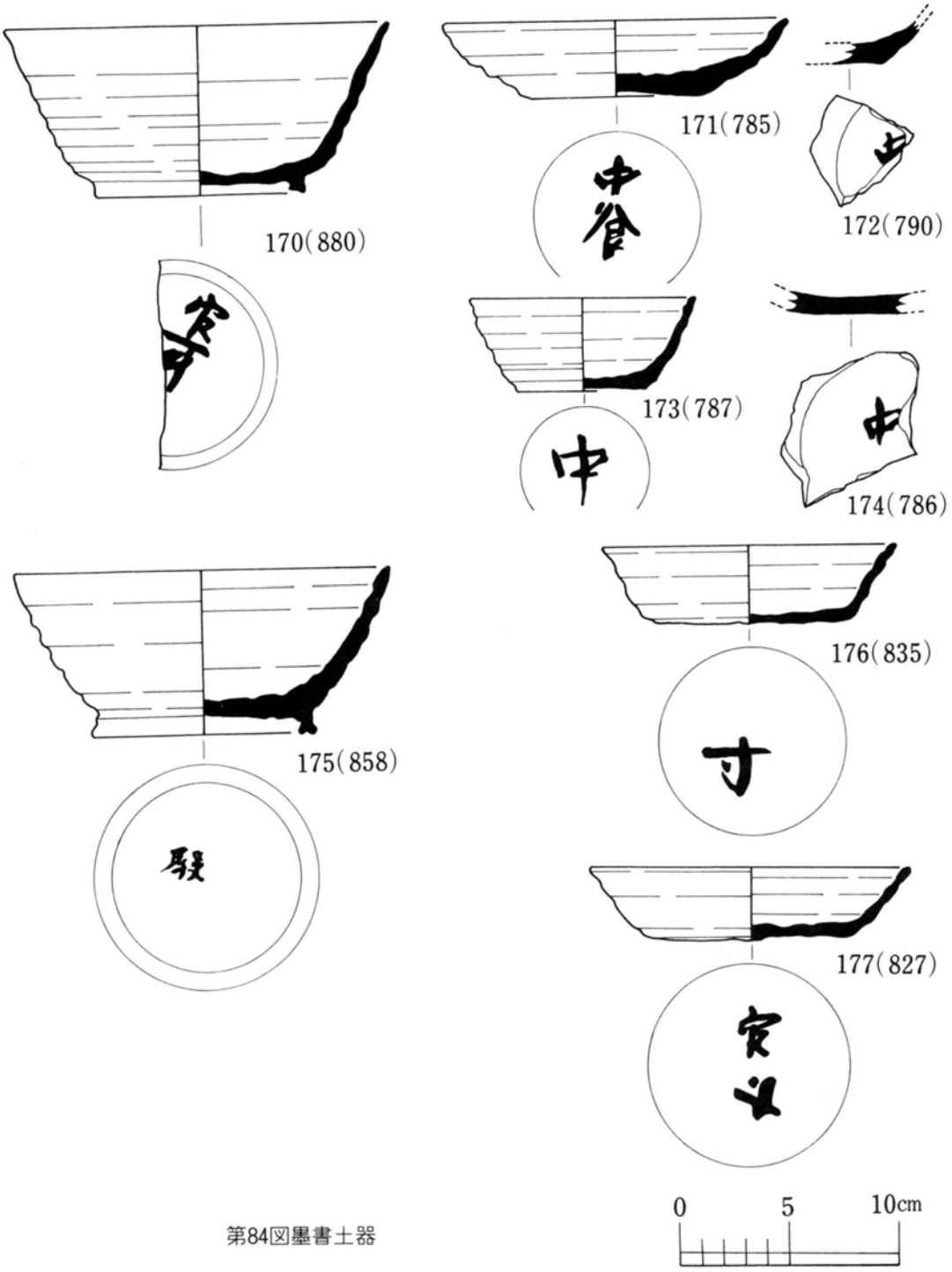
第81図墨書土器


138(899)
139(903)
140(901)
141(825)
142(792)
143(932)
144(855)
145(882)
146
(955)
147(866)
148(945)
149(959)
150(930)
151(830)
152(947)
153(940)
154(878)
0
5
10cm

第82図墨書土器


155(958)
156(829)
157(890)
158(809)
159(813)
160(942)
161(856)
162(821)
163(926)
164(849)
165(907)
166(843)
167(793)
168(951)
169(885)
0
5
10cm

第83図墨書土器


170(880)
171(785)
172(790)
173(787)
174(786)
175(858)
176(835)
177(827)
0
5
10cm

第84図墨書土器

書体」であるが、一部「楷書体」、「破体」がある。

書体でみる限りにおいては、上層から下層まで通して特別な変遷は認められない。

墨書判読にあたっては、多賀城跡調査研究所技師　平川南氏、書体については書家、小松天領氏に御教示を得た。

（小 松　正 夫）

Ⅳ 第 18 次 調 査

第18次調査は、これまで建物跡の配置、遺物等から四天王寺跡と考えられている、鵜ノ木地区を対象とした。

11月10日、測量基準点No.3より測量開始、表土剝ぎを始める。しかし、11月18日をもって調査費が打ち切りとなったため、約180m²（約55坪）の表土剝ぎを行なった段階で作業中止となった。したがって、第18次調査は、来年度も同次数で調査継続という形で実施することとし、昭和50年度の調査は終了した。

（小　松　正　夫）

Ⅴ 考　　察

1）秋田城外郭線について

昭和48年、49年度概報において、第10次、第13次、第14次調査の結果、秋田城外郭線は築地でもって構成され、東西、南北、約550mで、高清水丘陵という自然地形による制約をうけ、不整多角形であること、又、築地崩壊後は崩壊土の高まりを利用し、溝状遺構と1間×2間の掘立柱建物が構築されていることを述べた（註1）。しかし、これら外郭線遺構の明確になった地区はその南辺一部と西辺、東辺であり、北辺と南辺の大部分については、依然、不明な点が多く、特に北辺に関しては国営調査の土塁断面図から護国神社北の土塁に築地積土と考えられる土層がみとめられていた他は推測の域を脱っしていなかった。

今年度の第16次調査ではその北辺の土塁の一部について調査を行ない、ほぼ東西に伸びる築地積土を検出した。前述の護国神社北の土塁断面図にみられる築地積土の痕跡と考え合わせ、北辺も築地によって構成されていたと考えて誤りない。第17次調査では南辺の築地を明らかにする目的であったが、検出せず、更に南の地区に求められるものと考えられる。いずれにしても、秋田城外郭線は東西南北の辺が築地によって構成された不整多角形であることは明らかである。

これら築地の構築法について、第14次、第16次調査によって部分的ではあるが観察された事柄がある。すなわち、築地構築面に多量の炭化物層がみとめられ、一帯の雑木等の焼き払い作業が行なわれたと考えられること、更に第14次調査にかぎってであるが、築地基底部に浅い溝を平行に掘り込んでおり、これは積土の際の目安と考えられること、又、積手の違いがみとめられ、積土を版築する際に、ある一定の距離を長さ３ｍ前後のアテ板を使用し除々に積みあげていると考えられることなどである。寄柱については現在までの調査では等間隔、或いは積土をはさんで対称な位置に検出した例はなく、ほとんどが不規則な配列であり、その存在の積極的な根拠にかける。

築地崩壊の時期は第10次、第14次調査の築地崩壊土出土の遺物から、その上限は９世紀後半と考えられる（註２）。

築地崩壊後、その崩壊土の高まりを利用し溝状遺構及び、１間×２間の掘立柱建物が外郭線を構成する時期があることはすでに述べた。これらの遺構は、南辺、西辺、東辺においてはほぼ築地線に沿って検出され、この時期の外郭線の位置もほぼ築地期の外郭線の位置に一致すると考えられていた（註３）。しかし、今年度の第16次調査地、外郭北辺において、築地と明らかに異なる方向に伸びる溝状遺構とそれを棟通りにまたぐ１間×２間の掘立柱建物跡を検出した。このことから、外郭線の位置も、その構成物の推移とともに変化があることが判明した。ただ、この変化が全体的なものか、部分的なものか、今後の調査で明らかにしてゆきたい。

これら掘立柱建物跡と溝状遺構の性格については不明な点が多く、築地積土及び築地崩壊土の高まりを利用していることが判明していただけであるが、第16次調査の結果、以下のことが明らかになった。第１に、掘立柱建物を建てた後に棟通りに溝状遺構を掘り込むという工程の前後関係があること、第２に、築地崩壊土から離れた地域では新たな土盛りを行ない掘立柱建物と溝状遺構を構築していることである。これは溝状遺構埋土に水性の堆積物のみとめられないことと考え合わせ、土塁、空堀り的な施設と考えるのが妥当と思われる。又、これまで、第10次、第14次、第16次調査、３ヶ所で検出した掘立柱建物跡（１間×２間）はいずれも同規模であり、溝状遺構を棟通りにまたぎ、建物の方向は一定していない。立地している場所も、見はらしのきく傾斜面の最高部、或いは溝状遺構の屈曲部である。このような外郭線にとりつく建物が東北地方で検出している遺跡として外郭線の性格は異なるが、岩手県矢巾町徳丹城跡（註４）、宮城県多賀城市多賀城跡（註５）、山形県酒田市城輪柵跡（註６）がある。いずれも櫓跡と考えられており、これらの諸例からも秋田城外郭線にとりつく３棟の掘立柱建物も同種のものと考えられる。これら３棟の掘立柱建物及び溝状遺構は、掘立柱掘り方埋土、溝状遺構埋土より再調整のない赤褐色土器（註７）が出土しており、11世紀以降の構築と考えている。

（日　野　　久）

註１　「秋田城跡発掘調査概報」　秋田市教育委員会　昭和48、49年

註２　１に同じ

註３　１に同じ

註４　板橋源・佐々木博康「陸奥国徳丹城」　岩手県文化財報告第20集　昭和47年

註５　「多賀城跡調査研究所年報」　宮城県教育委員会多賀城跡調査研究所　昭和47年

註６　上田三平「城輪柵趾」史蹟精査報告第３　昭和13年

註７　考察（３）参照

2）住居跡について

第17次発掘調査では、東西40m、南北16mの範囲に密集した状態で42棟の竪穴住居跡を検出した。

調査地は全層にわたって砂層であり、また住居跡どうしの上、下、重複関係が極めて複雑であり明確に層位的にとらえきることは不可能であったが、ある程度新旧関係を把握することができた。

42棟の住居跡で、プラン、カマド等の明確なものについて概観すると、プランは方形を呈するものが15棟、長方形を呈するものが12棟みられる。長方形を呈するものには、長軸を南北にもつもの、東西にもつものが認められる。カマドの位置、構造についてみると、カマドを東壁に設けたもの11棟、南壁６棟、北壁２棟、西壁４棟の数でみられる。それぞれの構造は、大部分が黄色、黄褐色粘土で構築されている。中には、天井部、袖部に補強材として平瓦、丸瓦を使用しているものもみられる。柱穴については、いずれの住居跡にも認められなかった。

次に、上記した住居跡は、上、下、重複関係にあり、住居跡の方向、規模、カマドの位置等からみるとある程度の単位で規則性がみられ、少なくとも６つの群としてとらえることが可能のようである。以下述べてみたい。

１群（ＳＩ201、202、203住居跡）

第17次調査では最も上層で検出した。プランについては規則性はみられない。出土土器はすべて赤褐色土器杯でＳＩ201より出土した１点を除きすべて再調整のないものである。

２群（ＳＩ204、205、211住居跡）

確認したレベルはほぼ同位である。南北に長い長方形を呈し、長軸はほぼ南北線にのる。カマドの位置は南壁の東寄りで、粘土で構築されたものである。重複関係はみられない。

３群（ＳＩ210、212、217、219、228、230、233住居跡）

粘土で構築したカマドを東壁に設ける。プランは、平均2.64ｍ×2.94ｍのほぼ方形を呈する小さめの住居跡である。これらの住居跡どうしの重複関係はみられない。

４群（ＳＩ218、221、224、235住居跡）

東西に長軸をもつ住居跡である。カマドの位置は異なるが、ほぼ同レベルで検出した。またこれらの住居跡どうしの重複関係はない。

５群（ＳＩ225、232、234住居跡）

南北に長軸をもつ住居跡である。３群と同様確認したレベルはほぼ同位である。これらの住居跡どうしの重複関係はみられない。

6群（ＳＩ209、220住居跡）

火災住居跡である。調査地の北側に位置し、東西に約18ｍの距離をおいている。いずれも焼けて炭化した材を整理していない。

以上述べてきたように第17次調査では、全体としてみるとかなり複雑な重複関係を示しているが１つの群としてみてみるとほとんど重複関係はみられない。また住居跡の方向、カマドの位置についても同群の住居跡はほぼ同じ特色をもっていることがわかる。これらをその重複関係より新旧関係を推察してみると、最上層で検出した１群が最も新しく、次に２群が、さらにカマドを東壁にもつ３群が、南北に長軸をもつ５群を切っており、また５群が東西方向に長軸をもつ４群を切っているという関係が認められる。すなわち新しい順序に、１群→２群→３群→５群→４群という変遷がみられるようである。６群については不明である。

年代に関しては、明確に限定することはできないが、ＳＩ205住居跡より灰釉陶器が出土していることからみて、新しい方では10世紀以降に降るものと考えられる。他の住居跡では杯に関してみると、赤褐色土器では底部周縁、体部下端に回転ヘラケズリを施したもの.と、須恵器では、回転ヘラ切りで底部より丸味をもって立ちあがり、まったく再調整のないものが共伴している。さらに下層では回転ヘラ切りで丸味をもって立ちあがる再調整のない須恵器が主体を占める。これらのことから、古い方では９世紀中半頃が考えられる。

ところで現在まで、外郭築地線の内側の地域で、第10次調査で26棟、第13次調査で２棟、そして今回の第17次調査では42棟の竪穴住居跡を検出した。いずれの地域も砂地で、地山は飛砂層であることは共通している。また住居跡の構造にもそれほどの違いは認められない。しかし出土遺物の面で比較してみると明確な相違点がみられる。第10次調査は、外郭築地線の東内側地域である。検出した住居跡より土師器、須恵器の他に、鉄製品（鉄鏃、刀子、鉄斧、）、砥石が非常に多く出土した。これに対して第17次調査では鉄製品、砥石も出土しているがほんの数点である。しかし土器では第10次調査ではほとんどみられなかった、底部周縁、体部下端に回転ヘラケズリを施した赤褐色土器杯が多量に出土し、また「厨」、「官」、「秋田」等の墨書土器が200点以上も出土している。以上のように外郭築地線の内側において上記したような違いが認められる。先に築地線の内側と外側の住居跡に機能的役割に相違がみられることを述べた（註１）。今回は築地線の内側どうしの比較であり前述した機能的役割を少し異にすると思われるが、築地線の内側の地域においても居住する人間の機能的役割が各ブロック事に明確に異なっていたと思われる。

最後に住居跡の構造について、第17次調査でわかった範囲で若干述べてみたい。第17次調査で検出した住居跡はいずれも砂質層、地山飛砂層を掘り込んで構築されている。このことは第10次、13次調査でも同様である。そしてこれらの住居跡に共通していえることは柱穴がほとんど認められずまた床面、壁に何らの施設も施していないことであった。これまでの調査でも住居跡を完掘すると１日もたてば壁がくずれて無くなってしまうという現象がしばしばみられた。このような点からみ

ても何の施設も施さないことは考えられなかった。幸い今回の第17次調査では火災住居跡を２棟検出し、特にＳＩ２２０住居跡で、西壁に炭化した板材が張りついて、直立した状態で一部検出された(図版24)。このような例は現在１棟だけで、そのすべてを論述することはできないが、砂地に直接掘り込んだ住居跡の壁には板材を周して砂止めを施したことが考えられる。　　（石郷岡　誠　一）

註１．「秋田城跡発掘調査概報」　秋田市教育委員会　昭和48年

3) 出土土器について

17次調査において、深さ2.50ｍ掘り下げた結果多量の遺物が出土した。そして、それら出土層位を単純に色別すると、表土から最下層まで12層に分類できた。ここでは、住居跡出土土器を除いた土器について考察を加えてみたい。

便宜上、器種は杯類にのみ限った。また、固有名詞についても須恵器、内黒土師器以外の土器は、これまで言われている須恵系土器との混同をさけるため、すべて赤褐色土器（註）とし、それを二次調整を施さないものを赤褐色土器Ａ、体部下端および底部回転、手持ちヘラケズリを施したものを赤褐色土器Ｂとした。この両者は、切り離しを回転糸切り、色調は酸化炎焼成のため赤褐色、明褐色を呈する点でもほぼ一致する。

土器の形態、製作技法を概略すると、次の如くである。

須恵器は、いわゆる灰青色あるいは灰白色を呈するもので、あきらかに登窯によって還元炎焼成がなされている。切り離しは、大部分が回転ヘラ切りによるものであるが、他にわずかに回転糸切りも含まれる。ごく少量であるが、下層では両者に底部回転ヘラケズリが施されたものがある。回転ヘラ切りの須恵器は、口径に比べ底径が大で器高は低く、器肉も厚手である。回転糸切りの場合は、口径に比べ底径が小さく、底部端から口縁部までほぼ直線的に立ちあがり器肉は薄い。

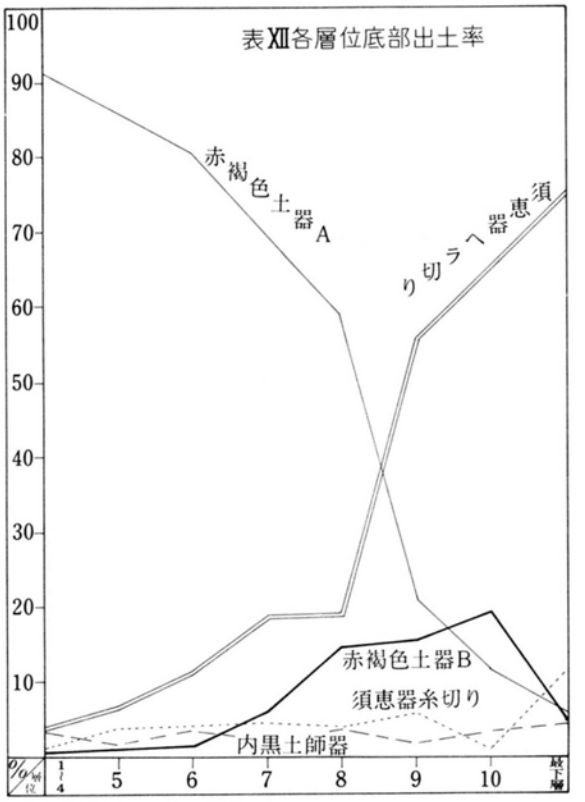
赤褐色土器Ａとした土器は、ロクロ成形後の二次調整は施さない。器形は、大部分がいわゆる杯と呼ばれているものであるが、中には器高、口径に比べ底径が極端に小さい燈明皿状を呈する土器もみられる。

赤褐色土器Ｂは、体部下端または底部にかけて回転ヘラケズリが施され、内面はロクロ整形の際の指による凹凸がきわめて少ない。器形は、器高、口径とも比較的小さく、わずかに内反ぎみに立ちあがるのが特徴である。したがって、体部下端の回転ヘラケズリも伴なって全体に丸味をおびた柔らかな感じのする土器である。他に数例であるが、底部から口縁部まで直線的に立ちあがる土器もみられる。

内黒土師器は、内面あるいは外面口縁部にいたる細かいヘラミガキを施し、黒色処理したものである。台付杯と杯がみられるが、上層でみられる土器は、ほとんどが製作技法、形態的に同一の台付杯である。また形態、技法的には赤褐色土器Ｂと同様であるが、内面に黒色処理を施した土器もみられる。

以上土器の概略をみてきたが、次にこれらを層位関係にみた量的視点から考察し、各土器の同層における出土率をみることにする。

その方法は、第１層から最下層まで一破片を１とし、計26,000点について色調、切り離し技法、調整技法等に分類した。しかし、赤褐色土器Ａ・Ｂについては、体部片のみでは判別し難いため、全出土土器の底部のみの統計的作業を主とした。底部片総計9,905点について須恵器は、切り離し技法、赤褐色土器は、二次調整の有無、そして内黒土師器と大別し各層ごとに百分率で表した。その結果は、表Ⅻのようになる。



表Ⅻでは現象として、次の点が読み取れる。まず、ヘラ切りの須恵器は、最下層から上層に向けて急激な下降線をたどり、赤褐色土器Ａは、それとは反比例の関係を示す。しかもその増減は、両者とも第８、９層においてみられる。糸切りを有する須恵器、内黒土師器は、量的に乏しく他に比べ比較的平行線をたどる。

以上のような表でみられる現象を分析すると、次のことが問題点としてあげられる。

まず第１に、須恵器と赤褐色土器Ａとの量的反転現象、第２に、赤褐色土器Ａ・Ｂの最下層における出現と、第８・９層でみられる反比例の生ずる現象があげられる。

これら各土器の比例、反比例の生ずる要因には、需要と供給、生産体制、製作技法あるいは土器独自の機能的問題に左右されるものと考えられるが、その大きな分岐点は、第８、９層にみられる。

以上のような観点から、まず須恵器と赤褐色土器Ａについて考えてみる。需要、供給、生産体制については、当時の政治情勢が背景になるからここではふれないことにする。また土器独自の機能についても、赤褐色土器Ａは、多少吸水性に富むが形、大きさではほとんど須恵器杯と差異がなく大きな問題にはならないであろう。むしろ製作技法に大きな相違がみられる。すなわち、焼成技法においては、還元炎焼成、酸化炎焼成という根本的な違いがみられる。赤褐色土器は、窯体構造が不明であるが焼成温度や黒斑現象がみられないことなどから、天井部を有する窯構造であろうと考えられる。また土器の一部には、重ね焼き痕と思われる色調の違いなどが認められることから、ある程度大量の土器を一度に焼成できる施設であろうと考えられる。

このように考えてくると機能的に大差ない両者が、第８、９層段階で量的に反転する要因の一つとしては製作技法、特に焼成時における作業行程の簡略化、すなわち須恵器焼成における最終作業

行程である還元化を削除することによってなる作業の単純化によるものと考えられる。しかし、上述したように形態、技法的に明確に異なる両者が、同集団内で同時に生産されたとは考え難いし、同時に徐徐に転化したとも考えられない。つまり、須恵器生産にたずさわる集団以外の生品と考えたい。

次に赤褐色土器A・Bについてみると、両者が出現するのは最下層あるいはその直前と考えられる。すなわち下層では、ヘラ切りの須恵器が約86％を占める中で赤褐色土器は、わずかに10％弱という量的比較によっても理解できるが、A・Bの新旧については不明である。両者が第8・9層段階で増減が反比例する現象は、回転ヘラケズリという調整技法の簡略化が要因であろうか。しかし赤褐色土器Bが、極めて少ないが上層まで残存していることは留意せねばならない。

これまで須恵器か土師器か判然としない土器群を単に酸化炎焼成という面でとらえ赤褐色土器と仮称し、層位、調整、焼成技法あるいは量的に比較検討してきたが、明確な結論を得るには至らなかった。

しかし、これまでの須恵器という概念で、焼成技法を考慮する段階においては、少なくとも須恵器とは言い難い。確かに、ケズリ調整などを考えた場合、須恵器的であるし、また器形においてもこれまでの土師器（内面黒色処理を施す）よりは須恵器に近いであろう。しかし、同層より出土した土器の形態、調整技法の比較結果は相反するものであるし、また、ただ1点ではあるが、赤褐色土器Bとまったく同技法を有する内黒土師器の出土も考慮しなければならない。

まず、ここでは回転ヘラ切りの須恵器と伴なう極めて高温で酸化炎焼成された土器群があることを指摘しておきたい。

（小　松　正　夫）

註1．赤褐色土器と仮称した土器は、いわゆる酸化炎焼成を最終目的としたもので、色調は明褐色、灰褐色、茶褐色等を呈する。また上層出土の赤褐色土器の中には、現在言われている須恵系土器も含まれている可能性がある。

図版　1

図版２　上　第16次発掘調査（東から）　下　遺構全景（東から）

図版３

ＳＦ198築地
ＳＤ195 溝
ＳＡ200柱穴
（西から）

ＳＤ197建物跡（北東から）

図版４　上　ＳＢ197（北から）　　下　Ｏ地区全景（東から）

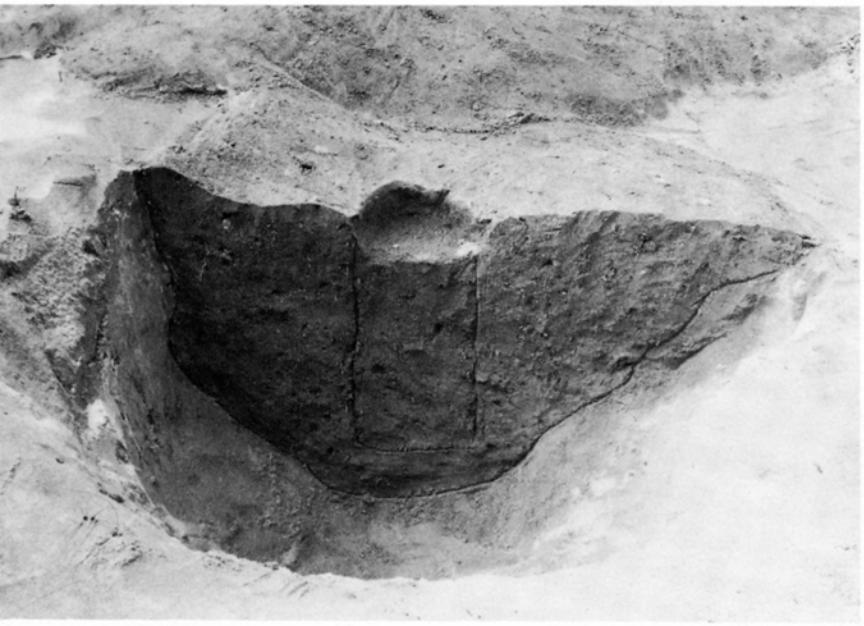
ＳＦ198築地
ＳＤ195 溝
断面

ＳＦ198築地
断面

同上

図版５

ＳＡ199柱穴
（南から）



ＳＢ197建物跡
掘り方断面

図版７　上　第17次発掘調査全景上層遺構群（西から）
　　下　　〃　　〃　　下層　〃　（　〃　）

図版８　上　ＳＢ242・243建物跡（東から）　　下　ＳＢ244建物跡（西から）

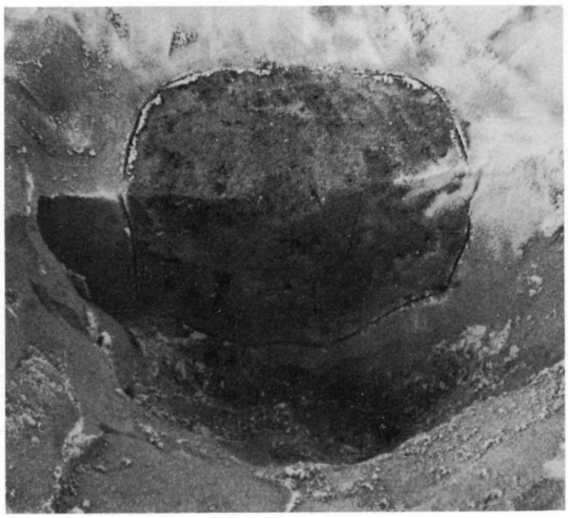
図版９

ＳＤ251 溝
（西から）

調査区北側
土層断面

ＳＡ256柱列
（西から）

左　ＳＢ243建物跡
掘り方
右　ＳＢ244建物跡
掘り方



図版11　上　ＳＩ201住居跡（南から）　　下　ＳＩ202住居跡（西から）

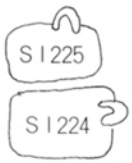
図版12　上　S I 204・213住居跡(南から)　　下　S I 205住居跡(北から)

図版13　上　ＳＩ207住居跡(東から)　　下　ＳＩ211住居跡(北から)

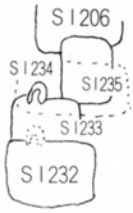
図版14　上　ＳＩ209・208住居跡とＳＫ252土坑（南から）
　　下　ＳＩ220住居跡

図版15　上　ＳＩ212住居跡(西から)　　下　ＳＩ214住居跡(北から)

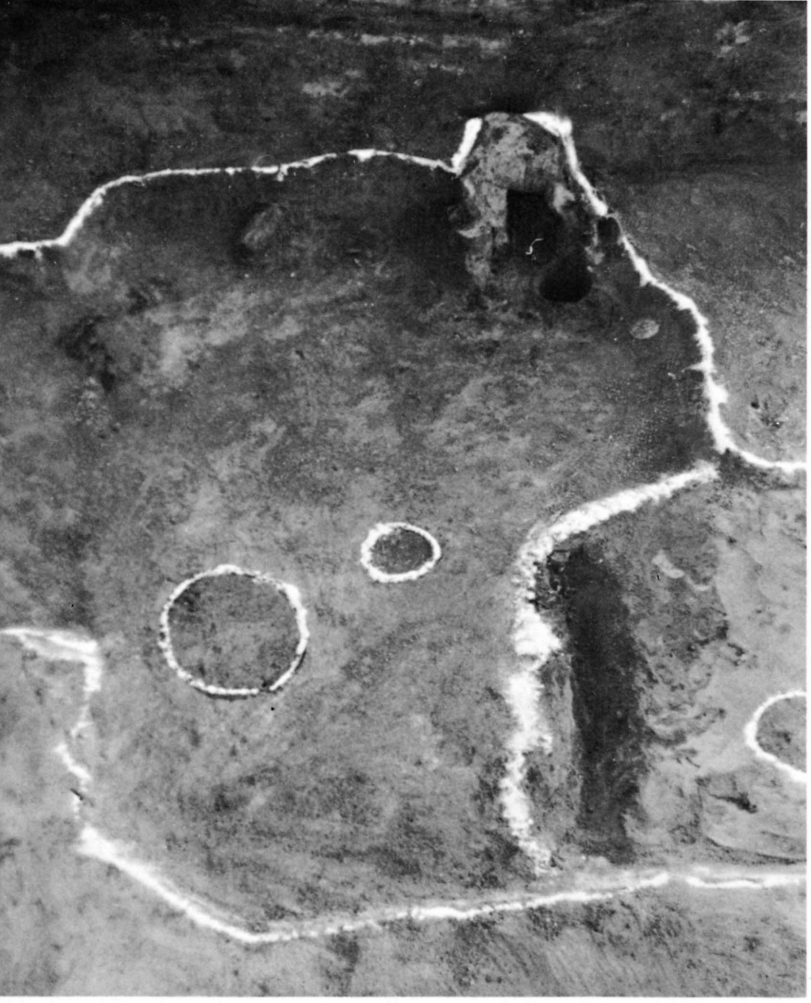
図版16　上　ＳＩ216住居跡(北から)　　下　ＳＩ228住居跡(西から)



上　S I 225・224
住居跡(西から)

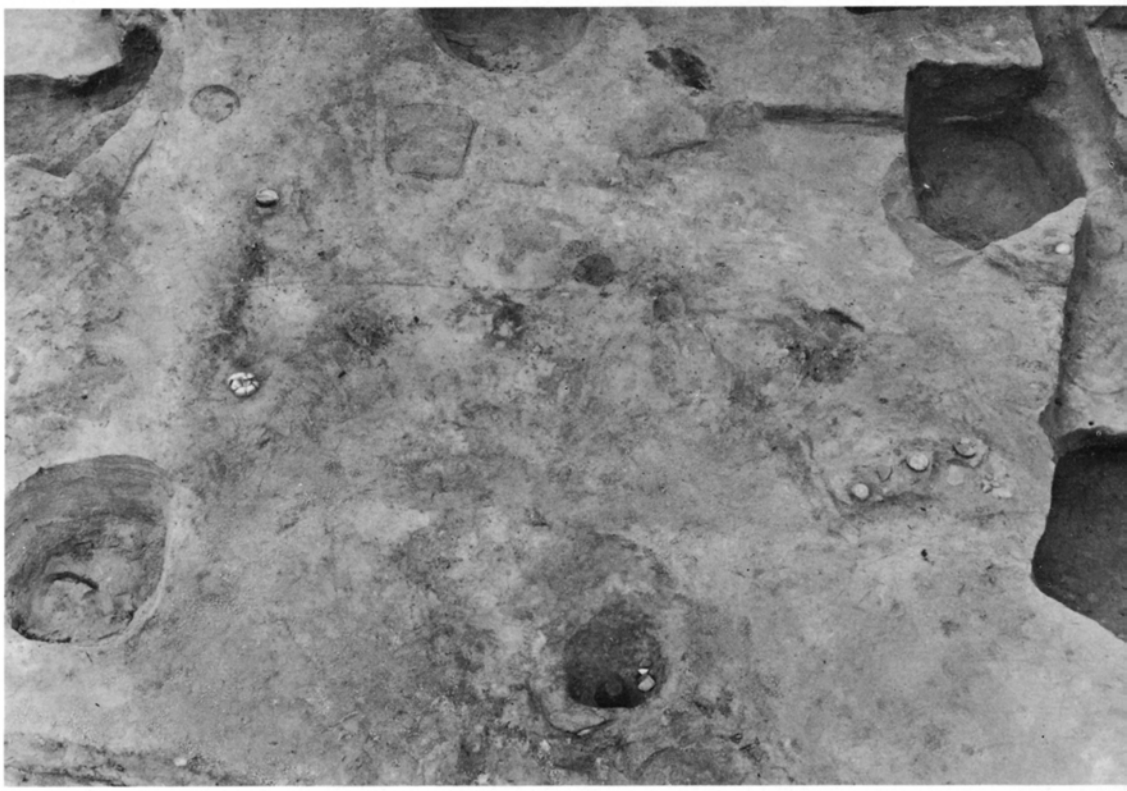


下　S I 206・234・233
235・232住居跡
(西から)

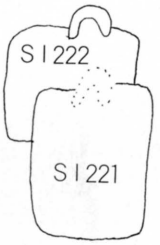


SI234住居跡
(北から)

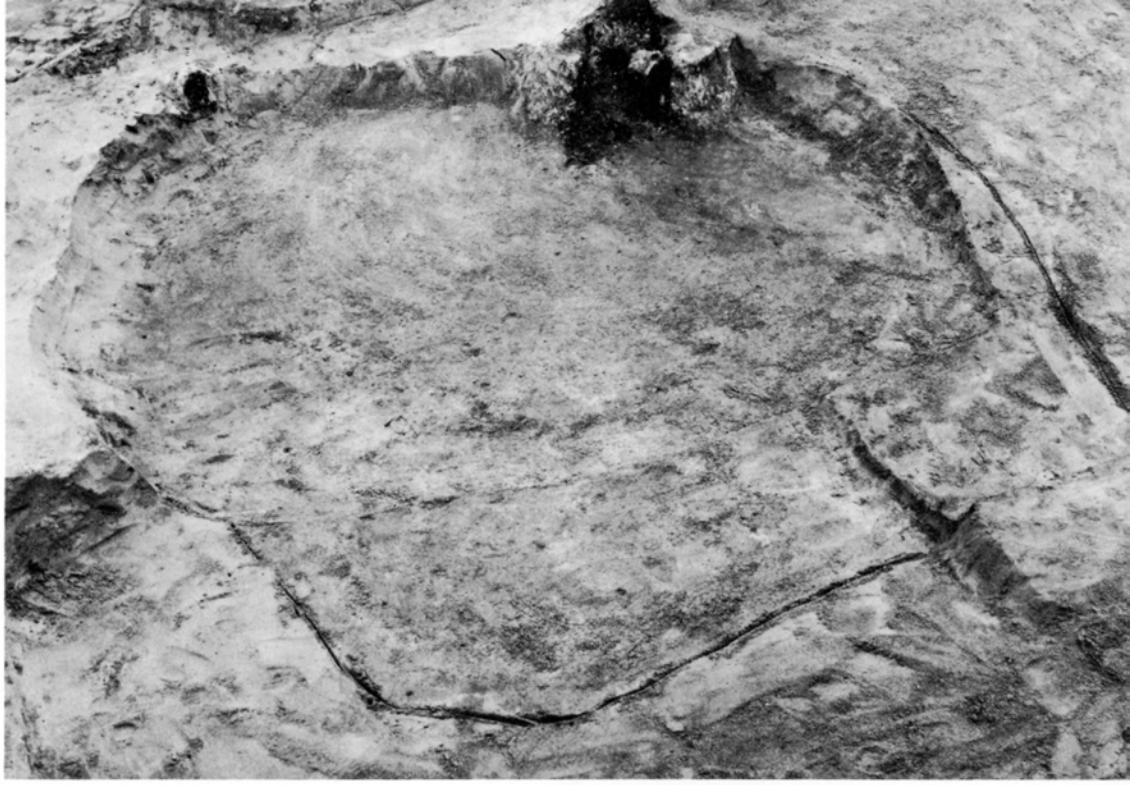
SI218住居跡(西から)



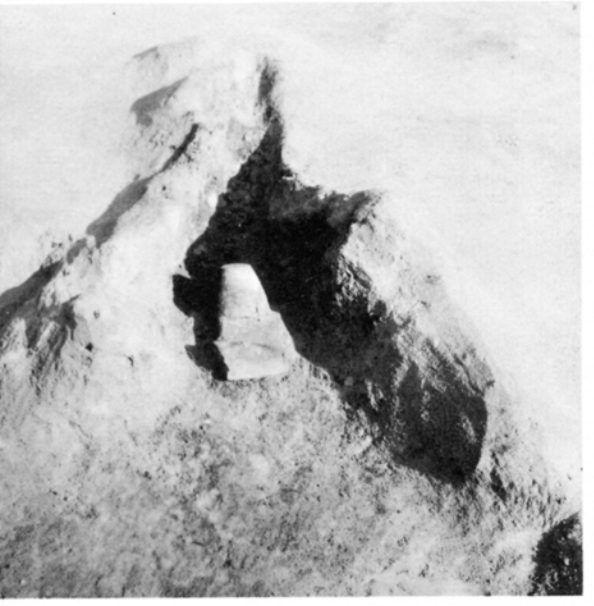
図版19　上　S I 217住居跡(西から)　　下　S I 219住居跡(北から)



図版20　上　S I 223住居跡(南から)
　　下　S I 221・222住居跡(東から)



図版21　上　S I 226・227住居跡(南から)
　　下　S I 237住居跡(北から)

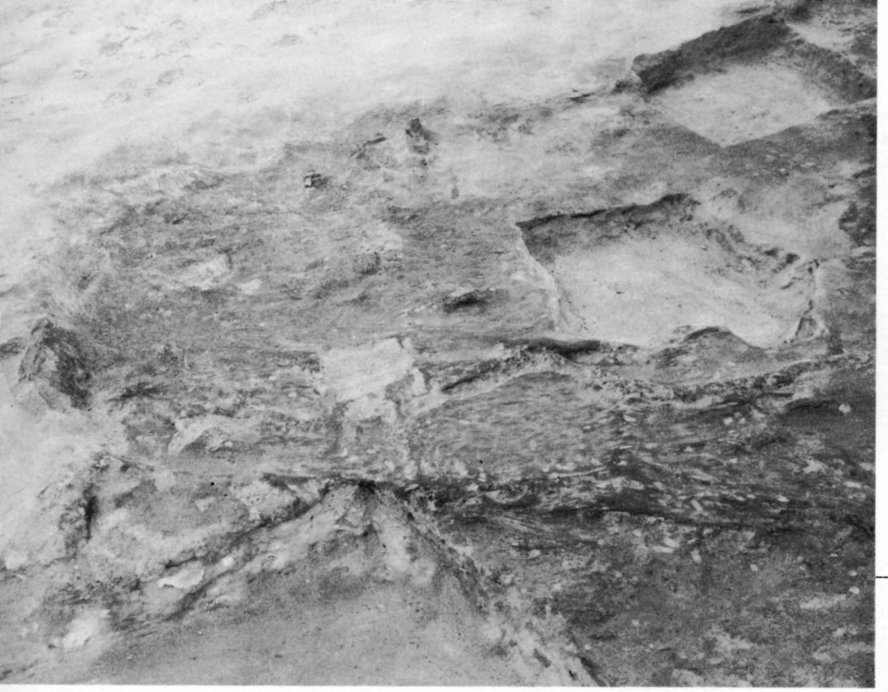


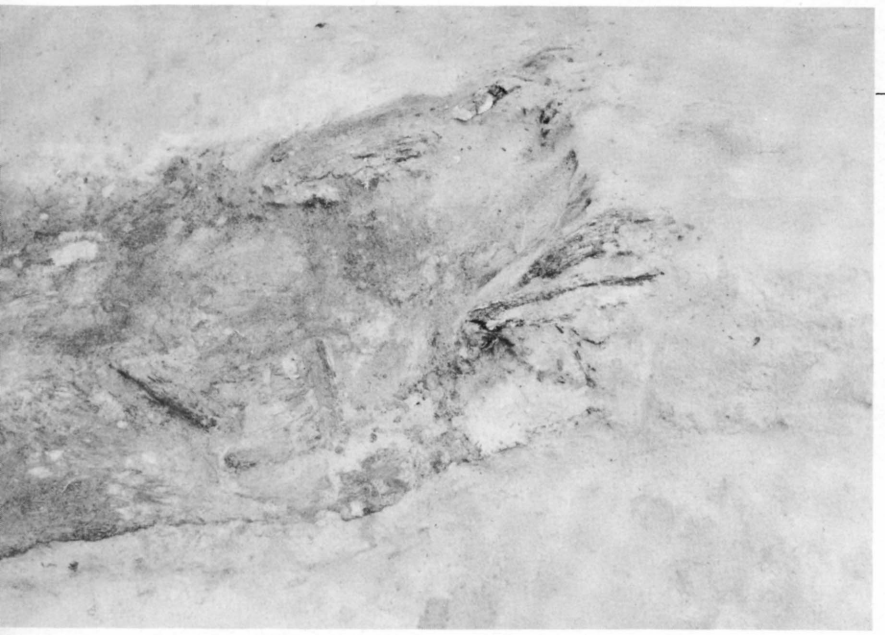
図版22
上 S I 207　カマド
中 S I 212　カマド
下 S I 230　カマド

上　S I 211　カマド
中　S I 233　カマド
下　S I 225　カマド

上　S1234　カマド
下　S1217　カマド

上　S1218　カマド
中　S1222　カマド
下　S1226　カマド



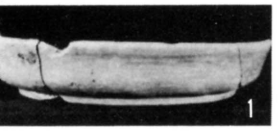


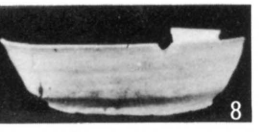
SI209住居跡
焼材

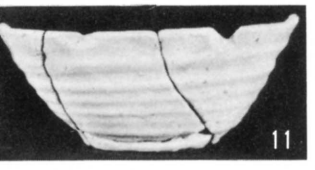
SI220住居跡
焼材

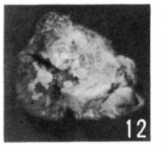
図版25

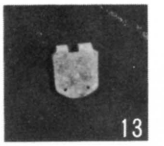
土器出土状況

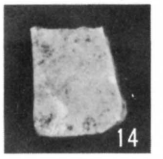


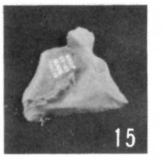




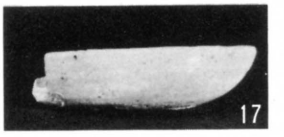


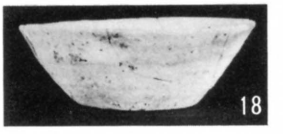


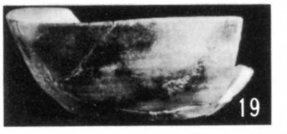


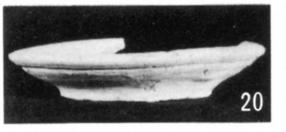


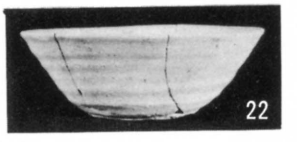
第16次出土遺物

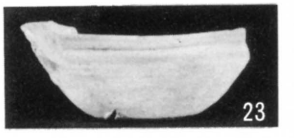


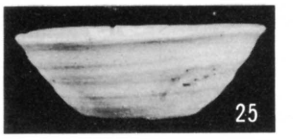


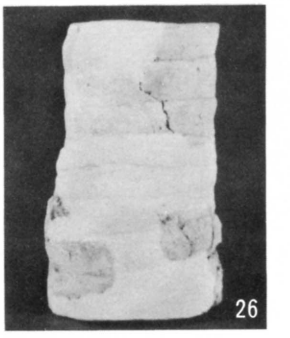








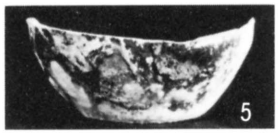


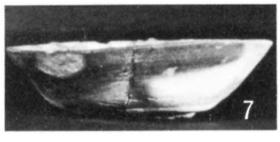


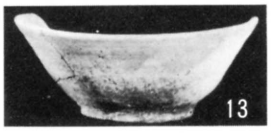
ＳＩ201出土遺物

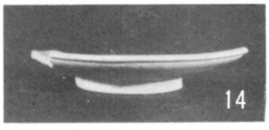
図版26

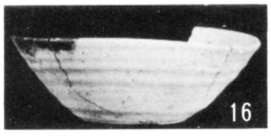
S I 202・203・204
出土遺物

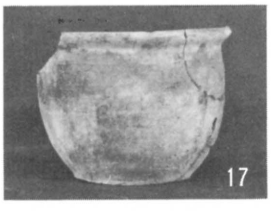




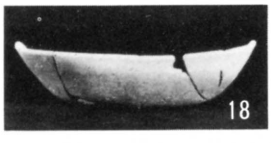


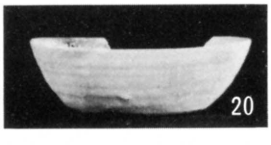






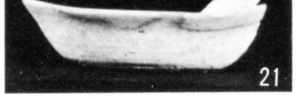
S I 205出土遺物

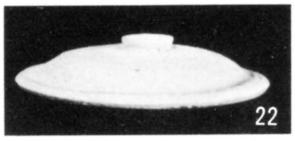


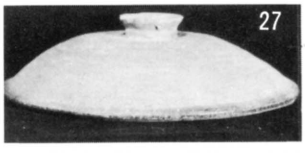


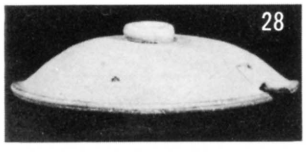
S I 207・208
出土遺物

図版27

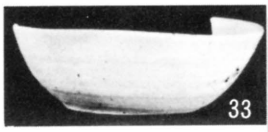


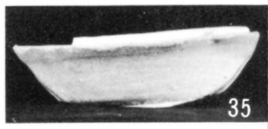




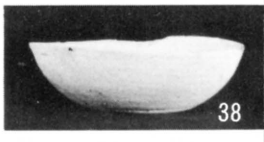


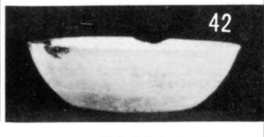
S I 209・210・211
236・240出土遺物



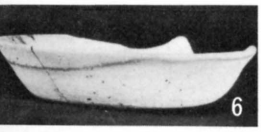


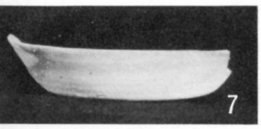
S I 212
213
出土
遺物

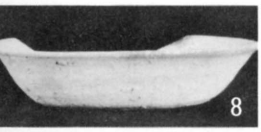


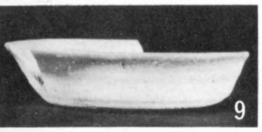


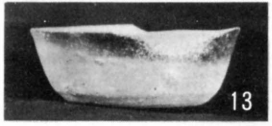
S I 214出土
遺物

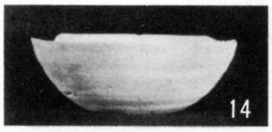


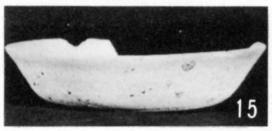




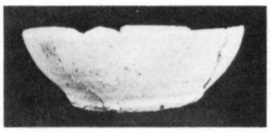


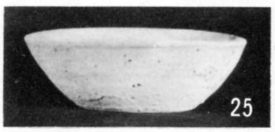


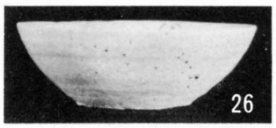


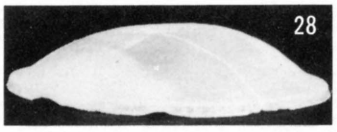


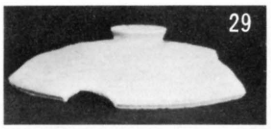
SI214出土
遺物

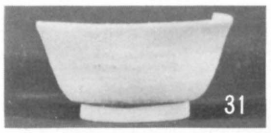


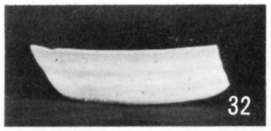


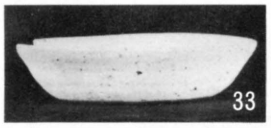


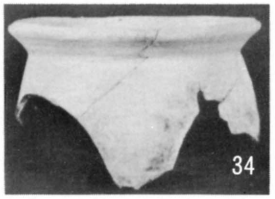


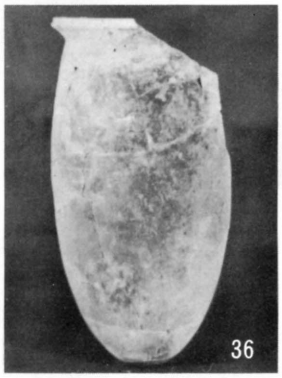








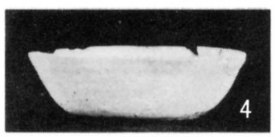


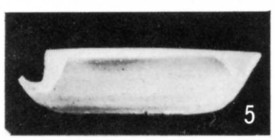


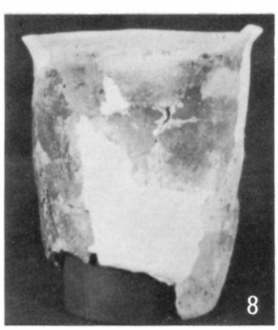
SI216・217
出土遺物

SI218
出土遺物

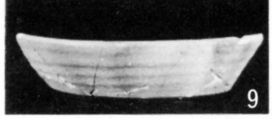
図版28

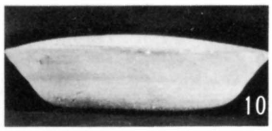


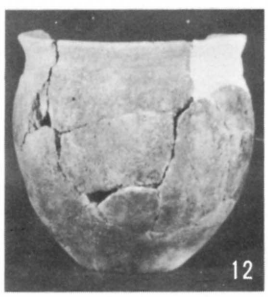




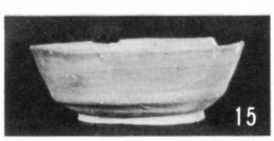
S I 219・223
出土遺物

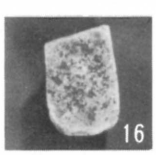




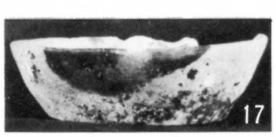


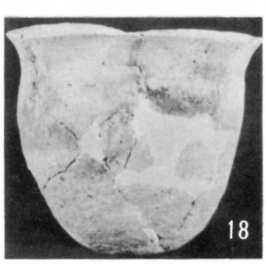
S I 221出土



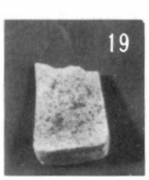


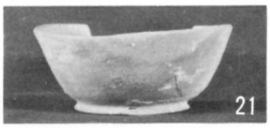
S I 224・225
231出土
遺物

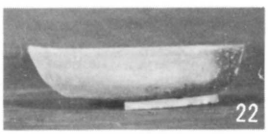


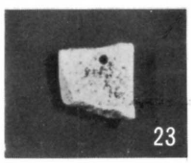


S I 226
228
237
出土
遺物

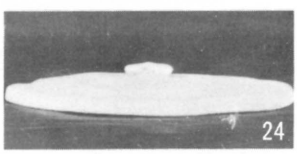




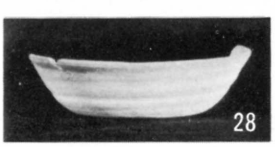


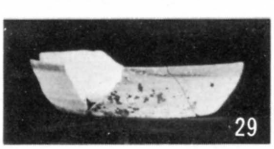


S I 232・233
出土遺物

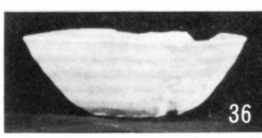


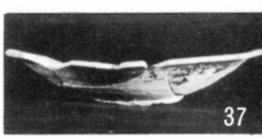
S I 234・235



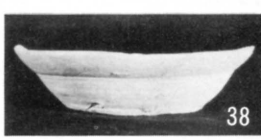


SA247　SB 243
SA248　SB 244
SB242　出土遺物

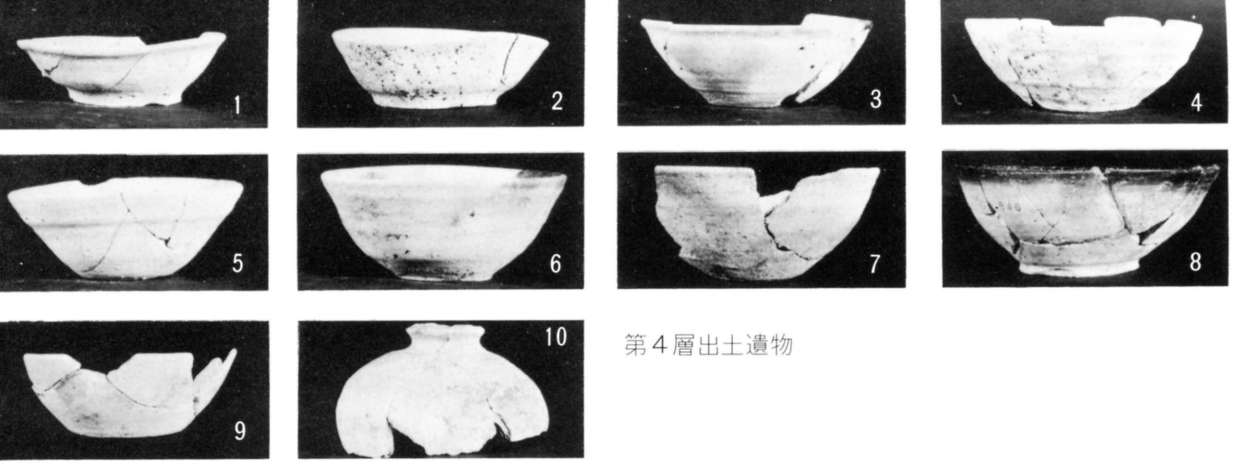




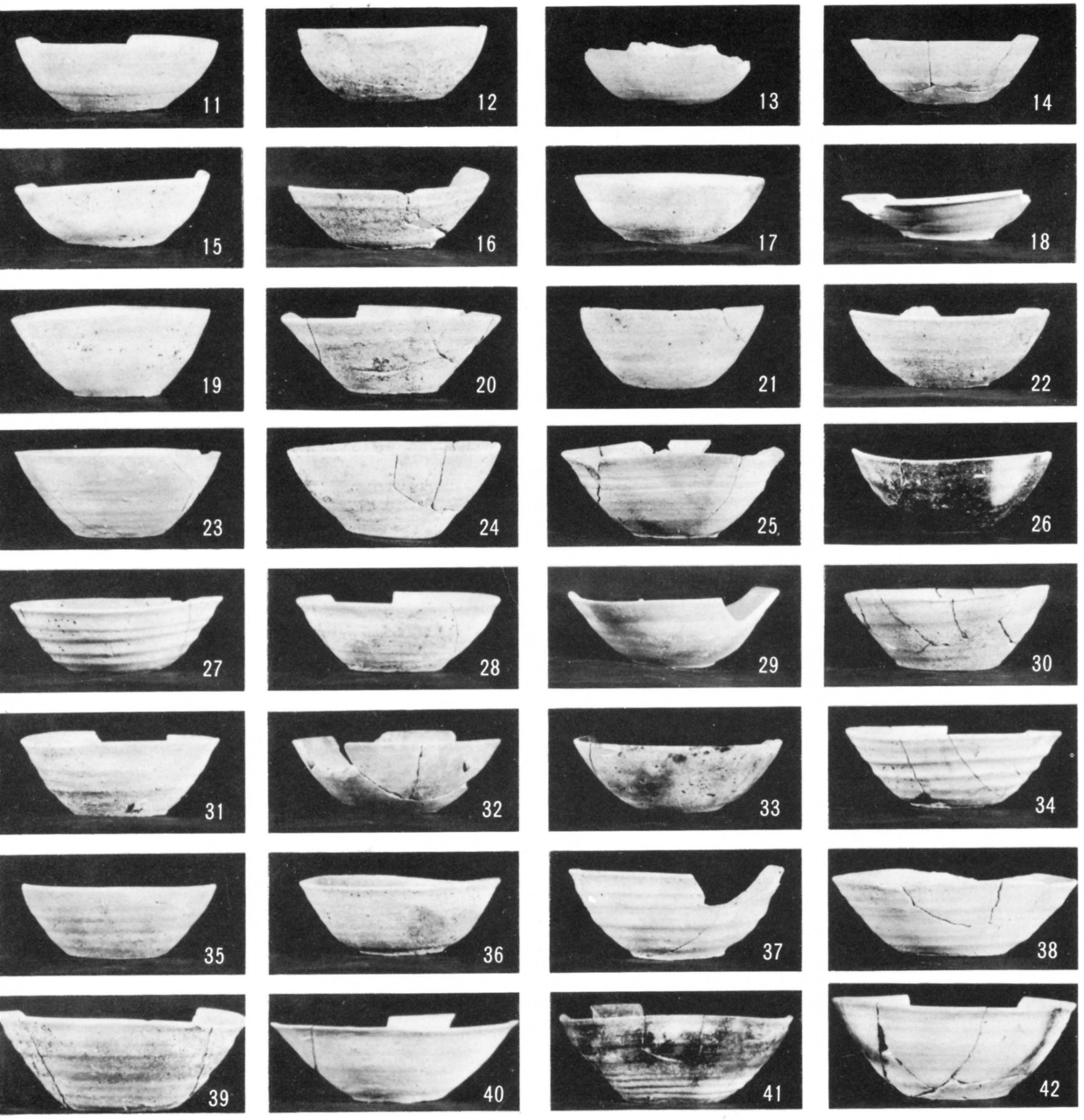
SD250・251
出土遺物



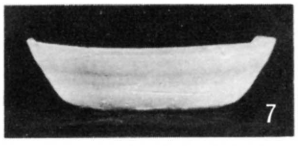
図版29

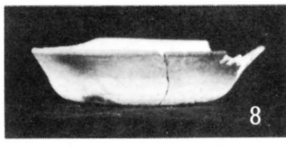


第４層出土遺物

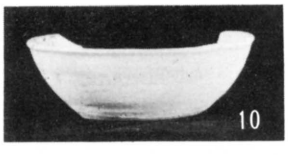


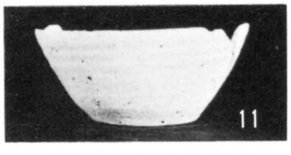
第５層出土遺物

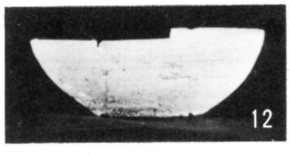


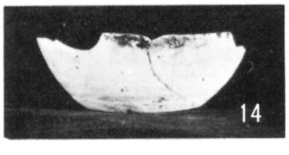


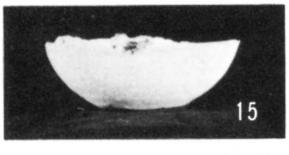
第５層出土遺物

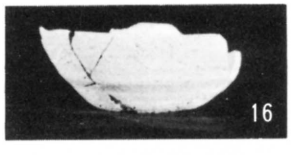


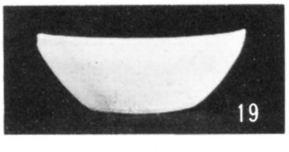


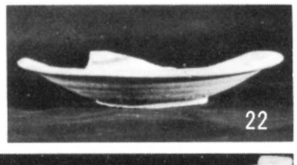


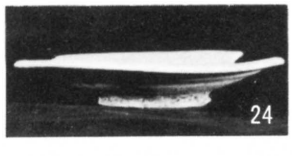


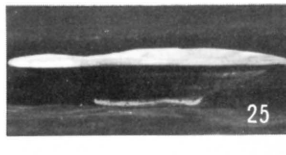


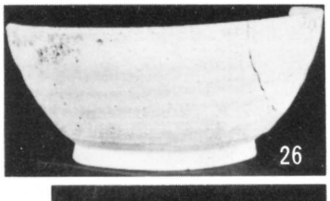


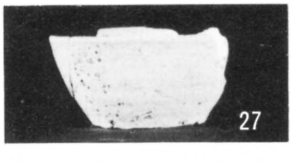


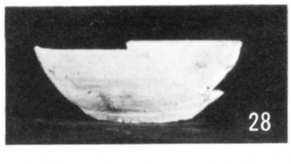


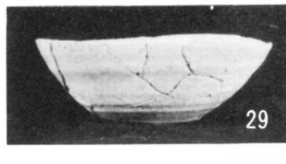


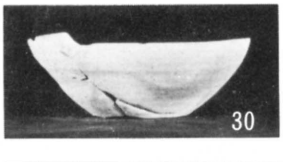


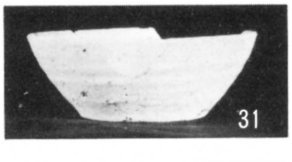


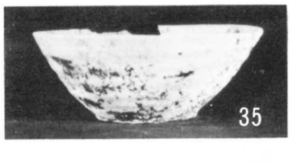


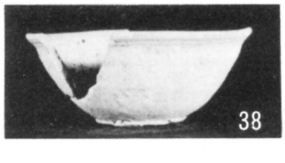


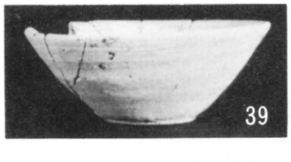


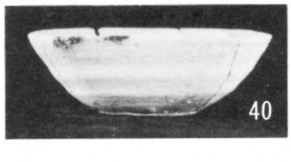


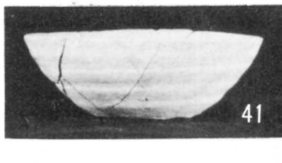




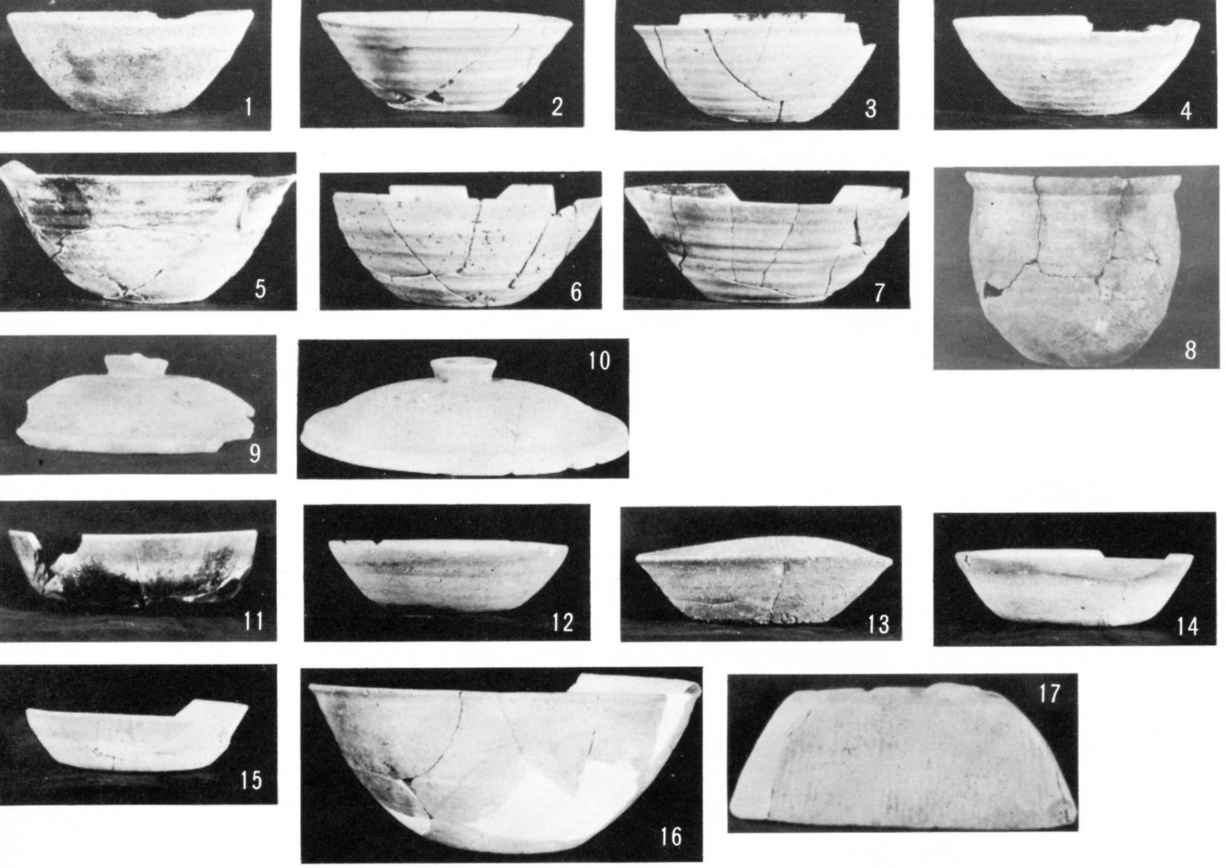




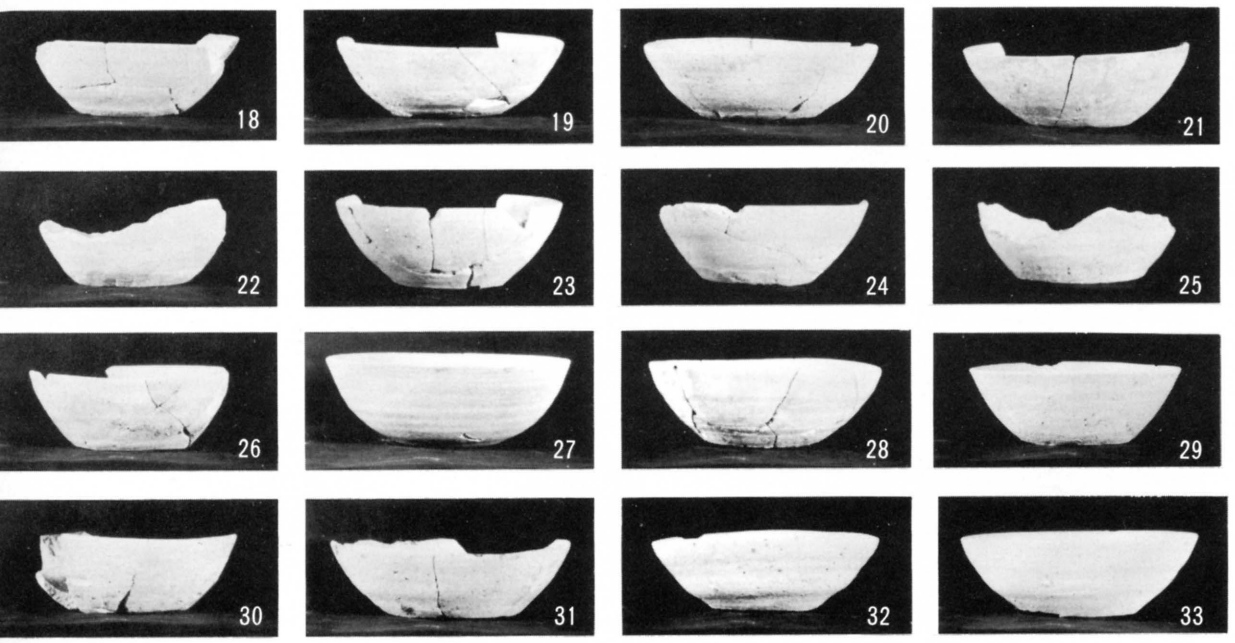




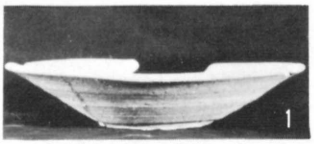
第６層出土遺物

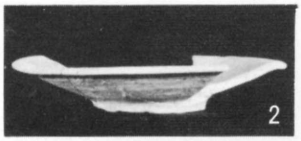


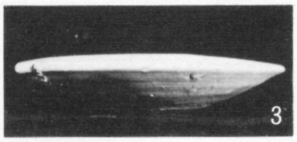
第６層出土遺物

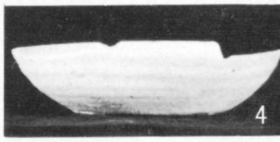


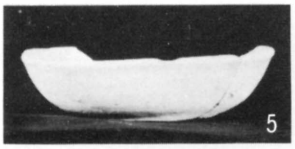
第７層出土遺物

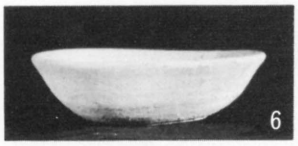


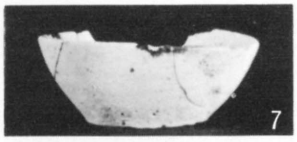


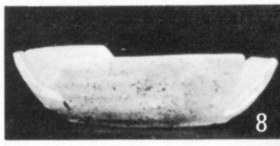


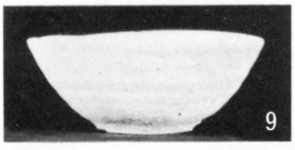


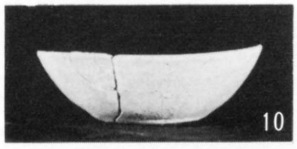


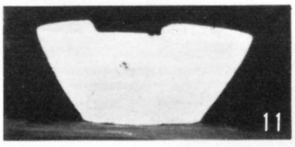


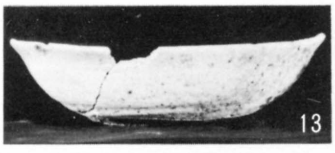


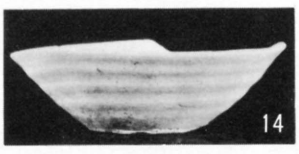


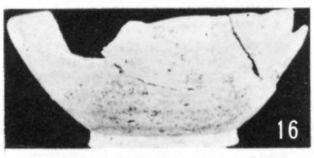


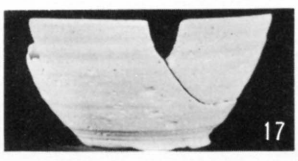


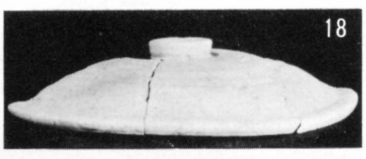


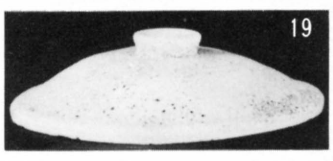


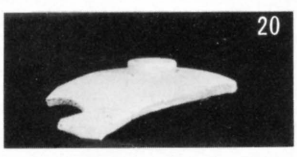


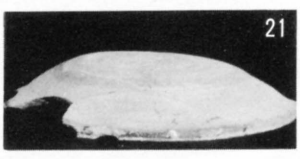


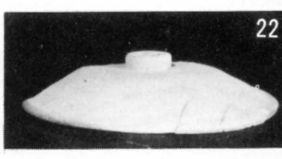


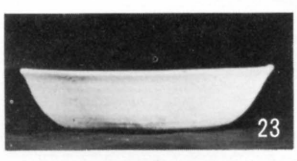


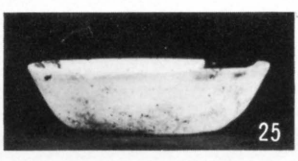


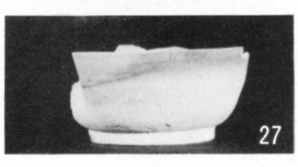


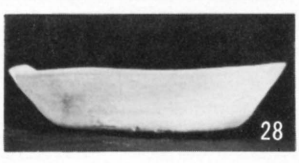


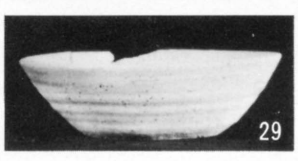


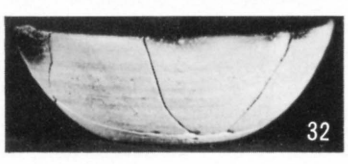


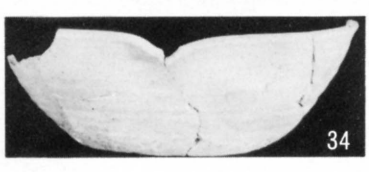




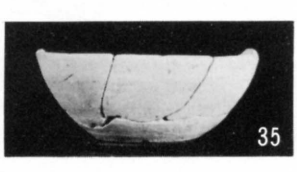


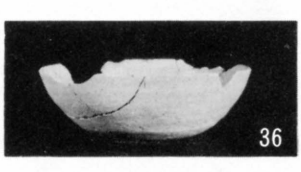


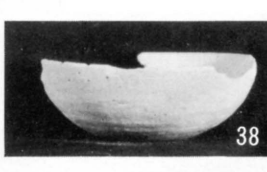




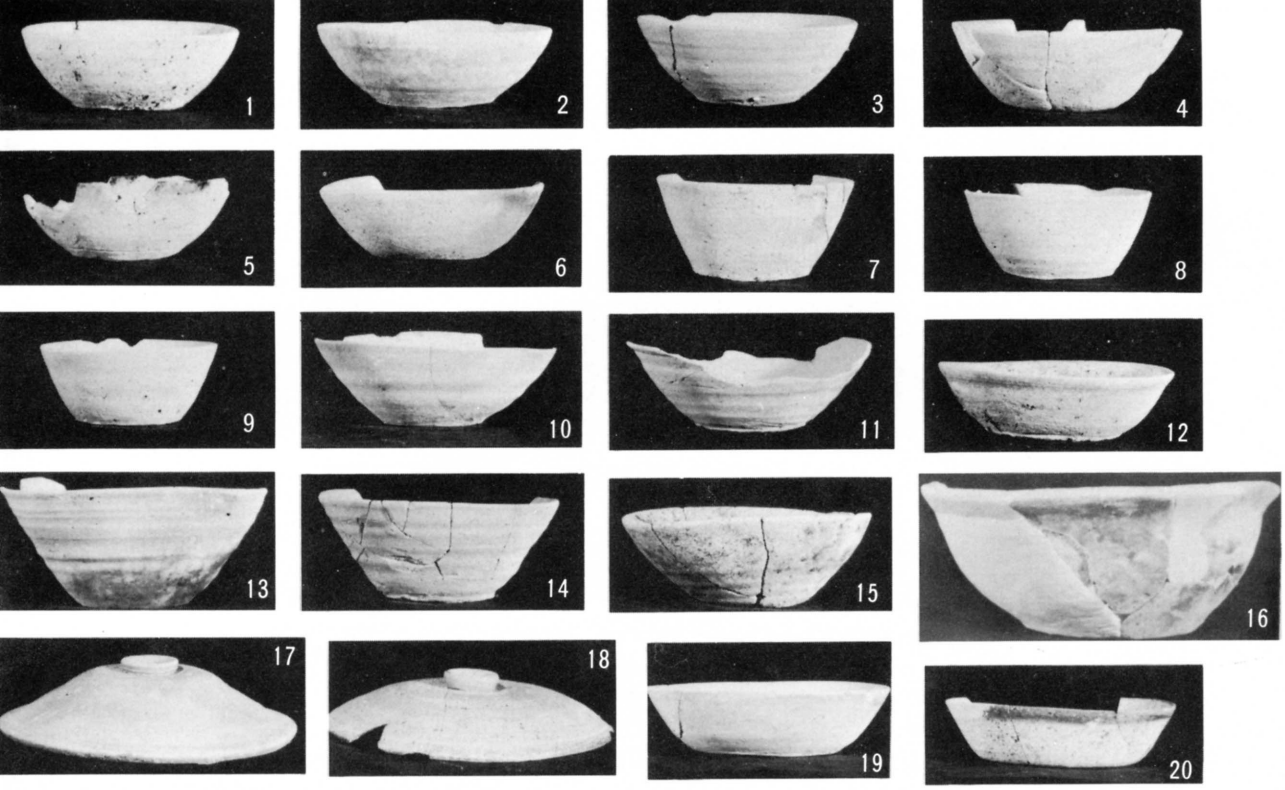
第７層出土遺物



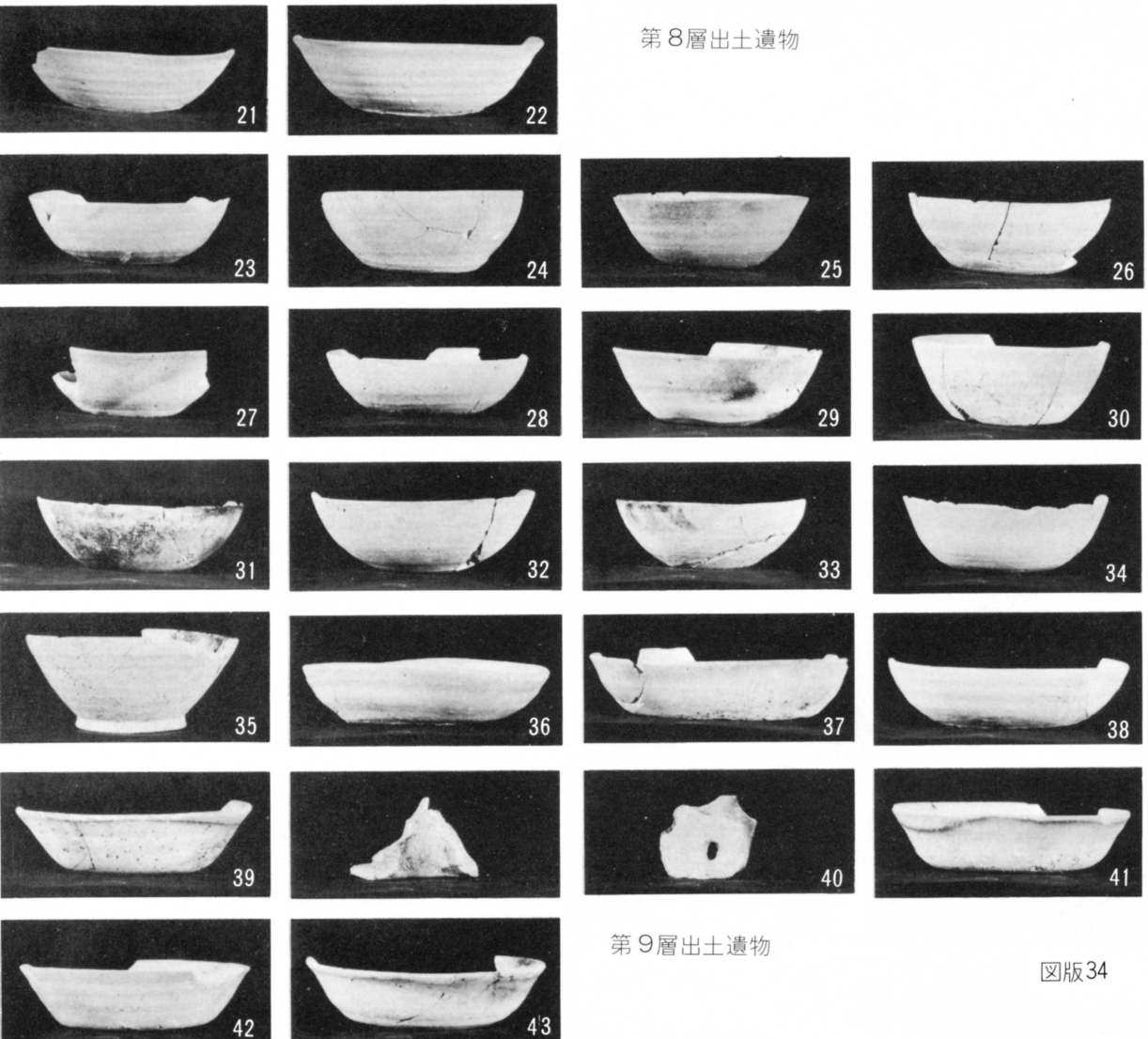




図版33　第８層出土遺物



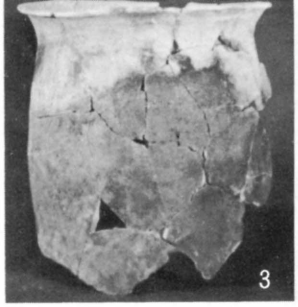
第8層出土遺物



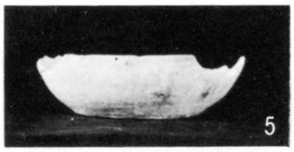
第9層出土遺物

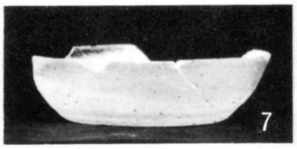
図版34

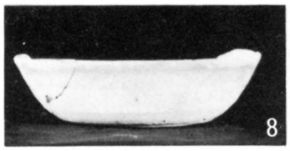
図版35

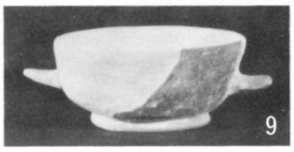


1～3　第9層出土遺物

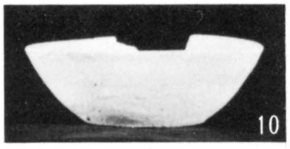


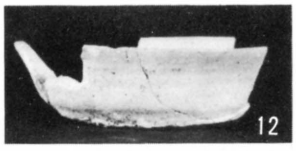


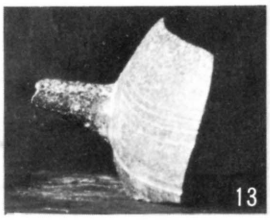


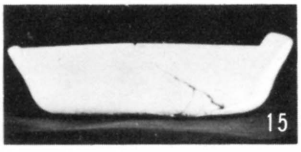


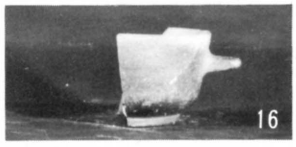
4～9　第10層出土遺物



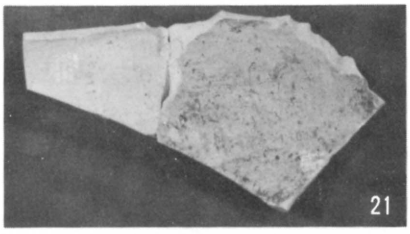


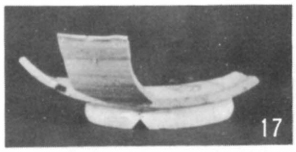


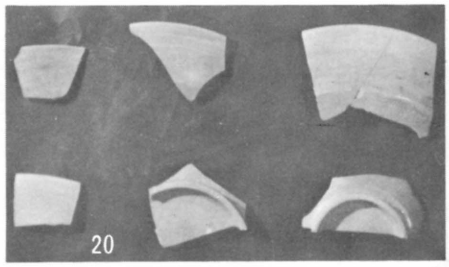


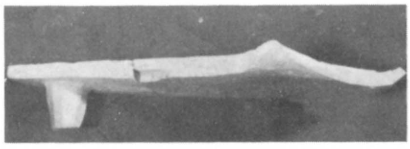


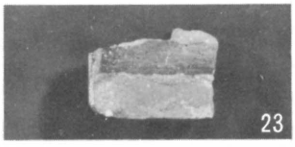
10～16
11～最下層出土遺物

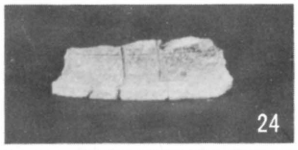


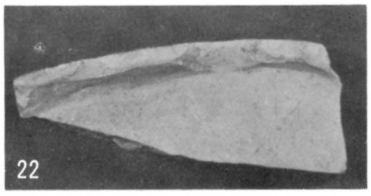


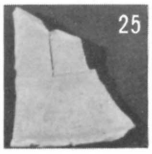




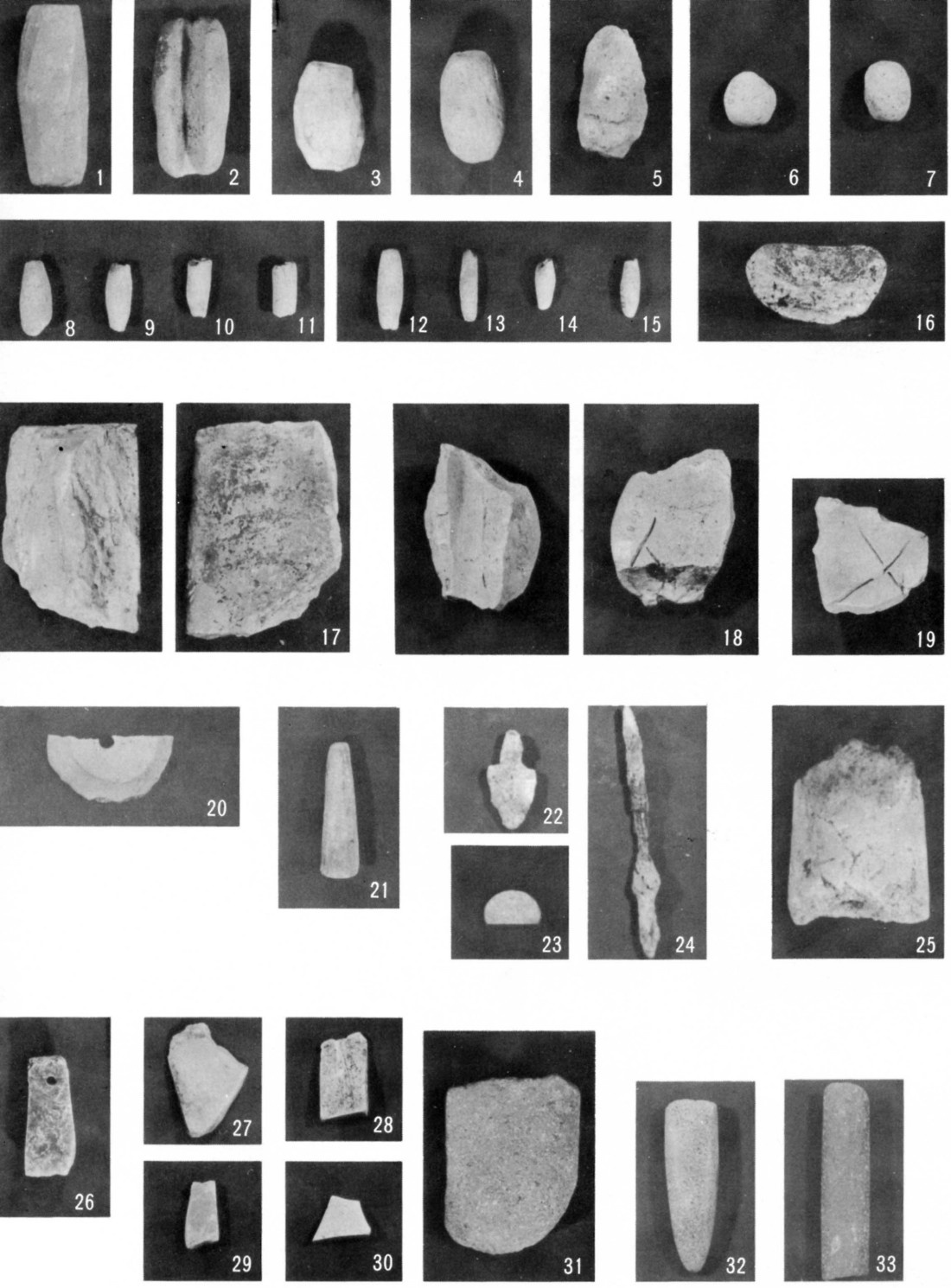






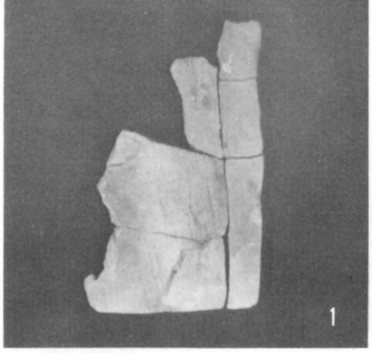


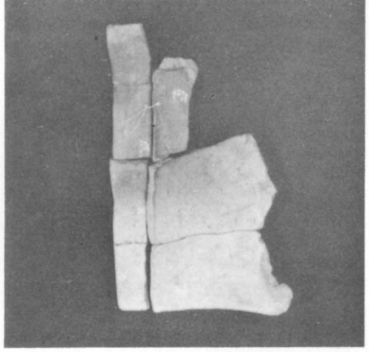
17、灰釉陶器　18、白磁　19、青磁　20、緑釉陶器
21～23、風字硯　24～26、円面硯

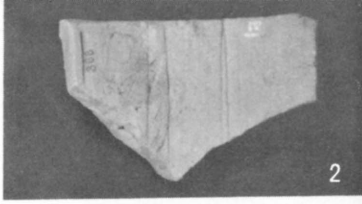


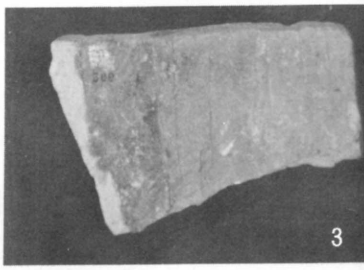
1～15、土 錘　16、坩 堝　17～19、塼形状土製品　20、紡錘車
21、石製品　22・24、鉄鏃　23、石帯　25、フィゴ羽口　26～31、砥石
32、石 斧　33、石 棒

図版36

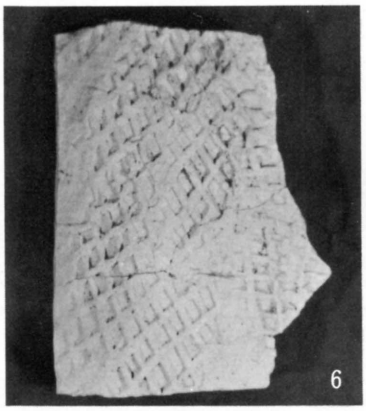


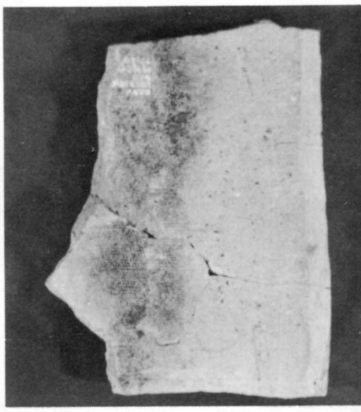


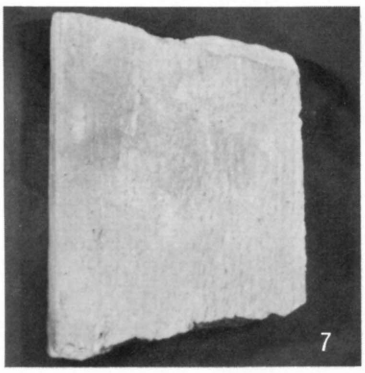


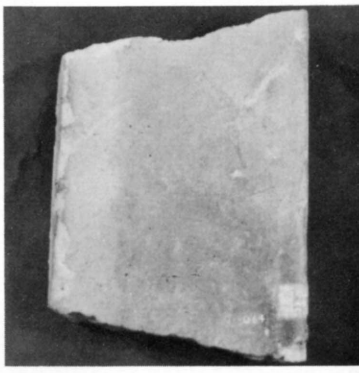


1～3 第16次出土瓦



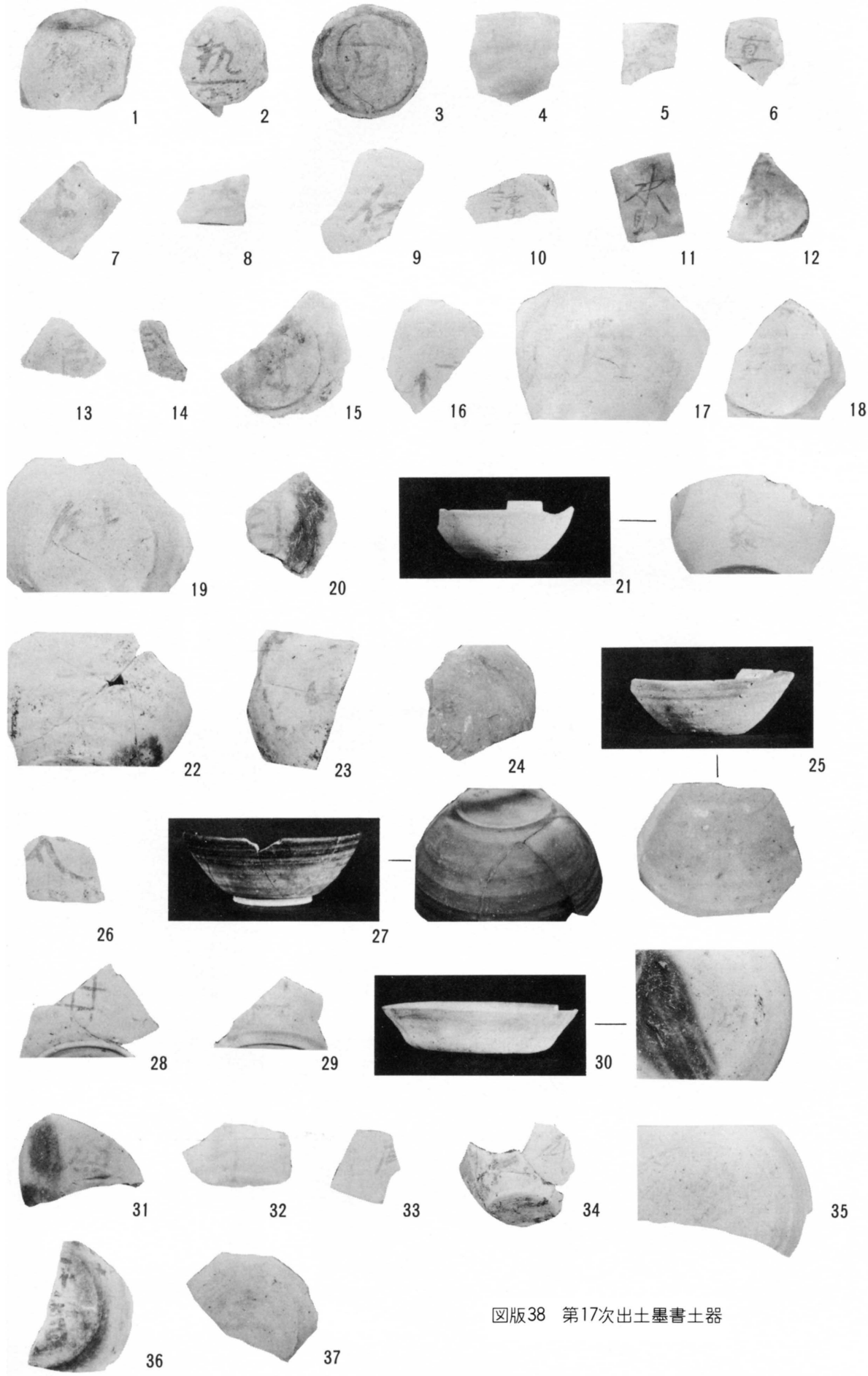




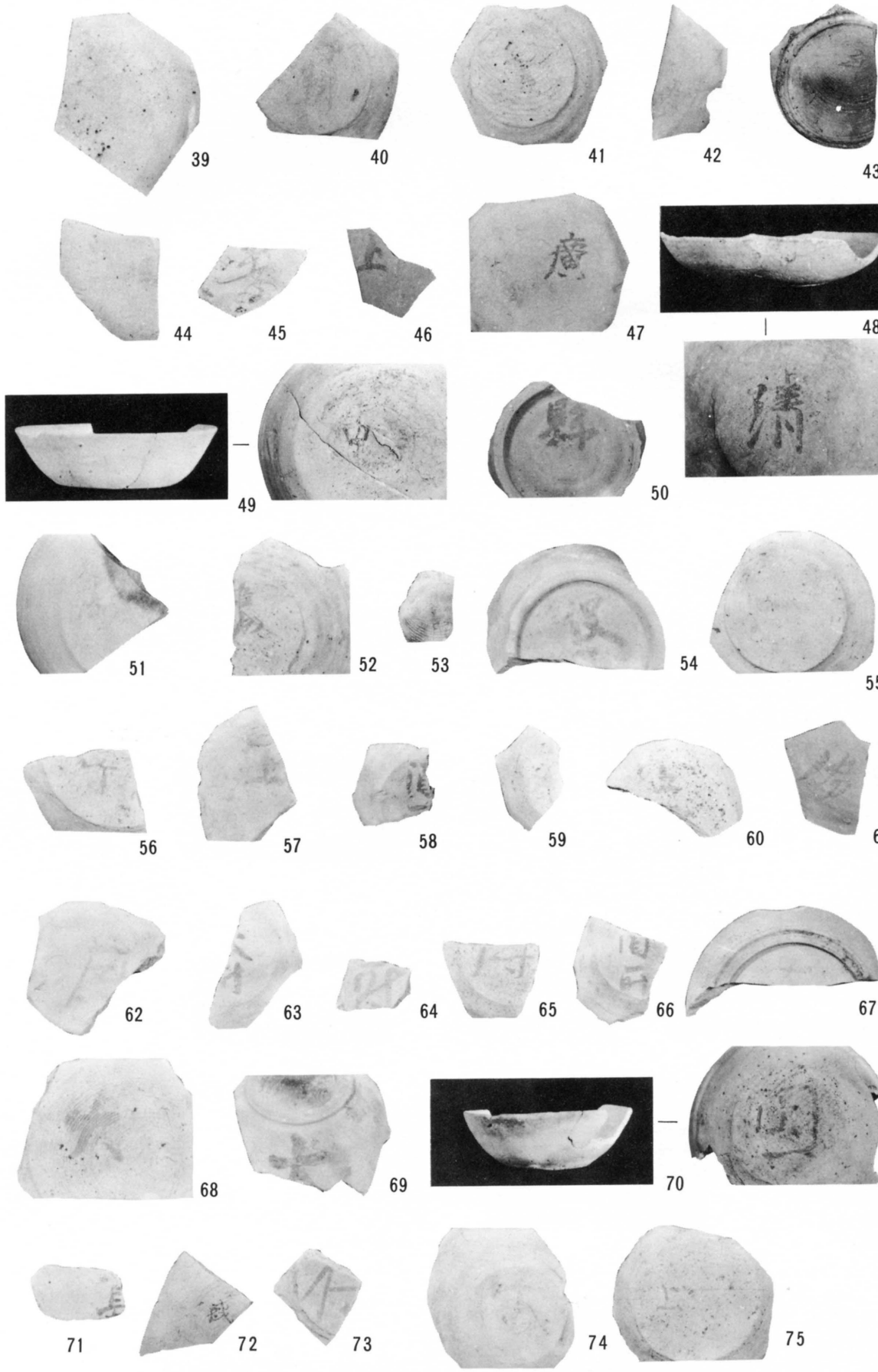


4～7 第17次
出土瓦

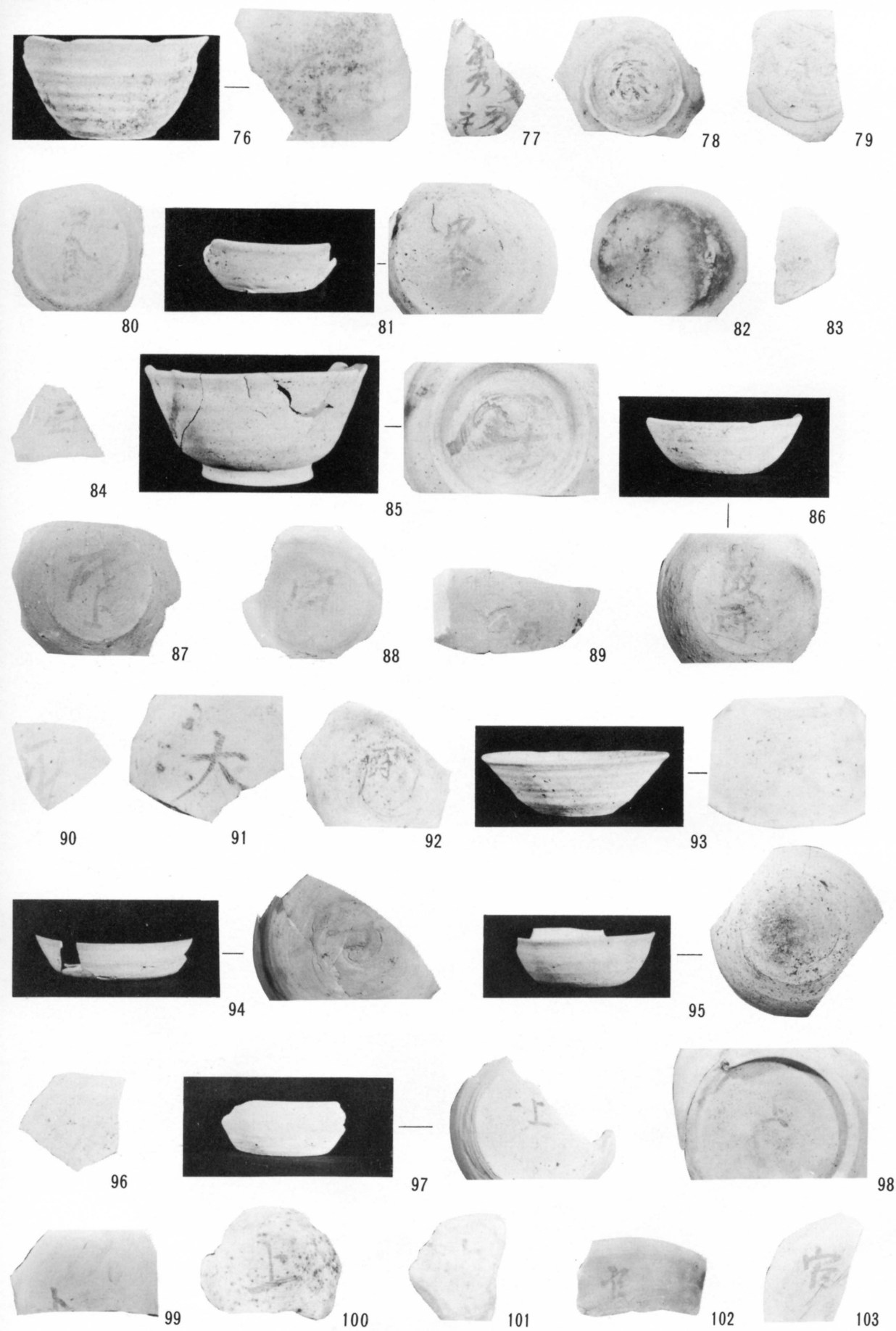
図版37



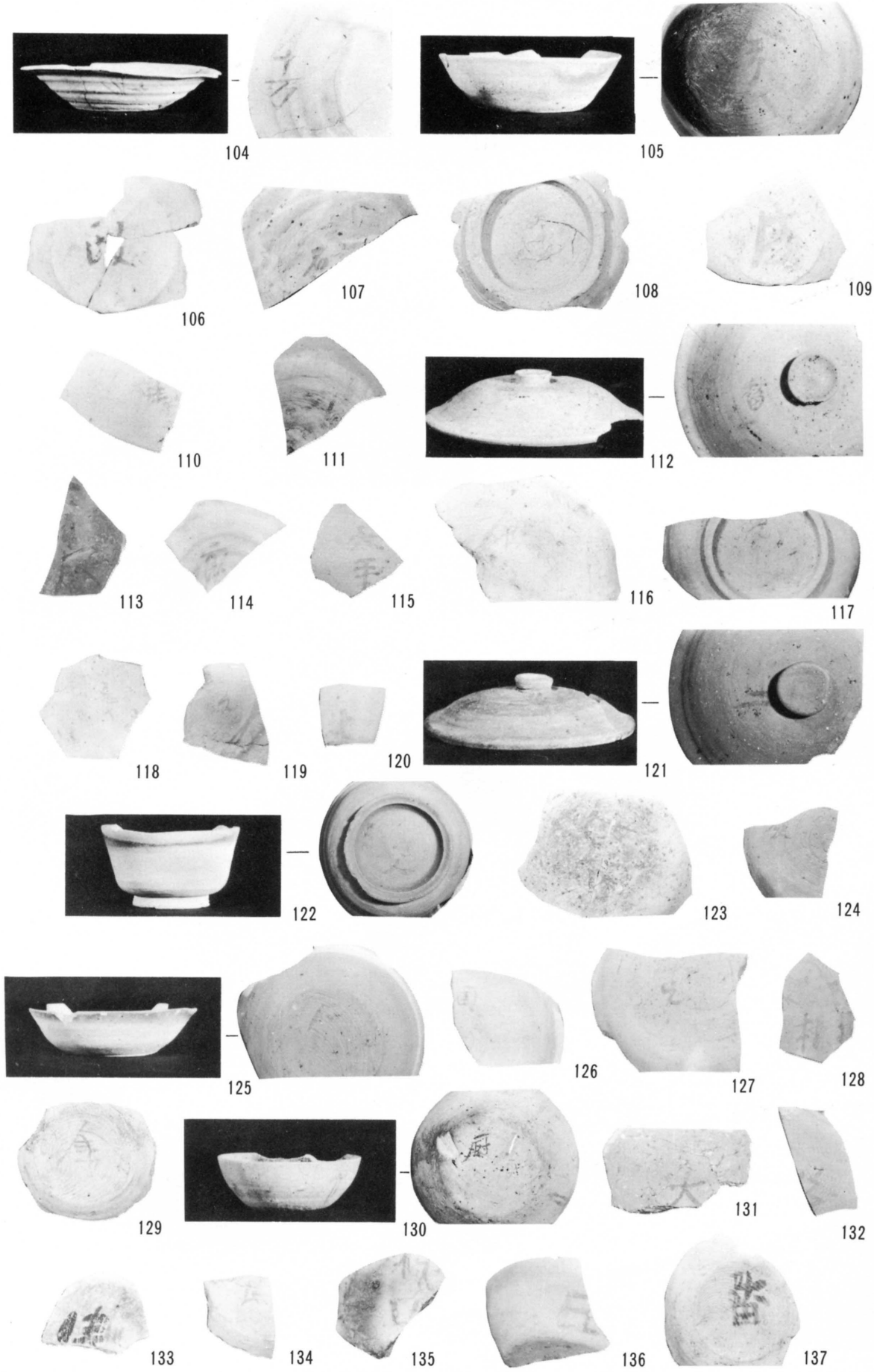
図版38　第17次出土墨書土器



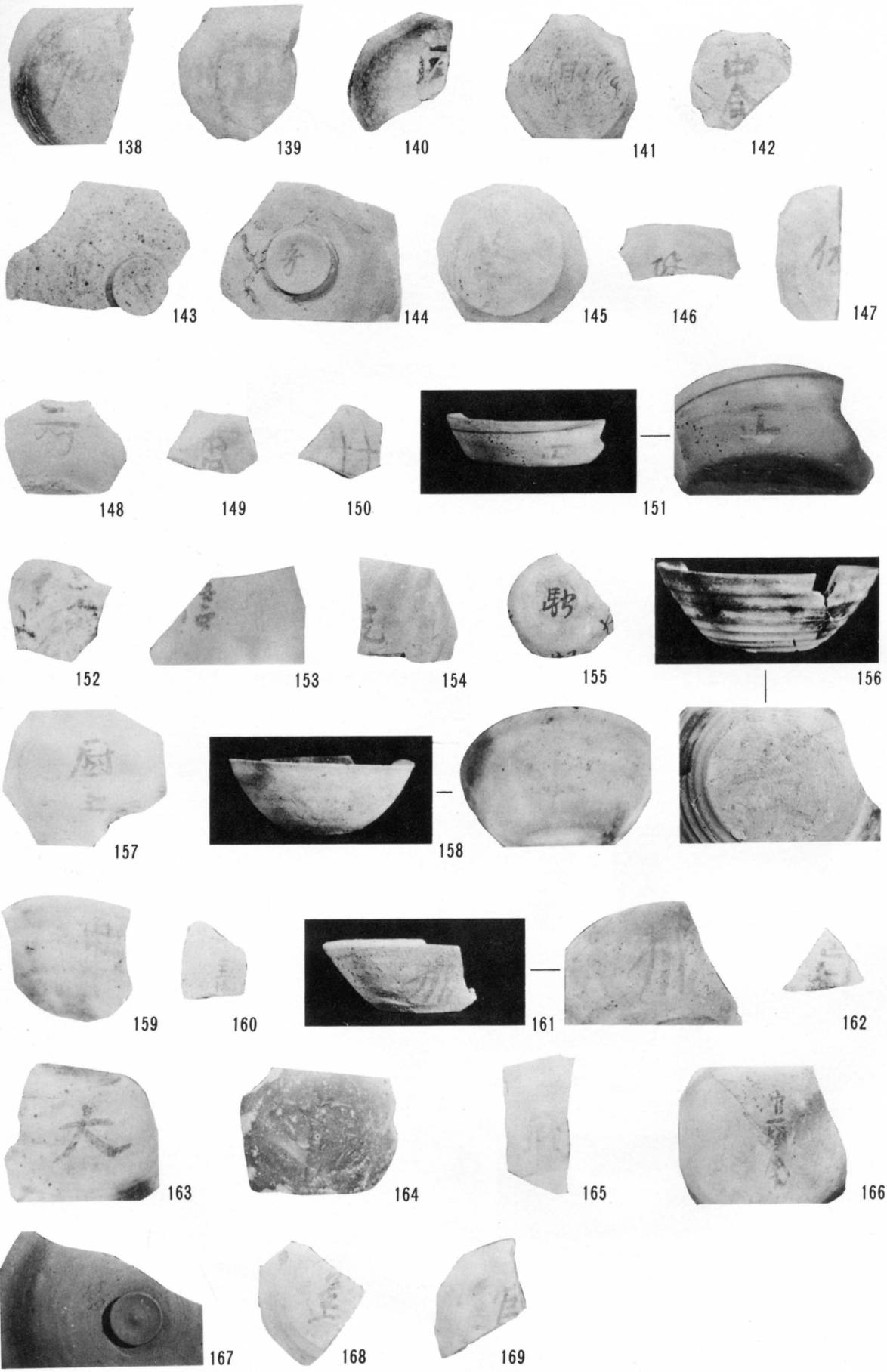
図版39　第17次出土墨書土器



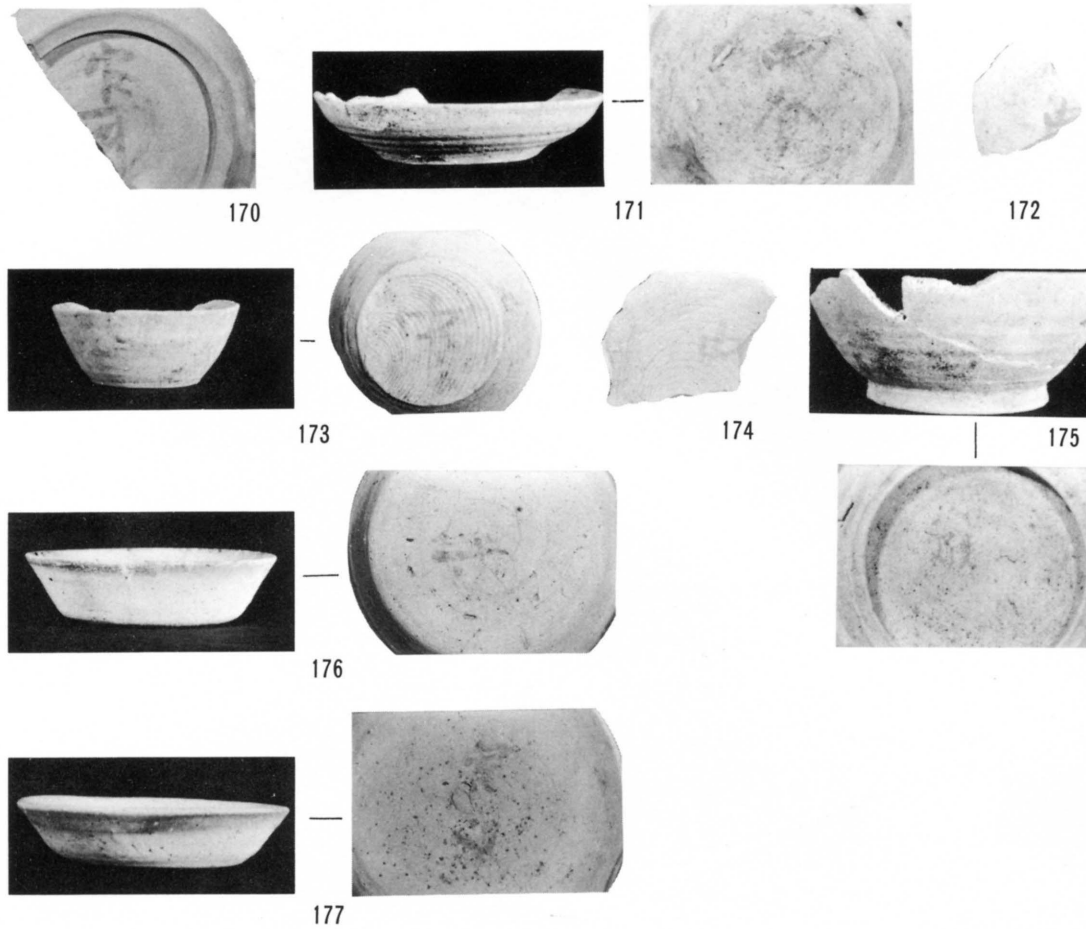
図版40　第17次出土墨書土器



図版41　第17次出土墨書土器



図版42　第17次出土墨書土器



図版43　第17次出土墨書土器

秋田城跡発掘調査事務所要項

Ⅰ 組織規定

秋田市教育委員会事務局組織規則　抜粋（昭和37年５月８日　教育規則第３号
最終改正　昭和47年７月20日　第６号）

第１条

３．第３条第３項に掲げる事務を分掌させるため、社会教育課に所属する機関として、秋田城跡発掘調査事務所を置く。

第３条

３．秋田城発掘調査事務所における事務分掌は、おおむね次のとおりとする。

一、史跡秋田城跡の発掘に関すること。

二、史跡秋田城跡の調査および研究に関すること。

Ⅱ 発掘調査体制

1）調査主体

秋田市教育委員会　教育長　佐藤博之　　社会教育課長　佐藤貞雄

秋田城跡発掘調査事務所		
氏名	職名	所属
佐々木栄孝	主査	秋田市教育委員会事務局
小松正夫	主事	〃
菅原俊行	〃	〃
石郷岡誠一	〃	〃
日野久	調査補佐員	
柏谷光子	調査補助員	

2）調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所		
氏家和典	所長	
桑原滋郎	研究員	
進藤秋輝	技師	
平川南	〃	
高野芳宏	〃	
鎌田俊昭	〃	

発行　昭和51年3月　　秋田市教育委員会　　印刷　㈱　三戸印刷所